

演劇会議

発言 「空転と空回り」	後 藤 陽 吉	1
■ 特集 土屋清・追悼		
土屋清の闇の深さについて	広 渡 常 敏	2
土屋清君のこと	仲 ・ 武 司	4
雨と雪の中で	飯 田 信 之	7
「 $E=mc^2$ 」そして海	中 沢 研 郎	10
追悼・土屋清	藤 沢 薫	11
好敵手を失った	猿 渡 公 一	13
土屋さんのまなざし	下 村 清 一	14
「河」—1988年	岩 井 里 子	14
「星まつりの夜へ、旅して」	土 屋 時 子	16
略年譜		18
□ 西会議・ワークショップの体験	岡山 緑・渡利知美	19
<ブロックの頁>奥羽 「オラホはオラホ」	藤 原 浩 平	22
■ 劇 団 通 信		29
国民文化祭について	梶 武 史	46
劇団はぐるまの「紅鼻子」総括によせて	萩 坂 桃 彦	48
宇野さんは私の演劇の師	大 橋 喜 一	52
□ 劇 評		
心を搏たれた「神戸庶民伝」3部作	小 松 徹	57
中部B1987. 11~1988. 3までの上演から	丸 子 礼 二	65
観劇雑感	萩 坂 桃 彦	68
■ 戯 曲		
茜色の氷原から帰って来た男	境 野 修 次	77

この夏は札幌で逢いましょう

『全日本演劇フェスティバル'88インサッポロ』

を成功させましょう!



劇団さっぽろ'87年度上演戯曲集

1) 戯曲

松谷みよ子作・高坂 純脚色 「やまんばのにしき」
矢作 京介作 「とべとべヒコーキ乙型2号」
本山 節弥作 「赤どじょう」
松岡 義和作 「まわせ水車」
斉藤 隆介作・吉川 雅喜脚色 「ゆき」



2) 劇団の歴史

3) 舞台写真

4) 座談会「劇団の現状と展望」

定価 2,000円
予約(7月・7月中旬)時
払い込みに限り1,800円
(送料とも)

劇団債募集のお願い

私たち劇団さっぽろは、昭和51年に現在地(宮の沢)に稽古場を建設し、この12年間に「とべとべヒコーキ乙型2号」や「常紋トンネル」など30余作品を創り上げて来ました。しかし、時間の経過と共に床や壁のいたみ、防音の問題など、より質の高い作品創造と団員の厚生面などから、稽古場の改修と事務所(プレハブ)の改築が急務となりました。が、劇団をとりまく経済状況は悪化しており、積み立て金などの財源が残金ながら確保されておりません。

そこで「劇団さっぽろ債券」を発行し、この計画の財源としたいと考え、多くの皆様方の御支援、御協力を心からお願い致します。

記

- 目標数 1千口
- 債券 1口 1万円(年利率は単利で4%です)
- 償還 2年間据置後、お申し出より償還致します
- 振込方法 郵便為替 小樽8—13598 株式会社劇団さっぽろ

<稽古場・制作部>

〒063 札幌市西区手稲宮の沢485-41
☎(011) 663-6259

<フェスティバル事務局>

〒063 札幌市西区琴似2条5丁目400
斎藤アパート2F ☎FAX (011) 613-0576

劇 団

さっぽろ



■ 劇団名芸
「FALRY
TALE」
作・北村 想
演出・成田美佳



■ 劇団未来 「ああウェディングドレス」 作・和田葉子 演出・森本景文



■ 劇団同胞
「熱海殺人事件」
作・つかこうへい
演出・本田弘幸

■ 劇団京芸 「ハイキング」 作・別役 実 演出・藤沢 薫



■ 演劇集団土くれ
「奇跡の人」
作・ウィリアム・ギブソン
演出・福田悦雄



＜発 言＞

「空転と空回り」

後 藤 陽 吉

二月六日、劇団はぐるまのお藤元、岐阜で全リ演の議長団会議がひらかれた。
この六日がどういう日であったか、そう言われても返答に窮しようが、あの浜幸、衆議院の予算委員長が突如進行中の委員の発言を封じて、委員長席のマイクを通して、あらぬ発言を強引にし始め、それが原因で審議はストップ、国会は空転、やがて委員長辞任ということになったが、その事件が発端した日であった。折しも議長団は演劇会議の萩坂さんを含めて食堂に居たのである。
審議を生中継していたNHK TVは六時半きっかりに国会でのそのドラマを断ち切った。そして尚、七時のニュースにその事件は流されなかったとのことである。
しかしそのドラマはあまりに唐突で、非民主的で、子供にだってわかる程にバカバカしいものであったが、垣間、今日の日本の政界を流れているあるファシズムの片鱗をそこに覗かせてくれた。中曽根後とみにそうした反動の本質を隠している竹下自民党内閣にしてはお粗末に過ぎた事件でもあったが、まあどのように取り繕うと、ブラウン管は事実をありの儘見せてくれたのである。つまりは革新政党のある議員の政府の政策への鋭い批判追究をかわすべく、浜幸が勝手放題にマイクを奪ったのである。正に政治上の対決の予先を他へかわそうという暴挙であった。であったからこそ世の良識が、浜幸にしかるべき決着をつけさせ得たのであろう。

私は思った、若しあの事実がテレビに流れていなかったらあの事件はどうなっただろうか。二・二六事件の真相も今日まで葬られていた。NHKが直後の七時のニュースに流さなかったと聞いて今更そら怖しく思った。

その思いも国民の一人としての感想であって一向に差支えないのだが、しかしさてこうした問題を人間や社会の真実を描き、進歩発展をねがうリアリズム演劇を標榜する立場でみる場合、それはどのように創造の上に展開され得るのだろうか。

確かに今日の日本の現実、国際的な諸関係を含めて事態が複雑で、その本質や展望を見えにくくしている。私共の演劇においてはもとより、他の芸術分野においても多様な方法の探究は、こうした現実から出てくる必然的な結果とも言えよう。であるから多様であることが問題なのでなく、真実や本質に迫る上で、例えば私自身、感性的認識の貧しさや創造上の力不足のために、只、事態の周りを空回りして終わってはいやしないかと省みたい。全リ演も今年、結成二十五周年。この間の活動を検証すると同時に、先ずはこの夏の『演劇フェスティバル・88インサッポロ』を北海道の仲間と成功させること、西・東それぞれの課題、個々の集団の課題を果すことだ。今、全リ演創始者の一人、東の黒沢参吉、西の土屋清、そして遠くは弘前の佐久間雄二は既に現世に居ないが、きつとこの世の宙で、降りれる場所を探して、背中の翼を羽ばたかせているにちがいない。



■ 劇団やませ
「赤い海」
作・証谷伸夫
演出・佐々木洋二

■ 劇団どろ

「ブンティラ旦那と下僕マッティ」

作・ブレヒト 演出・合田幸平



■ 劇団支木「とおりゃんせ」作・岡安伸治

＜おねがいとおわび＞

◇写真には必ず劇団名、演目、作者名（翻訳劇には訳者名も）と演出者名を書き添えて下さい。

◇劇団すがおの「有王塚由来」のすてきな写真は残念ながら次号送りとなりました。



特集—土屋清・追悼

土屋清の闇の深さについて

広 渡 常 敏
(東京演劇アンサンブル)

二月二〇日の夜、土屋清のいない月曜会の稽古場で『河』の読みがいこにたちあう。去年の十月四日、殆ど終りに近い体力で氣力をふりしぼって、土屋清は『河』のキャストイングと演出ノートを示したという。岩井里子さんがまとめた土屋の話の記録を読む。土屋清が逝って三ヶ月とちょっとしかたっていないのだが月曜会の稽古場には悲しみをのりこ

えた、ある気魄のようなものが流れている。若い土屋夫人も健在だ。読みがいこというものはそこに何が書かれてあるかを読みとろうとするものなのだ。しゃべりかたの上手下手なんかどうだっていい、いいまわしの工夫なんかやるもんじゃない、戯曲に何が書かれてあるかを見つけることだ。戯曲の奥にひろがっている作品空間を読みとることなのだ。演出

家の解釈にしたがってセリフを組み立てようなどと考えるといけない。そんなことをやると作品のポリヴァレンツ(多義性)な空間が消されてしまう。月曜会の人々は一九六三年の初演以来これまでに四回五回とこの作品を上演しているのだが、はじめての上演のように作品空間への嗅覚をはたらかせて『河』を読みすすんだ。土屋が言ったという『初演の舞台がいい、初稿の本がいい』という言葉を探るように嗅ぎわけるように、疑問と模索と共感が入れまじって、まったく新鮮に『河』は読まれていった。そしてぼくもその流れの中でいっしょになって土屋清を読みすすんだ。ぼくの体をじいんとつきぬけていくものがある。今は逝ってしまった土屋清への惜別の感

情にちがいない、おそらくそうなのだ。だが惜別だけではない、新しいよろこびにも似た氣持もあった。土屋清の作品空間をとり囲んでいる、この深い闇はなんだ。おどろきに近しい新鮮な発見がぼくの体を下から上へ、こみあげるようにつきぬけていくのである。

たぶんそれは『河』という作品が持っている深い闇についての共感だ。あるいは土屋清の魂のなかの、無音室のような空洞の闇にぼくが吸いこまれていくといったぐあいのものだ。一九二〇年代ドイツのノイエ・ザッハリッヒカイト(新即物主義)の絵の数々が、そしてやはり一九二〇年代ロシア・アヴァンギャルドのカオスのような渦巻きが、土屋清と峠三吉の精神と重なって動くのを、ぼくは見ると思いがした。『河』という作品の奥に潜む闇は、ドイツ・ノイエザッハリッヒカイトやロシア・フォルマリズムの闇の深さと通底するものを持っているのではないかというおどろきが、ぼくの心を鮮烈に染めていく。

読みがいこが終わってなにか感想を言わなければならぬ番になって、月曜会の人々の前でぼくは口走るように言った。——『河』はみんながよいと思うよりも七倍くらい立派な作品だ。奇跡的にいい作品だ。そして

これを創り出したのは土屋清の人間に対する誠実さだ。土屋清はみんなが感じているよりも一〇倍くらい、誠実さをつらぬいた人だと思う。今夜の稽古を聞いてぼくはそう思ったとぼくはしゃべった。

敗戦後に芝居をはじめた土屋にしろぼくにしろ、この国のプロレタリア演劇以来の、つまり一九三〇年代の意識のなかで演劇を考えたはずなのだ。ところが土屋の『河』には一九二〇年代の意識とでもいうべきものが流れている。第一次世界大戦後のドイツの焼跡から出て来たブレヒトのノイエ・ザッハリッヒカイトの闇が生きている。そしてまた、一九二〇年代ロシア・フォルマリズムの、あのポリフォニー(多声的)な、ポリヴァレンツなカオスの空間が生きている。土屋清の人間に対する誠実さが、第二次大戦後のこの国のリアリズム演劇のワクをつき破ったのだ。ふりかえて考えてみるがいい、久保菜をはじめとする『リアリズム』演劇がこれまで一度も創り出したことのない演劇の空間を、闇を、『河』は内在させている。

ぼくは土屋の追悼文だから土屋に甘い点をつけているのではない、土屋清についてのぼく自身の不明を告白しているのだ。ぼくは土

屋の追悼文でぼくの我田引水を展開しているのではない、土屋清を思うことでこれからの芝居するぼくの心を確かめようとしているのだ。生前の土屋清とぼくは三度四度、ぼくらが一九三四年以来の社会主義リアリズムから脱出しなければならぬことを話した。夜を徹したこともあった。『リアリズム』をいっているこの国の演劇は骨がらみスターリニズムの理念から抜けることができないでいる。骨身を削る思いをしなければ……そんな夜を重ねたと思う。ぼくらの仕事の出発点に、原点に、ロシア二〇年代のアヴァンギャルドの壮大な運動を据えなければならぬのだと、土屋とぼくは話しあったものだ。うん、うん、と土屋はうなづいた。そして土屋はすでに一九六三年に、そして一九五〇年の八・六の戦いの中に峠三吉に、紛れもないその出発点を、原点を見ていたのである。月曜会の人々の読みがいこでぼくはそれがわかったのだ。

(一九八八年二月二五日)

土屋清君のこと

仲 武 司
(関西芸術座)

土屋清君が「演劇会議」57号(一九八四年八月)で「八私にとっての西リ演史」のサブタイトルで一文を書いている。

「私どもの標榜するリアリズム演劇の思想が、時代にどうつきささってきたか、つきささらなかったか」を自己検証し、自己の原点・古典を掘り下げたい。その物指しに相当するものが、戯曲「河」なのである、といっている。

やはり「河」をぬきに彼を語れないと、今回改めて初稿から四稿までを通読した。そして先の一文と重ね、その改稿変遷の一端にふれ、土屋清と全日本リアリズム演劇会議(主として西リ演)とのつながりに思いを馳せた。私が彼を知ったのは、西リ演設立準備のため西日本をかけずり廻っていた頃ではあったが、当時、近畿地方は私・中国・九州地方は

主に「はぐるま座」の日笠世志久が担当していたこともあって、当初はあまり深いつきあいはなかった。

一九六三年、西リ演第二回総会で、副議長であった諸井条次の、叙事と抒情の統一という問題提起があり、すでに「河」の初演直後であった土屋君に大きな共感を与えた。

作品の主人公で、抒情詩人といわれた峠三吉が、新たな時代の流れの中で民衆と共に生きようと苦悩する姿と重なり合って、諸井発言が、創造方法論として彼をとらえた。

他日、これが西リ演への強い信頼となったと私に語っていたのが印象に残っている。

いうまでもなく「河」は、広島にもたらせた人類初の原爆による惨禍を世に訴え、再び核兵器の使用をゆるさないと立ち上った民衆の、反核・平和運動の中で、詩人峠の生きざ

まを中心にえがいている。

そしてこの一編の戯曲に、彼は数回もの改稿作業をつづけた。

いま改稿過程についてくわしくはふれないが、ただ七〇年に京都で催した「作家演出家研究会」で、ゆれゆく心情を吐露している。

初稿以降、峠の友人である絵画き大木の形象に、芸術至上主義的色彩を強めることで、峠と対比させ、運動への傾斜と質をより浮きぼりにさせたこと。

また、当時日本共産党の分裂による、合法、非合法の方針の中で、非公然活動を余儀なくされる青年活動家・見田の悲劇性と関連してのエピソードでの扱い方。

労働者増田をして、党のあやまった方針への批判。政治と芸術との関係を説くくだり。ただ、これらの問題の取捨選択が具体的にどの様な時点でおこなわれたかは、いま記憶にないが、土屋君はこの席上、自己批判を含め新たな思考を熟考し語っていたのを思い出す。

その背景には、部分核停条約をめぐる評価や「いかなる国の核実験にも反対」を運動の原則にするかどうかなど、原水爆禁止運動における亀裂。あるいは日本共産党の、いわゆ

る50年問題の総括が深められ、さらに文化の問題にまでひろがりをみせたことなどで、彼は、これまで自分の射程距離ではとらえることができなかった新たな問題が、次々と明らかにされていった。こともあり、政治と芸術の課題がどうしようもなく重くのしかかり、右に左に長く揺れ続けた、ともいっている。

たしか西リ演の第三回総会ぐらいだったが、「革命的人間像」をえがこうといわれた時期があった。こうしたことも、時には改稿に影響を与えたかも知れない。

政治的認証が深まれば、それがそのまま芸術度の結晶に結びつく短絡的に考えた初步的な間違いがあったとも一文で述懐している。

研究会で、私は第一稿より初稿の方が良かった、と発言しかけてやめた。

彼の真摯な自己批判や歴史的状況、認識と「河」の改稿にかける作家としての責任感に圧倒され、私は席上で単なる感想だけ述べることをためらった。

記録によれば「河」は広島で五回。全国十五劇団、二十九都市で上演されている。全リ演はもちろん、演劇史に残る作品であ

る。

土屋君と西リ演の関係にふれると、一九六七年、例の「はぐるま座」問題からその年総会の開催が不能になり、翌六十八年の総会で「はぐるま座」除名が決定。土屋君が西リ演議長となる。

六十九年、問題の後遺症から容易に立ちなおれず、西リ演活動が低調となり、総会への集集も悪く創立以来の小集会となった。

創立時より事務局担当していた私自身、心身共に疲れ、そのため新たに土屋君を中心とする事務局の集団体制による運営強化を図った。

彼はこの年「地域における劇団活動」「リアリズムの理論化」を提唱しているが、これは、「はぐるま座」問題で混乱した教訓からえたものであり、新たな西リ演運動の胎動のきっかけでもあった。

「テーマにおける積極性」「革命的人物像」などが評価基準であるかの様な、教条的な引廻し運動論からの脱皮であり、漸く「地域と劇団」という本来依拠すべき土壌と、創造性を深め合う運動スタイルの芽ばえでもあった。

西リ演がこれまでの自縄を解き、民主的・個性的な劇団の集合体となる状況に立ちかえ

たともいえる。

土屋君はこの年「星をみつめて」を書き、劇団自身の自主・自立性を問ひかけ、その創作体験から、若い作家の胎頭を期待して、広島第二回創作学校をもち、西リ演もまたこれを機に同作品をテキストにした、第一回創造ゼミナールをもっている。

土屋君の事務局長は二年間で、森本景文に引きつがれるが、この頃から「観客が見えない」「芸術・創造的力量をどう高めるか」「演劇の転換期ではないか」など、各劇団の衰退状況もふくめ、苦悩にみちた発言が目立ちはじめた時期でもある。

七十四年総会では、月曜会の「俳優自身の主体性が欠落している」と、いささかいらだった様な土屋発言がその場を緊張させ、それをきっかけに稽古場における日常的な創造性に論議が沸いた。

これまでの総会にあった硬直した、たて前の劇団論に一矢むくい、月曜会内での彼への寄りかかりを警告したのであるうか。

七十五年「はぐるま座問題と現実認識」の一文が総会によせられているが、いざれ機会があれば改めて論じたい。

翌年、劇団内で新しい作家の養成のために、

日常生活から各自の生き方の自己点検を通じた、創作活動を提案、何編かの習作を生み、その中の「仕立職人」を上演している。

その後、彼が「優良劇団を見習うよりは、主体的なサークル性をとりもどそう」と言っているが、全般的な政治・社会の状況と、各自の生活の中の現実が、どう切りむすばれているのかを肌でつかむことによって「見えないう観客」「何を求めているのかつかめない」論に対し自分が「何が訴えたいのか」の主体の確認に意をむけようとした試みのひとつであったといえよう。

彼は、劇作家としては寡作の方である。前記の作品以外、広島県下の農民一揆を題材にした「万灯のうた」。三好徹作をもとに「閃光の遺産」。北川幸雄「こどもセイルスマン第一号」があるが、労働争議を支援する「拳よ火を吹け」をはじめ、広島における民主運動と結びつけた数多くの構成劇を書き、演出している。

毎年八月六日が近づけば、原水禁世界大会文化集会で、煮えたぎる広島を創作・構成・演出してきた。

彼が残した数少ない戯曲の底流に、広島そのものの原点があり、核兵器への怒りがあり、

平和への熱い願いが、演劇人土屋清の魂を貫き通っていた。

この数年、彼と会うごとにマンガ「はだしのゲン」の進行が挨拶がわりとなっていたが、昨年、西会議運営委員会に病床をぬけて顔をみせ、あと一幕、といった。かたわらに付添う奥さんの、楽しみです。アインシュタインをはじめ米・独の科学者が登場するスケールの大きいものになりそうで、というその横顔を、彼はながめていた姿が今も思い出される。

土屋君の、時にはぼそりと吹き、時としては唐突に爆発する、一言居士的発言は何度か、会議の沈滞を救い、あるいは流れを変えていた。

土屋清君の、われわれのリアリズムとは、「河」の五度に渡る改稿を経て、「ゲン」によって立証するには、やはり残された時間が少なかった。

昨春秋、小春日和の日ざしの中で、土屋清君を広島郊外の斉場に送った時、今年六月、五たび広島で上演する「河」について、彼の改稿・演出プランの構想を岩井里子さんから聞いた。

めまぐるしく変化する状況に揺れうごいた時、土屋清君は、広島に心立ちかえること

によって、その原則性が支えられたのである。

◇ 〓 ◇

△在りし日の土屋清▽
一九七三年八月、東日本演劇フェスティバル（札幌・真駒内）にて。並ぶのは立川雄三氏（演劇集団未踏） 写真提供・塚田恒夫氏（劇団埼玉）



●特集——土屋清・追悼

雨と雪の中で

飯田 信之

（劇団さっぽろ）

八四年二月の消印のある部厚い封書が残った。原稿用紙十枚以上の土屋さんの私信と「ヒロシマ五人絵はがき」と広島文団連ニュース55号が同封されている。ニュースには、夏は終わった。おれたちの祭りは過ぎた、で始まる簡潔で活々とした土屋さんの文章が載っている。

前年の八三年の五月から八月まで、ぼくは五〇日以上も広島に滞在した。「河」の演出のてつだいであった。それは暑い夏で、七月はじめ広島空港に降りた時、ぐらっとめまいがした。こっちは北国の体質になっていたこととあるが、この時の稽古場は、戦後間もなく建てられた鋼材置き場が当てられていて、四〇度になることもざらで、あの日が戻ったようじゃ、の声を度々聞いた。

この仕事の依頼は岩井さんから電話で届い

た。四月で札幌も少し温かくなっていた。以前からの約束でもあったように、ぼくは即座に承諾した。

約束のようなものは、たしかにあった。

そのまた十年前、七四年の大晦日ぼくは広島駅の待合室にいた。劇団さっぽろでの「河」上演のため、元旦から土屋さんを訪ねたのだ。

新幹線工事のため正規の待合室はなく、寒々とした通路のベンチに酔った労働者が十人ばかり。元旦は冷雨の中で明けた。雨の中を福屋デパートから公園へ、まず峠三吉詩碑に再会し、工事で閉鎖中の資料館を横目に、中島町復原図まで歩いたところで、タクシーにした。土屋さんの家で写真や資料をかかえむくと、午後には年賀状の宛名書きで岩井さんの家に集まった月曜会の人々に紹介される。途端に「河」や劇団生活についての激しい議論

にまきこまれる。口火は土屋さんが切った。

わしらのこんどの公演は、50年問題をどう考えるかの色合いが強かったようなのう。ほんでも、本当に公演をやったよかったと思うとるんかのう、どうじゃい！。わいわい出された声は「演劇会議」28号に月曜会レポートとして記録されている。激論は翌日も続いた。

関係ない話はつかしとってごめん、と岩井さん。劇団さっぽろの稽古場と同じだと思いつつ聞いている。「河」のテーマは、人間の愛情をどう受けとめていくかの問題だ、としめくくったようだ。もういっぺん、札幌へ行ってみるか……と土屋さんがつぶやいた。広島を去る時、やっと雨は止んだ。

土屋さんが来札されたのは一月の末だ。小さな茶の華カバンひとつの軽装で、隣町からふらりと来たように。その後は稽古場につききりで、休憩時には演出席の前の床に、こちらに足に向けてゴロンと横たわる。小さなカバンから小さな木枕をとり出し、狭い稽古場だから、稽古場の真ん中に寝た形だ。くたびれましたか、いや、これがわしのくせじゃい。雪の降り続く稽古場だった。そして本番。緞帳が降りるやいなや、はいじゃ、とひと声、見送られるのはにがてだといって

ふらりと消えた。広島へ帰られたのだと思っていた。次の日はマチネーもあって、午後一時半の開演だった。楽屋に例のはにかむような笑顔の土屋さんの姿——いやじゃ、昨夜はどこでなにをしゃべったんね？と広島弁をまねて問う若い女性劇団員に、ちよいと温泉にのう……と照れる。その温泉が定山溪だったか、その後も聞きそびれた。楽屋の窓から、吹雪く札幌の街を見ながら、青森のオルグ時以降、他人の家に一週間も滞在するのは初めてだ——泊ってもらったばかりの下宿が50年代を想起させたか——、こんどは広島の「河」をてつだってくださいや、といって終演後、札幌駅からも千歳空港からも夜の本番のための電話が届き、たしかに広島へ帰られた。

追いかけるように、三月だったか、大阪で関芸上演の「河」を席を並べて観た。その夜、演出の小松さんの家で話したのだが、強い雨音の中で、広島も変ちくりんになりよるけん困ったことよのう、とつぶやく土屋さん。太橋さんの「ぼく生きたかった」から名越夫妻の話などが記憶にあるが、「河」の話は印象にうすい。多分、小松さんと話されたのだから。専門家の意見を聞きたいなどとおだてら

れ、そのまま広島へ行き、高尾さん演出の「銅の李舜臣」と小倉さん指導による太鼓の稽古を見せてもらった。稽古場を建てる予定の巳斐の丘に、めずらしく雪が降り積んでいる。同じ町内に名越さんの家があるという話だった。次は新しい稽古場を見に来たいといしゃべったかもしれない。

約束とはこのことである。あるいはぼくだけの思いこみだったかもしれない。八三年五月、広島へ出かけると、その立派な稽古場・広島演劇研究所は、ぼくの宿舎に当てられ、稽古は文団連で借りたビルの三階だ。近くに沖繩料理の店があり泡盛りがうまかったが、演出も土屋清でなく原洋子である。原洋子、実は岩井さんといえば春子役で制作もやるという。どうなってるのと問うても、はいじゃけんあなたにたのみよるんよ、と笑っている。土屋さんと稽古場で顔を合わせることもない。文団連の事務所や峠三吉没後三〇年の催し会場とかテン・フィート運動の映画の試写室とか、なによりも土屋さんの自宅で話すことが多い。ぼくが話す土屋さんが横になる。土屋さんが話すときぼくが横になる。ついには二人とも寝たまま話す。十年前を思い出す。だが「河」の話は出ない。「河」は、あなたに

まかせとるんじゃ、好きにやりやええ、という調子である。高校生平和ゼミナールの原爆瓦の掘りおこし、全地球的・宇宙的観点で核の問題を考えたい、大江健三郎の主張していること、「原爆犠牲者に捧げる音楽の夕べ」での作詩のこと、カナリヤ理論について、書けないでいる西リ演史のことなど。こうして話している間にアフリカで飢えて死ぬ子が何人いるか——暑い夏だったが、二人で話す日はどんより曇り日か、雨の日が多かった。叙情の時間だったのだろうか。

したがって、五月六月の稽古は岩井夫妻、高尾、小倉と「河」となじみの人もいたが、われわれにとって「河」とは何かを話し合うことが多く、劇団づくりの基礎といった体裁であった。七月になって、やっと土屋さんが稽古場に現れた。峠や見田やその他の役が生き生きとしてきた。あれは舞台稽古も近い日の夕食休憩の時だろうか。——劇団さっぽろの舞台の魅力は灯籠がようけ流れたこと。見田がアナキーだったたり、春子が読みかけの「ヒロシマの空」のノートをぶち投げたり、びっくりすることもあったが、ほんま灯籠流しのシーンはきれいで、今回はあれをやりたいたいと思えるよ。——ぼくが、なぜぼくを呼

んだかを問いつめるように聞いたらしい。実は試演会として上演した三好徹原作「閃光の遺産」を本公演にしたいのだが、作と演出を兼ねるのはまっぴらじゃ、その時は札幌からあなたを呼びたいと話していたが、峠さんの没後三〇年でもあり、文団連からの要請もあり、「河」が先になってしまった。「河」の演出なら他にもある、わしでもええ思ひよったのに、岩井のおぼんの早トチリで、う、まず本音であつたと思う。

冒頭ふれたぼく宛の私信の大部分は、その「閃光の遺産」に関するものだ。「河」の後のはくは劇団さっぽろの仕事以外に、劇団支木「民次郎一揆」の演出、劇団弘演「風が吹くとき」の台本づくりと忙しく、「閃光の遺産」は二、三年先のテーマだと勝手に決めていたが、土屋さんの要求は厳しくしつようで、十一月だったか、ついにつたない改稿案を渡したのだった。——先日西リ演作家会議の席上「閃光の遺産」も論議されたが、貴兄の改稿案と全く同じ意見が出て面白いと思つた、と私信はおだやかに始まる。だが、わしは広島の人間として河岸のバラックの光景や、せきや凱太から離れられんのじゃ……わしも三好徹をわしのテーマに引き寄せすぎと

るかもしれないが、あなたは三好徹の読みすぎじゃ、とビックリ・マークが踊っている。「閃光の遺産」をもっと推理小説ふうにする、ドマチックにしようのう、とぼくの改稿案の骨子だったようだ。しかし「閃光の遺産」の上演では、そんなあなたと演出と作家として激論をたたかわせながらすすめた。最近はどうにも議論の相手もいなくてかなわん。議論のポイント——現実と舞台、虚と実のせめぎ合い、その緊張関係を抜いたら、わしの演劇というのは、何が残るか……あなたの案も西の作家諸氏の意見も、そのところをスーッと抜いとる、というわけである。以下は私信にまかせて、……「閃光」と「河」は月曜会の衰弱がもたらした露呈された公演で、その衰弱した実体をひきずったまま助力をお願いしたために飯田さんや岡島さんといった専門家にとても迷惑をかけたようであり、心残りです。しかし、それもこれも、長い間劇団の問題を何もかもすべて岩井里子におつかぶせていた私の責任に帰するところ大なるものがあります。

当分、いやでも劇団第一主義に戻らざるをえないようです。作品も、小人数でも、劇団の活性化に結びつくような、生き生きとした素

人俳優の出現をうながすような、そんな作品を提供できるようにしたい、そう思います。もっと誠実に、もっと体当たりして……一度こちらが、こんどは北海道を訪問できればいいのですが——

土屋さん、あなたの病気のことを、昨年六月の東西議長団会議の席で聞きました。この夏の演劇フェスティバルの打合せで飛んだ京都でした。強い衝撃の後、二つの光景が浮んでいました。二カ月前、四月の深夜、電話で話した時、ようくたびれるんじゃ、というので、土屋さんからそんな弱音は聞きたくない、といったこと——ぼくは酔っていません。そして、五年前の「河」の初日の後、見真講堂の楽屋であなたのダメ出しが延々と続き、わしが全力で投げた球を、受けとめて投げ返すものはひとりもおらんのか！とどなり、台本を床にぶち投げた姿でした。あの時、ぼくは岡島さんとひとあし先に打上げの会場へ向つたのでした。

「閃光の遺産」、「河」の八八年再演、戯曲「ゲン」のことなど、相談を受けながら、ぼくは何ひとつ投げ返さなかつたひとりりかもしれません。そして、何よりくやしいのは、

雨や雪の中でなく、カッと照りつける広島
の暑さの下で、「閃光の遺産」をめぐる、も
たえば第二次改稿案を投げたとして、も
や突き返しても受けとめてもらえないとい

う事実です。いま大急ぎで西リ演史や「演劇
会議」の文章など読み返し、そのエネルギー
に圧倒されそうになりながら、そう思います。

●特集——土屋清・追悼

「 $E=mc^2$ 」そして海

中 沢 研 郎

(京浜協同劇団)

おとしの、秋も深まったある晩、広島
の土屋さんから電話があった。「田中君、って
わかるかね？」と彼は何の前置きもなく、い
きなり聞いてきた。「知らない」と答えると、
「相対性理論じゃが、少し数学を勉強せん
らんようになってしまおうて……そこから始め
んと何もわからん」と彼は困ったような調子
でしゃべった。

実は数年前から私たちは「ハダシのゲン」
の脚色を土屋さんに頼んであったのだが、こ
の作業はすこぶる難行していた。そのため
私は何回か広島へ足をこんだ。土屋さん

川崎に来てくれた。この電話のひと月前も彼
の案内してくれた中国山地の小さな温泉で話
しあって来たばかりだった。「今さらゲンで
もないような気になってきて、一向に進ま
んのよ。漫画のストーリーをなぞってみても
じまらん。科学者を登場させてみたら、ひょ
っとしたら別の局面がひらけてくるかもしれ
んが……」と言って原爆製造計画に関わって
いた科学者の名前やエピソードを次々とあげた。
「悪いとわかってる原爆などと言うものを
彼等は何故つくってしまったのか、興味ある
なあ」と彼はしゃべりつづけた。

その結果が、相対性理論の電話へと続くの
だ。「こりゃまたえらく時間がかかるぞ。数
学をやると言ったって、言っちゃわるいが、
彼にどのくらいの基礎があると云うのだ」と
私は思った。「春になると必ずでるとい
う持病の神経痛がやってくる前に仕上
げたいのに。のんびりと数学などやって
いた本はいつになったらあがるんだ。あ
あ！」しかし、いま二冊のぶあつい大学
ノートの写しが私の前にあり、私はうん
うん言いながら毎日それを読んでいる。
土屋さんの死後、時子夫人が出して
くれた創作メモだ。そこには原爆製造
にかかわったおびただしい数の科学者
や政治家、軍人、資本家の経歴や行動、
役割、私生活と言ったものから、資料
の名前、浮んでは消えていった劇の場
面、構想、なにやらわけのわからない
数式などが書きこまれていて、執よう
に新しい戯曲の世界への道を探してい
る土屋さんの姿がそこに見える。こ
だわってこだわってこだわり続ける
ことによつて「核」を舞台にひきづり
出そうとする彼の執ような斗いの姿
がある。峠三吉死後35周年を記念
して広島月曜会が「河」を上演する
が、その台本にも彼は死ぬまで手
を加え、上演の構想を語りつづけ、
自演(峠役)自演出る

のだ、と言ってきた。

彼と最後に会ったのは、手術のあと、去年
の六月頃だったと思う。ゆであずきの
缶詰を一缶そっくり食べて、はげしい下痢
を起こし、すっかりやせ細っていた。そ
れでもやたら大声で話した。大声を出
すとおそってくるはげしい痛みも少し
ごまかすことが出来る、と言って笑
った。そして、これから海を見にい
こう、気になった場所がある。俺が案内
すると立ちあがったが、それはとも無
理であった。彼は寝所に入ったまま出
て来れなかった。時子夫人と岩井里子
さんが私と同行の細田をその場所に
連れていってくれた。小雨で煙る倉庫
群の裏に広がる油ぎった岸壁であ
った。美しい海岸の風景が展開する
ものと思っていた私にはちょっと意
外であった。

創作ノートを開いていた、一九五〇年
当時彼が長崎港で漁船員を組織する
地下工作に従事していた頃のことか
書かれていた。様々な批判がなされ、
歴史的にもしかと見えにくくなった
この時代に、20代と言う彼のま
ぎれもない青春があった。長崎の港
は、原爆とも彼にとってもうひとつ
の風景は広島とつながっているのか
も知れぬと私は思ったりしている。

追悼・土屋清

藤 沢 薫

(劇団京芸)

今年の六月、土屋清の遺志を継いでまた
広島で「河」が上演される。

いま僕の前に一通の手紙がある。

「一月曜会以上のものはやれないので、
うちではやれない、今はですか、これはち
と変ではないですか？なんのための専門
劇団ですか——私は藤沢さんにやって
もらいたいと願っています。やるべき
です。本場に「俳優の仕事」としてぶ
つかれる作品なのか、政治と芸術の課
題が一人の人間の中で燃焼され、尽く
すに耐えるものなのかどうか、まだ確
かめられていないのです。それが非常
に口惜しい。「社会的行為としては成
立するが芸術的行動としては成立しな
い。だからまあ業余劇団でどんどんお
やりなさい。われわれはやりませんよ」
としか聞えないのです」

これは車中で書かれたらしく会議
の直後に来たのでおどろいた。僕は不
用意に発した自

分の言葉に恥じながら一個の俳優とし
て涙が出る程嬉しく、早速自分の思
いををいねいに書きおこした。もう
「河」は沢山の劇団で上演されて
いた十年程前のことである。それ
きり二人の間でそのことは話題に
のぼらなかった。そして昨年九月、
電話で客演の依頼があった。僕が
大木で自分が峠をやるという。「気
楽に考えてもらええんです。クール
にね」明るいさやかな声がまだ耳
元に残っている。既に病状を知ら
れていた僕は胸えぐられる思いで
その言葉を聞き、頭の中が錯乱し
冷静さを失って大いに思い悩んだ。
結局安易に承認することは返って誠
実を欠くと思ひ劇団の実情から客
演を断念した。「一角がくずれた」と
彼は云ったという——痛恨のき
わみである。

土屋清を知ったのは西リ演が結
成されてからだが、二年目に月曜
会が初演の「河」で京

都公演し、そのお世話を京芸がやり、その翌年今度は京芸が「駅裏」という芝居をもって広島へ行き月曜会や国鉄演劇サークルの皆さんに面倒をみて貰った。以来僕は頻りに広島へ行くようになる。土屋清はもとよりだが、岩井さんをはじめとする月曜会の面々となぜか馬が合がよく馴染んだ。一年に一度は会わないと落着かない、そう思っているにもかかわらず電話があり、演劇教室やら演技指導やら原水禁世界大会の催物の演出やらに出かけていった。そんな時彼は殆んど現場には姿を見せず、終り頃にひょっこり現れて飲みに行くのに付き合った。彼一流の神経の使いようだった。月曜会の公演に一度だけ客演したことがある。十年前の「ジョーヒル」の時だ。一場しか出ない弁護士役で、ひとりでセリフを覚えることが苦手な僕が一生懸命覚えてこんで稽古に参加したのが本番の数日前だったろうか、稽古場に足を踏み入れてたじろいだ。かなりの出演者なのに稽古場には異様な緊張があった。時折土屋演出の裂はくのが気迫の罵声があつた。時間が止つたような静寂があり、ぼつり語り出す一労働者のセリフの存在に僕は圧迫された。ここではあらかじめ用意されたらしい演技は通用しないのだ。稽古場の制限時

間が来た。十一時過ぎだったからやれやれ一杯飲めろと思つていたら、今から稽古場を移動して僕の場面をやるといふ。どこか大きな倉庫に連れて行かれ泥棒みたいにくっそり中へ入って、山と積まれた荷物の間で稽古が再開された。午前一時頃だった。僕は覚えた筈のセリフもしどろもどろで足が地に付かなかった。こんなふうな時々土屋清は演劇人面した僕の足をゆさぶった。その頃彼は演劇の祭性を主張していた。この「ジョーヒル」の公演も広島で活躍する文化団体や音楽家を結集して見事なアンサンブルをつくって成功した。西リ演のゼミの一端でもあったこの公演は終演後参加者全員で合評会がもたれたその席上、彼は「ひとの芝居を酒の肴にするな！みんな帰れ！」と叫んでひんしゅくを買った。翌朝彼の家をたづねたら黙々と風呂場で足をつかって洗濯していた。しばらくものが云えず涙が出てきた。土屋清はいつも爆弾を抱えていた。そしてあいまになりそうなお題の所在を自ら破いて見せた。ちよつとびりお洒落でぶつきらぼうなもの言い、飄々としたものの腰で真直ぐに生きぬいた。よく自分の枕を持ち歩いていた彼にどうか安らかな眠りがおとされますように。

「演劇会議」に印した土屋さんの足跡	
西リ演総会をふりかえって	一九六八・六 創刊号
「はぐるま座」問題の決着。議長となる。	
東リ演総会傍聴記	一九六八・一二 No. 10
広島演劇協会の事	一九六九・四 No. 11
戯曲「星をみつめて」	一九六九・七 No. 12
戯曲「ひろしま一九六九」	七〇・二 別冊
劇評「獅子」(福岡)	七一・一一 No. 19
私の創作メモ	一九七二・八 No. 21
「万灯の歌」の頃の創作白書	
戯曲「河」	一九七五・二 別冊 4
座談会「東西演劇の歴史と現状」	
出席者・黒沢、仲、後藤、こばやし、土屋 司会・萩坂	一九七五・八 No. 42
統・私の創作メモ	一九八〇・八 No. 45
「はだしのゲン」に着手の頃。燃えたぎる創作へのいらだちが覗える。	
黒沢参吉・追悼	一九八二・八 No. 51
「無題」と題して強烈なラブコール	
私にとっての西リ演史	八四・八 No. 58
「ネームリング」のリアリズム	八五・八 No. 60

特集——土屋清・追悼

好敵手を失った……

猿 渡 公 一

(福岡現代劇場)

僕の住んでいる福岡市西部の早良平野は、周りを低い山脈で囲まれ、中央部を「しろうお」漁で有名な室見川が流れて、博多湾に注いでいる。この低い山脈は背振山系という福岡県と佐賀県にまたがる山塊へとせり上っていくのだが、その低い山々のなかに、飯盛山という、その名のとおりに、高く飯を盛ったような美しい姿の山が屹立している。昭和二十年代までは、一面に水田と畑が続き、その平野が海に接するところに姪浜炭坑があった。

二十数年前、前夜おそく我が家に泊っていた土屋清は、朝起きてじっと飯盛山を見つめていたが、「わしが、もぐっとったんはこのあたりじゃったよ」とボツリと言った。

昭和二十年代のなかば、青共の活動家だった彼は、広島を離れて、地下にもぐり、福岡に住んでいたのだ。あまり語りたがらなかったが、つらい生活だったようだ。土屋は、姪

浜炭坑の炭住や早良平野に点々と散在する未解放部落で生きのびたという。生活費は、何月何日何時何分、東中洲郡珂川河畔の歩道上、中洲大橋と春吉橋の間で出あった男が手渡すというような連絡がきた。

ある冬の日、彼はそのレポと出あわなかった。指定の時刻に出あわなければ、もう絶望的である。連絡の方法はない。土屋は、数日食事をしていなかった。夕暮がきた。博多の歓楽街東中洲へ通じる春吉橋の畔には、焼き芋屋が屋台を出していた。彼はこっそり焼き芋屋に近づき、焼き芋を一個盗んでその場を離れた。しばらくして、彼は再びその焼き芋屋にもどり、唯一の財産だったジャンパーをそっと置いて屋台を去った。

この話は、ずいぶん前に土屋から聞いたのだが、いまでも鮮明にその情況が僕のなかにある。土屋清について何か書くとしたら、この

ことを書かないではいられない。

土屋清が広島にいた。そして僕は福岡にいた。広島は月曜会は、僕の標的だった。僕たちの福岡現代劇場と月曜会は、大いに違っていたが、多くの共通点もかかえていた。地方の大都市で四苦八苦している劇団どうしの秘かな連帯かもしれない。僕も、月曜会の動向をひそかにうかがっていたが、土屋清も福岡現代劇場の動向をひそかにうかがっていたような気がする。僕たちの劇団が、ブレヒトの「セチュアンの善人」を上演したとき、土屋は、福岡現代劇場がやれるなら、うちもやれと決心したに違いない。

僕は、土屋清と月曜会に、とうてい及ばないと感じたり、負けるものかと思ったり、うちの方が勝ったと思ったりしながら二十数年間芝居を続けてきたようだ。土屋清は、一方で大変勝気な男だった。だから僕たちも負けまいと思った。すぐれた好敵手を失った悲しみは大きい。今後、月曜会の諸君が土屋さんを引き継ぎ、発展させて僕等の好敵手であり続けてくれるだろう。

やろうとした仕事すべて「河」にこめ、残してきています。

今月曜会は、六月から始まる峠三吉没後三五年記念・土屋清追悼公演「河」に取りこんでいます。自分自身に、時代に向うことに、

●特集——土屋清・追悼

「星まつりの夜へ、旅して」

土屋 時子

(劇団月曜会)

昨日、峠三吉没後三十五年の三吉忌・碑前祭に「ヒロシマの空」を書いた林幸子(旧姓)さんがはじめて参加され、劇団員との交流会で、「あの日」のことをつぶさに話して下さいました。ほんの昨日の出来事のように、堰を切って語り続ける林さんの話を、私たちは息をつめて聞き入りました。途中何度も涙ぐまれ、言葉も途絶えがちでした。そして最後に、「あの日のことは想い出すとつらくて虚しくなるから、想い出したくなかったの、話したくなかったの」と云われました。

被爆後四十数年経った今、被爆者の体験記が黙々と出されているそうです。語り始めるのにそれだけの時が必要で、出来れば忘れたくないという想いも、今は痛いほど分るような気がします。状況は全く違う訳ですが、「愛する者との死別」をはじめて体験した私にとつて、土屋の想い出を綴るということは、随分とつらい作業でもあります。何か書こうとすると、特に昨年の張りつめた闘病の日々が生々しく想い出され、一行も書けなくなってしまう、つい前書が長くなってしまいました。

した。

昨年の六月二日にはじめて、「土屋は食道ガンで、既にステージⅣだ」ということを告げ知らされました。その日以来私は、家族は勿論のこと、劇団員の人たちに日々支えられ、生きてきたように思います。「告知して残された生を悔いなく生きる」又「やり残した仕事を仕上げる」には、時間と体力があまりにも無い、と判断してからは、私たち家族三人、必死で遊んだような気がします。温泉に入っている時だけが痛みがやわらぐというので、故郷の別府へ、道後へ、湯来温泉へと杖をついて出かけました。中でも一番想い出深い地となったのは湯来町で、八月二十二・二十三日の「星まつり」の夜のことです。山間の田園の中で繰り広げられる、東京演劇アンサンブルの「銀河鉄道の夜」の幻想の世界は、不思議な感動を与えてくれました。私は生まれて初めて、「何か大きな力」に包まれている私たちを観たような気がしました。土屋は、広渡さんが汗だくになって舞台の向こう側で燃やし続ける、ファイアーの火をじいっと見つめ続けていました。この夜の土屋は、東京演劇アンサンブルから「RAIKA」のシャ

ツをプレゼントされ、とても幸せそうでした。

そうした中でも、土屋の頭の中では「河」の改稿の構想がふくらみ続けていたのでしょう。一気に書きなぐった「河」の台本への添削のあと、十月四日のケイコ始めて喋り続けた二時間のこと、そして、意識がなくなっていたのうわ言——「ボンボン船の音は、心配せんでも、天草の漁師の人たちに手伝うてもらうたけえの」——等々にも、そのことが伺えました。

さがあらためて胸に迫ってくるのです。

未完となった「河」の五稿目、二十五年間の改稿の足あとを辿ると、土屋という劇作家は、実に「気の長い作家」だということに気付かれます。そういえば、土屋はいつも「井伏鱒二」という作家を心に留めていました。あの丸っこい悠々とした井伏鱒二と、細身の短気な土屋がなかなか結びつかなかったのですが、今はそのことが分かるような気がします。

今劇団は、「河」の稽古の最中です。一九六三年の初演以来二十五年目の上演となり、今回は奇しくも、土屋清追悼公演となっています。

いまいました。土屋自身「『河』という本は、非常に辛い、読み返してみるのが怖い本だ。」と云っていましたが、今は私にとつても劇団にとつても、本当につらい舞台であり稽古場なのです。特に四幕は、峠のことが土屋のことばと重なってしまうので、「せりふ」が喋れなくなってしまうのです。「叙事詩ヒロシマ」の構想を峠三吉はやり残し、それを舞台で実現させようとした土屋も又、途中で心ならずも逝ってしまいました。その無念さ、非情さを胸に刻む時、「ヒロシマ」のもつ重

「人はその人の生きたように死ぬる」と申しますが、それにしても土屋は、別れのことばなど交わす間もなく「ほんじゃあ!」と云って、激しい性格のまま、せつかに逝ってしまつたものだと思います。

皆さまへのお礼が遅くなつてしまいました。が、多くの励ましのおこぼを頂き、本当にありがとうございます。全り演の皆さまのご健康とご活躍を、広島の地よりお祈りいたしております。

土屋清氏を悼む 植田 知基

広島生れで別府市育ち。海軍予科練の時に敗戦。劇作家、演出家として壮大なテーマに誠実に挑み続けた生きざまの背景には、青年時代の苦難の体験が根を下ろしているのだと思う。

けい古場で見た火の出るような激しさ。その一方で、人間の弱さを底抜けに優しく包み込む大きさがあった。二十九年に広島に帰り、大月主宰の広島民衆劇場を経て三十四年に地域劇団「月曜会」を結成。以後の活動は、広島演劇界ばかりでなく、文化運動全体に影響力をもち、困った時に必ず登場する指南役だった。

一貫したテーマを追い求め、病床にまで持ち込んで書き上げようとした新作「川底の町」。その半ばでがんのために逝った。この作品をつくり上げ、土屋さんが手塩にかけた「月曜会」が舞台にのせる。それを実現させることで遺志を受け継ぎ、めい福を祈りたいと思います。(元広島市民劇場事務局長)

△これは一九八七・十一・十四の土屋さんとお別れの文集からの転載です。▽

土屋清氏略歴

。昭和五年、広島市加古町で生まれ、中島小学校を三年まで。
。別府市に移り、旧制中学別府市立一中三年のとき海軍飛行予科練習生に志願、予科練第十六期生となる。(敗戦教ヶ月前)
。敗戦後復学し、新制高校大分県立別府第一高等学校を卒業。
。朝鮮戦争が始まると反戦活動に入り、昭和二年一月、政令三二五号違反で追われ地下活動に入る。
。昭和二年、広島に帰り市職労組に勤務し演劇活動に入る。三〇年、広島民衆劇場へ役者として入団。
。昭和三年(一九五九年)、劇団月曜会結成。創作劇「赤とんぼ」(一九六一)をメーデー前夜祭で上演。
。昭和三年(一九六三)「河」初演。反響を呼ぶ。

。昭和四年(一九六七)月曜会第七回公演構成劇「拳よ火を吹け」を構成・演出。
。昭和四年(一九六九)「星をみつめて」を発表。仕事をもちながら芝居をつづけてゆく仲間たちを描いて、話題となった。「演劇会議」一二号(一九六九年七月)に掲載。
。昭和四年(一九七二)千代田町の百姓一揆を題材にして「万灯のうた」月曜会第十一回公演。
。昭和四年(一九七三)「河」、小野宮吉戯曲平和賞受賞。
。昭和五年(一九七七)月曜会第十五回公演として広瀬常敏作「ジョー・ヒル」を演出。
。昭和五年(一九八三年)三好徹原作「閃光の遺産」を脚色・演出。
。昭和五年(一九八四年)「私にとっての西リ演史」執筆。「演劇会議」五七号に掲載。
。進行中だった仕事は、マンガ「はだしのゲン」を題材に、アインシュタインをはじめアメリカ、ドイツの科学者も登場するまったく新しい創作劇「ゲン」と「河」の一九八八年、峠三吉没後三十五周年記念公演にそなえての五回目の改稿であった。

。「ゲン」の脱稿も近いと思われた昭和六年四月二日、広島市民病院に入院。
。「食道ガン」とわかる。六月三日、胃の全部を摘出。
。十月十三日再度入院。十一月八日午後九時一分、永眠。五七歳と二ヶ月の若さである。
。昭和六年(一九八七)十一月十四日、見真講堂において「故・土屋清さんとお別れの集い」。

(坂坂)

演技ワークショップの体験

西会議の演技ワークショップは一月十六日、十七日の両日、広島月曜会稽古場で開催された。講師には藤沢薫(京芸)、河東けい(関芸)の両氏を招き、十集団五十一名が参加した。西会議では毎年戯曲研究会を恒例化してきたが、従来から演技の研究会をという要望もあり、今年は特に若い人たちのためにこの企画となった。

一日目は両講師から演技とは何かを体験を交えて話され、劇団草の実が「笛」(田中千禾夫作)をモデル上演した。夜は稽古場で交流会。月曜会からお酒のカンパ。タッパも高いし観客も四十人は収容できそう。市の中心からはちょっと遠いがいい稽古場だ。故土屋清の汗がにじんだ床板に根を下ろして話はずむ。

二日目はモデル上演をめぐって講師が演技の実際について指導、「笛」を上演したことのある劇団若者座からの飛び入りもあって、

中味はなかなか充実していたものの、参加者全員が役をつくる演じるというには時間が少なすぎる。そこがちょっぴり欲求不満だし、企画の難しいところだ。次の機会には今回の経験を生かしていつそ楽しいものにしたいものだ。

月曜会のみなさん、ご苦労さまでした。

(梶)

私の収穫

岡山 緑

(劇団大阪)

広島から帰った夜、真っ先に「笛」を読み返しました。深夜にもかかわらず熱中し声はしだいにエスカレートしていきましました。参加者51名の内、同じ夜、同じように自分で演っ

て試さずにはいられなかった人は、決して少なくなかったらうと思います。想像するとありありと目に浮かび楽しくなりました。感想文を書くのを遅くさせたのは、読書です。とにかく本が読みたくて仕方なくなり、三冊一気に読み上げました。むさぼり読むとはこういう読み方なんだろうなと考えるが、本を読む為に足早に家に帰っている自分に、ワークショップによって受けた刺激を確信しました。今も読みかけの本とその次に読む本と、数冊の本が私をせかしています。劇団活動の経験がまだ私の私には初めてづくしの参加でしたが、第一日講師の藤沢薫さんのお話ですっかり気が楽になりました。私が考え始めるようになっていた、心に通じるものがあつたからです。大先輩でも感じるものは同じ、だから役者は終りの無いレースなんだと思いました。感動の涙が思わず出そうになったのは「本当の悲しみ」というものは、奥に強いものがなくてはいいけない、そしてそんな悲しみを知り、尚且つ、希望を捨ててはいけない」という言葉でした。役者の人の苦しみや悲しみはバイタリテイの源、バイタリテイの中でこそ進歩、向上してゆけるのですよね。

河東けいさんのお話の中では「きれいな心、きたない心」が印象的でした。人は両方の心を持っているのですが、役者は、今自分の心かどの状態にあるのか感じる事ができて、切替えてきて、まっ白にもどすこともできるべきだと思います。社会のしがらみ云々に左右されては、芸、と言えないと。（甘いと言われるでしょうか？）美しい心を保つ為、美しい絵や美しい音楽にふれていたいという言葉に、河東さんの女優としてのまっすぐな姿勢を見たように思います。それから相手のセリフを、聞く、ことと、聞こえる、ということとは、一日も早くお芝居の中で実感したい課題になりました。

二日目、河東さんの基礎体操、カゼで少し苦しかったけれど一番楽しかった。役者は、ここが弱くなっているといけない、あそこが強くなくてはいけないといったアドバイスは、貴重なものでした。そして『笛』の研究。セリフや役柄の解釈の違いでお芝居が変わってゆく様を見、あらためて役者の理解力、想像力の大切さ、良い舞台作りの為の責任の重さを教わりました。恐いながらも、やめられないのがこの世界。

帰りのタクシーで初めて、原爆ドーム、を

見ました。悲しい程小さなものでした。以前から見たいと思っていたのですが胸につまされる姿でした。

最後になりましたが、関係者の皆様、本当にありがとうございました。すばらしい経験をさせていただきました。今年はこの新年の収穫を土台に頑張れそうに思います。本当にご苦労様でした。

すばらしい体験

渡利和美

（演劇サークル・トラム）

一月十六、十七日は一九才の体験としては貴重な二日間だったと思います。広島島の劇団にものごく興味あつたし、観たことのなかった「草の実」の芝居も観せてもらえたこともそうです。講師の方にお目見えできたこと、二日目に河東けいさんの横に座れたこととか……。

一つの芝居を観ている側で学んだことは、心で描いていることを体で表現して交わし合うということ。感じとったことをそのまま出

すということとはとても難しく、しかもそれを如何に役に生かすかは心の持ちかた次第で、舞台の空気も違ってくるということ。

そして、役を自分なりに創ることと相手を受け入れること、客観的に自分を見つめること。芝居の訓練のなかで人生の勉強をさせられるなあとも感じました。芝居の楽しさ、胸の高まり、愛して生きる人たちはものすごくすばらしいものだとも思います。

演技……演じる技術、テクニクは、自分でこうありたいと望まなければ向上しないが、人に一番の自分を見せたいと思ったとき、すでもう最高のものではないのですね。ある劇団の人が「自分を卑下しないで、その前に全部自分を出してしまわなければ成長の出發はない」と言っていました、ほんとにそうだと思います。

また、リズムと「乗り」っていうか多くの人の和と、それとは別に自分自身が役になりきるといふのはいろんな苦労があるものなんだなあとも思いました。

妥協するのって進歩しないのと同じ。役を好きになってそれをイメージ化するというのは才能のうちにいるかもしれない。でも感受性はとても大切だと思います。自分を磨くと

△豆 劇 評 △

「終りに見た街」（前進座）

ひどい生活のもとで耐えさせられた末、結局は破壊でしかなかったという、あの戦争体験は過去のものではなくてひょっとして今だって、その恐怖はあるかもしれないとするテーマは、戦後の戦争未体験者、とりわけ若者たちには入りにくい。この課題に工夫をこらしたのが、前進座の「終りに見た街」（原作・山田太一、脚色・小松幹生、演出・香川良成）である。戦時下の銃後活動が昭和も六十年代の人心の位相とかなってみえてくるのがこわい。

話の芯になる一家の夫婦（志村智雄・横山万里子）と子どもたち（長村富士郎・遠藤かがり）が、実によくはたらいっている。主人は体験として敗戦を知っているの、なんとかその悲劇から妻や子たちを救いたいが、（敗戦を知らない）子たちは日本必勝の愛国心に燃えている。この図柄はSF仕立てだが感銘は深刻であった。その重さを主人の友人敏夫さん（津田恵一）のこも

「タック・サインの冒険」

（京浜協同劇団ほか）

3月19・20日の第十七回「かわさき演劇まつり」に、十五年前、同じ企画で実現をみなかった黒沢参吉の「タック・サインの冒険」が降って湧いたように脚光を浴びた。この作品は一九七二年、その頃かんだったベトナム人民支援運動の一環として書かれたので教官臭はかくせないが、逆にそれ故に何ともクロさんらしいのがなつかしい。

両親を亡くして孤独な木こりの青年タック・サイン（明元雲飛子）に、仲好しの森の精リ・ティン（若松純・見城忍）が時々ヘマをやりながら懸命に手を借して、悪役人の陥穽やら大鷲（空）、大蛇（陸）の大敵にうち勝って、皇女ラン姫と結ばれて目出度し目出度しの話である。

この作品でおそらく黒沢も計算していたと思われるフシに、タックの善良さを小狡く利用して、ついには將軍にまでのしあがるマートンという担ぎ物売りやのおもしろさがある。小川雅功がこれをころがすようなうまさで見せた。演出は室野定子。



「ブロックの頁」

奥羽ブロック

放談——オラホはオラホ

(俺の方は俺の方)

レポート——藤原浩平

(劇団支木)

「東北は熊襲の産地。文化程度もきわめて低い。」(サントリー佐治社長、二月二八日、テレビ発言)熊襲を蝦夷と訂正しても差別と蔑視の中味に変わりはないが、ムラムラと怒り心頭に発すである。これにはおまけもついていて、三月二日同社の幹部が東北各県知事を訪ね、陳謝して回った時のこと。青森県知事が「東北が関西より文化の上で開けているとは思っていない」と関西を持ち上げ「東北人はコンプレックスを感じているので、そこに触れられるとよいくない。痛いところにいるのである。このいやしい発言。佐治も佐治なら知事も知事。「もうサントリーの酒は飲まない!地域文化なんとかで百万もらった劇

団は金を返してやれ!」先日、ボトルキープした酒……?ま、いいか、発言前のやつだから。心頭に発した割には、発し方がせこいというか腰くだけなんだよね。
さて、ブロックの頁、熊襲発言を糾弾し、東北の中でもずっとはずれの奥羽の文化程度の高さを証明することになるか。浩平のブロック劇団飲み歩きの旅。発車のベルが鳴ってます。

三月五日、ブラジル

出発間際に秋田の展楽座工藤君から電話。「オレもブラジルに行くンテ。わざわざ二ツ井まで来なくてもいい。」企画の予定が狂っ

たな。ままよ、それならそれでもいいや。

「ブラジル」は弘前市にある。劇団弘演の秋本さん経営の喫茶店の名前である。青森市から電車で一時間。秋田の二ツ井町からは特急で一時間。とにかくブラジルで秋本博子、工藤慶悦、俺、そして弘演から武中君、宮崎君も途中参加で飲むことにして出発。

夜八時前というのに店を閉めて酒の肴を用意してくれた秋本さん。少し遅れて、ワイン片手に工藤君がやって来た。

秋本 ニツ井でもおもしろいと思うのは、お芝居やるだけでなく、様々な催し物にかかわっていて、市民権?町民権か、を得ているってこと。私達から見たらうらやましい。

浩平 テレコかついで二ツ井の町内歩いて「展望座」を知ってますかって百人に聞いてみようかと思ったの。半分は「はい」と答えると思うよ。

工藤 オラ(俺)と照井で言えば野暮用ならオラが多いんでねべがやつぱり。「メクスレタマグラ」って言うんだ、秋田弁で。

浩平 青森でタマクラミミズっていうあれ。工藤 まんず、どこ掘ってもどこにでも居る太いミミズ。要するに何にでも顔突っ込んで

所がや。

秋本 ひょっとしてそれは京浜のひとつの体質みたいなのあるのかな。

工藤 俺、川崎に居たら京浜そんなにしてないのじゃないかなと思うんだけど。

秋本 遠く離れてね、はるか彼方に京浜を見てるとき、例えばはぐるまだって、そんな地域のことやってるじゃない。とにかく京浜というのは、お芝居もやってるけど、文団連ていうのかな、そんなところに大きな力を発揮するし、何かのイベントに太鼓はやるし、それこそ結婚式から葬式まで。

工藤 京浜の場合、組織でそういうことやるじゃない。展楽座の場合組織じゃない。個人でどうなのか問い詰めて、劇団に別に伺いたてる訳じゃなくて、あい間を見て勝手にまっっていく。

秋本 うん、あるいは照井さんとかがね。そりゃわかるけど……。

工藤 川崎だったら芝居やってますというところで通用することあったんだよ。京浜の北村ですとか言えばさ。俺らそうじゃないもの。印刷業の工藤です、看板屋の照井ですと言ってみんなと同じことやるじゃない。すると劇団の都合で出れないとか関係ないからな、



写真・右から

展楽座 工藤慶悦

支木 藤原浩平

弘演 秋本博子

でいるってこと。だから、商工会の「雪っこ祭り」なんてやるべ、俺と照井が商工会に入ってるじゃない。けっこうサボってんだけど、行けば何か言うからはね返ってきて、当日盛りあげる役目。「二次会はどうした、放送局からアナが来るなら誰々を助手につける」とかや、ちゃんと俺んどあるんだな、収まる場

ここに居るがぎりハ。でそれ切っちゃえば二ツ井じゃとてもやっていけない。だから、もうちょっとしたらな。例えば、青年部っていうのは四〇才で終わるの。入っておかきやなんない関係が終わってから、俺ソンド(俺達)面白いな。その時こそ、フリーになったときこそ何すっぺかなとか考えてる。

浩平 今年の冬は休まなかったの? 工藤 俺本当は休みたかったんだよ。とにかくチンタラでも休まねで、集まっぺということになって、せめて週一回は太鼓やってんの。その間に、芝居何やるか考えるべしと。

秋本 聞きたいのはね。一年間休むとなつた時、あんたや照井さんはいいよ。でもそれ以外に集っているコ。特に若いコ達がどうやっていて来るのかなってこと。日常的な活動どうやってるのかなってこと。

工藤 おかしなことに集って来るんだよな。そんで、イライラめいてる女もいるよ。いるんだよ。

秋本 ヤ・リ・タ・イっていう。

工藤 うるせーってんだよ俺な。そんなにやりたいなら、自分で台本さがして、こんなのどうかしら、あんなのっていうぐらいやれって言っただよ。それが又、吹雪いた日でも遠

くから来るんだよ。

浩平 誰だ？

工藤 M子。それだけでなくも事故ばかり起してんだから。他の連中は皆二ツ井だけど、あいつだけほら、能代だもの。ただね、二年休んだら散るかもしれないけど。とにかく今のところは、今年こそやろうなって気がある。だから、支木からテープ借りてさ、権兵衛やる分には丁度良かったの。俺んど、芝居っていうより遊びだな。支木とか、弘演とかの組織形態とは全然違う。とにかく劇団という認識もねーだろうし。この間、改めて皆で飲んで話したら、まず、俺のため（自分のため）にやっているとというのが半分を占めるんだ。

浩平 いいなーそんな話出て。

工藤 照井がまず一番先にしゃべるものな。最後にすればいいのによ（笑い）したら少しは、地域の為とかカッコつけれるのに。自信ある照井が、一目おいてる彼が先に言い出すもんだから、次々と俺もそうだなと。最後に俺がカッコつけて、フーム、それ半分あっても、あとの半分は……とか言っても収まらね。（笑い）

秋本 だからさ、今私が自分で一番ぶつかっているのは、レバを決める以前の問題として

ね。集団に集っている一人一人が何やりたいのか見えないっていうのかな、うーん、本当に本音で話し合っているんだろうかという疑問がさ、あるんだよ。

工藤 俺んど、演劇の議論なんてないからさ。

秋本 うちだってないよ。

工藤 楽しくやりてえなって気分が皆にあるから、下手にこっちもあまりガチャガチャと、例えばカリキュラム作ってがんじがらめにしてしまえばダメな。

家庭と劇団と

去年あたりまでは、どちらかと言えば、けいこ以外は家庭を大事にするとかで来れないという人が、最近又、来はじめて、けいこ場かたづけたりしてヨ。結婚してもそういうサイクルあるんだな。子育てに一応区切りがついたとかさ。

浩平 男か？うちには男でいるよ。

工藤 男なんだよ。H男なんだよ。それで俺、けいこのたんびにけんかするの。だって演出でありながら九時過ぎに来たりしてたんだから。それで俺カッコめいて、何回怒った

かわからないよ。いい子と結婚したの劇団の。まずすなおない子なのよ。看護婦やって、共働き。すると、約束事っての二人できちつと分かちあったんだ。だから、この日は何が何でも童（わらわ）を風呂に入れる日、この日は迎へに行く日って決めてらった。

浩平 支木の場合も似たようなもんだ。それが二人の聖域みたいになってまて、芝居づくりとかみ合わねえのよ。俺は、何時になつたから以後はカーチャンとコミュニケーションする時間だから帰るってこと全然してこなかった。けいこ終っても、小道具、大道具だって仕事あるじゃない。もちろん酒飲みながらとかさ、べったりけいこ場に居て、わいわいやってるのが芝居づくりみたいところあったのさ。だから、そういう人間見るとイラつくんだよね。結局骨抜きになってしまつて、自分でやりたいこと認めさせていないんじゃないかって。

秋本 たださ、そうすると女の立場で言うなら、私もそうだった。私も自分のやりたい事やって来た人間だけど、それはどこにシワ寄せが行くかというと、自分の母親にドンドン。どこかで誰かがやらなきゃならない事って確実にある訳よ。どちらかが負わなければ

いけない。それを夫婦でいえば、女性に負わせていたという事はあった訳だし。逆に劇団員の女性だったらさ、劇団としては出て来てほしい訳だ。それを家で多少、夫がやったらいいじゃないと言うのは、劇団のエゴが強く出てさ。さっきから聞いていて、今の若いコって、賢いというか、その意味でとてもいいと思うの。せせこましくて、妙に型通りの生き方をしていると思わないこともないけど。

工藤 うちの彼が、けいこ場に来るようになって、皆ちょっと彼を認めてあげられるようになった。俺んど、それをわかるまで時間かかると思った。京浜なら、それできないよ。そんな長いプロセスでなんか考えてられないもの。

ママはつらいよ

秋本 私、工藤君に演出やってもらいたいな。彼の演出で、ブロックで芝居一本作ってみたい。旗上げで「メロス」でしょう。「メロス」？と思ったよ。でも、あの本の最後を切り捨てて、メロスが走る、走るというところで幕を切った演出を見てすごいと思った。ブロックに演出やつてる人居るけど。いない



んだよ。もちろん、飯田さん（さっぼろ）に演出してもらうのも勉強になるし、舞台成果もそれなりにあるし、一人一人の胸に落ちるものもとても大きかったし、その意味で、十年近く彼とつきあって来て、とても大きな影響を受けて来たと思う。その影響を受けた人達が今、弘演を支えていると思う。竹中君とか、宮崎君とか、歩ちゃんとか。それ以前では作間というのが居て、彼から飯田さんへの移行は、すんなりだった訳。非常に違うものは有りながら、根っこは同じものをパンパン役者につけられたから。だけど、もうひとつ具体的ところで、自分の発想の中で、ユニークに作っていけるだけの何ていうか、自立したことがないといえられないような気がするの、弘演でいえば。

浩平 それはいつも感じていた。ママは、演出やらない方がいいと思う。やっぱり役者なんだよ。役者の目で見るとママの演出は、どこかボコッと穴があいているんだよ。それがものすごくもったいないと思う。

秋本 それはよくわかっていて、お家の事情でやらなきゃいけないのって、つらいんだよ。やらなくて突っばってしまえばいいかもしれないけど……。あんなに演出やらない方がいいって、飯田さんにも何度も言われたし、うちのダンナからは、頭からベケにされて来たってことあっても、どうしようもないときはやらなきゃいけない。自分の中の鬱積っていっぱいあるじゃない。そういうものの中で、直接的には島田豊氏の言うように、本当は何をやりたいのか、弘演の中で何やっていくんだとかいうことが、グサグサとゆさぶられて私自身がね、自信を失った。というものが、去年いっぱいずっとあって。作間の「バカ塗り」やるにしても、決めるまで私の中でストンといかない訳さ。そしたら劇団イライラすると思う。そりゃわかるんだけど。最終的には私は、死んだふり、寝たふりでね、劇団の流れていくのを見守っていよ

うと思った時もちょっとあったけど、やっぱり今年は、作間の作品をやっておかなくやとすることがあって、半分強引な形でやりまっすって、やって。——次は「今日私はりんごの木を植える」をやって、それも一所けん命やるわ、公演日決ってるし、馬車馬みたいにやっても、時々フツとね、メゲそうになる時、後で考えよう、今やることやろうと送り送りにしていたことが、終ったとたんにドサッと来る訳。赤字という失敗もあるし、自分の作り様は別の方向だったのにそれができなかった事もあった。もっと地域を巻き込んで、地域の力がひとつになって来るのを発想した訳よ。劇団は裏方でいいと。半年やそこらで地域の力を結集して来るなんて、相当なエネルギーがなきゃできないってこと。私一人がしゃかりきになってがんばってみたいってね。

浩平 そう思う。あれは他で成功しているのは、どこでも青法協の人達がものすごい力を発揮して、舞台にも立つし、客も集めてたんだもの。マ、前に外堀も埋めないで内堀に突っ込んだと言ってたけど。

秋本 だからさ、溺れてしまった訳よ私は。だから舞台が終わった後で、いや終る前から、今回の取り組みは、自分で考えていたように



たら、私これだったらやれるなんてのおかしいな。

秋本 そうじゃなくて、山本安英さんの演技を見て感動して、これ以外にないと思ったら、そこでさ、何ていうのかな、頭でっかちかな——。

工藤 三文オペラやるんだったら、相当本気になってがんばってみたいと思うよ。でもしねーけど、自信も予備知識も全然ないからほら。弘演とか支木とかある種の歴史があるじゃない。その重みがあるから、我々はおもう一〇年たたなきゃこんな大作できないとかさ、へんな新劇のアレがあるじゃない。俺らの場合そんなのいから、アホな連中ばかり居るから。

いかなかったというメゲ方があって。あれは仮りに千人の客が入ったとしても、私是不満足だったと思う。千人入ったら少し満足したかな。感傷をふっとばす麻薬みたいなところあるからさ、数って。まあ、私を落ち込ますに足る観客数な訳よね(二五〇名)。——演出を降りるとかさ、ゴタゴタしてみただけど、どうしても解決しないなって思ったから、去年と同じ体制でもう一年行ってみようって私は、文芸部担当になったんだけど。強引に、あなただけの何さって聞けば、作品もいくなかない訳じゃないけど、今の弘演でどうなのかとか、私が演出すると？考えちゃうの。だから、彼が「三文オペラ」やりたいていうさあ。

工藤 俺、四、五年前は「カモメだ！カモメだ！」と思ってよ。これだ、これ今の高校生達に必要だと思ったよ。したら今、年とったから「三文オペラ」だとかよ、「どん底」だとか。いや、でもどん底は見たい目重くて、演技で考えさせる芝居だから、ちィーと容易でねえと。只、三文オペラってのは楽しいから。なんだかんだ言っても、目まぐるしくやって終ってしまえばいいっていうか(笑い)。

浩平 いいの？こんなに演出やらせて。

秋本 いいの、いいの。

工藤 今の世の中の秩序みたいなのがぶ壊していくような芝居作ってユナー。でも「演劇会議」で展覧座のレバ選べないし。岡安の芝居はいいと思うんだけど、演技が要求されるとなればもうダメよ。やりたいなと自分の中にフアーツと浮かぶものは、極端に言えば大作になってしまふものな。ところが、それ、やれない訳だべ？——三文オペラやるってば、俺だと、戦後のドサクサの闇市とかでさ、浮浪児とかがうじゃうじゃ居てさーって考えることしゃべるべ、「それ、おもしろ？ほんだいいな、やる」なんて照井が言うわけ、他の劇団に行ったら、「プレヒト？展覧座？バカやめろ」って言われると思うんだ。うちの場合、それないじゃない。まわりにそれ言う人もいないじゃない。これがなんての？いいじゃない。(笑い)

秋本 おおらか、おおらか、そのおおらかさで脱帽したのは、おこがましくも「女の一生」うちでやるのなら私は挑戦するよ。でも「夕鶴」なら降りるってぐらいいのに、よくやったね。

工藤 だって役者なんて、あこがれとか、自分にないとこを求めてるじゃない。そし

全リ演と俺達

工藤 「あぜ道劇場」(移動公演)で「芝浜」やってさ、あれは芝居じゃないという人間は居るだろうけど、客との接点でいえば、実は沢山の接点があったのだから、実にいい仕事をしたと思う。たまたまある評論家が、「秋田市でやっているのも芝居で、四季でやるのも芝居で、又、まぎれもなく展覧座のも芝居だ」と位置づけをしてくれたんだ。——

地域の劇団だったたら、もっともってそんな要素持ってもいいと思う。東リ演あたりが、みんな五年たった、十年たったって、中央集権制じゃないけど、ひとつのところにまとまって、みんなついて来いよというような、芝居のつくりようもさ、そんな気がしてるんだ。

秋本 それは、東リ演なり全リ演がそんな指導してるからそうなったんじゃないって、何年かやって来た劇団が、多少とも劇団らしくなってくると、まわりを見て、そんなのに触発されていく中で自から、そんな方向を選んでいるという気がちよとする。例えば、演劇大学があるとするじゃない。幼稚園児と大學生が一緒にいてもいい程難多ところが、一堂に会して、誰々の講義を聞いて来た訳だ

よ。それぞれの独自性を発揮して、地域に根ざせと言った筈なのに、それぞれの地域に散らばって。

工藤 そう散らばって、大学で学んだものを一所けん命なんとかしなくっちゃ、なんとか見てもらおう、認めさせようというつながり方が、有線でも無線でもあったと思う。

秋本 あったと思う。そこへつながらないイラダチがあったと思う。

浩平 そういう傾向、うちの劇団というか、俺にあった。東リ演で提起した事やってみようと思った。やった事もあったし、応えられないこともいっぱいあった。七〇年演劇行動とか、ベトナム支援とか。だから支木はだめなんだろうなと思った。でも東リ演がなかったら今の支木もないんだけど。今は、独自に支木のやり方を追求するのがまず大事で、他の劇団で何かをやったとしても、そっくり真似してみようと思わないし、俺方は俺方と聞き直して居るというか、クールになってんだ。

工藤 俺、総会へ行てさ、わざと三回ぐらい言ったよ。「展覧座は、サークル主義を原点にしてますから」。おそらく、サークル主義を原点にってところ、東リ演にないよ。

秋本 サークル主義を原点にしてるって言

うけど、彼に確固としたもの、オラこの地でこれやるんだというものの植えつけたのは、京浜での何年かがある訳よ。それがあから、クールになってると浩平が言うけど、そんな見方ができるようになったんだよ。——そして、二ツ井に来て、「お前、何の為に芝居やってんだ！」と怒ったら、「お前の為にやってんだ」と言われた話、面白くてさ。(笑い)

久し振りに帰って来た人間にさ、芝居やらねか？と誘われて。したら助けてやるか？とけいこに付き合っているのに、「何の為に！」って怒鳴られたらさ、わかり切ったこと言うなよ。「お前の為だ」(笑い。たまんねーよな)

工藤 俺なんかも京浜の中では、気張って来た人間なんだよ。一所けん命自分に足カセはめて、意義めいたものぶらさげて。展楽座さ来て、それを何年かやったら、きついってないよ。気張ったって組織を運営できるもんじゃないよ。うちの連中続いているのは、気張ってねーもの。極端に言えば、芝居やってますって誇ってるのいねーものな。島田さんじゃないけど、無からのつながりっていうか、でも何もないのだったらだめよ。そんなにかひとつなきや。だから、初めに「芝居有り

き」じゃなくて「つながり有りき」かな？俺らの場合は。東リ演も、専門劇団もさ、創造方法が一緒くたになって来てる気がするよ。冗談じゃねーや、一目瞭然違うんだって事あってもいいと思うの。例えば、アンサンブルの芝居見ても、東リ演の芝居見ても、極端にいえば同じというか、方法論でな。後、論ずるのは、うまい、へた。そんな感じだべ？だったら俺、つまらないというのや。——この間俺、宇野重ブツンしたけど、宇野重一座を二ツ井町に呼ぼうかって、教育委員会で手紙出そうとしている話をキャッチしてさ。俺、バカヤローかけて止めさせた。——「オイオイ、面白くね話、するなよな。他の連中が商売でやるならいい。教育委員会が何でやるんだ。展楽座が居ないならいい。展楽座が居て、まして『三年寝太郎』やってんだ。(笑い)解釈がまるで違うとかならまだいい。そう違わねべ？宇野重一座を二ツ井の人達に見せて、そこで町民は何見る？やっぱりプロだなど、そんな視点でしか見ねべ？って言う訳。そうした時、展楽座が下手だとレッテル貼られてもかまわね。結局、お前方が、ますます東京指向を町民に植えつけるだけだと。地域の劇団を切り離すことになるんだ」って言ってやっ



たの。(愉快痛快の笑い)

まだまだ言いたい放題は続くのだが——、当初、弘前、二ツ井、黒石と回って、八戸にも取材し、奥羽五劇団勢揃と考えたのだが。工藤君が弘前に来て話し合ったら、結構毛だらけ。これ一本に絞ることにした。三時間以上のテープを編集した関係で、武中、宮崎両君の発言も、その他の貴重な話、愉快な話も、文字どおり割愛させてもらった。

次の日黒石劇研の「イソップのお話」二十一回目の公演も取材、打ち上げにも参加させてもらったのに、これも割愛。八戸にも行けずじまい。申し訳ない。次の機会にゆずらせてもらった。紙面も尽きた。では、又。

劇団通信

劇団四日市

「演劇は誰でもできる」と、故黒沢議長の教えが私の耳に、今でもこびりついています。公演毎に演劇活動に興味を示す人が増え、「森さん、次は私に番を」とささやいてくれています。特にお母さんたちの関心度が強まっています。

冬の期間は十何年つづいている「なかよし劇場」の移動が恒例となっています。今年は「腹話術」「大型紙芝居」「つみあげうた」「手品」などを前座に、児童劇「土曜日のいどころ」の公演でプログラムを組んでいます。この脚本は劇団員の北村が創作しました。

秋の本公演に向けて、私は「炎と燃えて生命——四日市萬古焼異聞」を執筆中です。五月の東会議創作部会でマナ板にのせてもらえたと願っております。

一月二十三日(土)、名古屋演集の四十周

年記念パーティーに出席しました。演集の結成メンバーの一人である私にとって、この四十周年の歴史は感無量でしたがパーティー会場内では、その想いが満たされませんでした。そういうプログラムが組まれていないのが残念でした。

でも演集の四十年の歩みは、名古屋地方の地域文化の発展に大きく貢献しています。演集出身を誇りにしている私ですが、演集出身者でこの地で活動している人は沢山おり、それぞれが秀れた業績を積みんでいます。演集が五十周年に向けて力強い前進をと、その期待感いっぱいです。(森けんろう)

(510) 四日市市北浜町九一〇

〇五九二一五一九四二六

劇団テアトル・ハカタ

炭坑閉山等の理由で人口が半減した長崎県佐々町が「町おこし」のため、町の伝説「皿山炎上」の舞台化を企画、テアトルハカタが上演し昨年、人口の一割を動員する大成功をおさめた。その後、住民からの再演の要望が強く、今年は町役場をはなれ、商工会青年部が主体となり4月16・17日に再演の運びとなった。

またこの夏Fコープ生協5周年記念に、

ミュージカル「動物会議」(作・井上ひさし)を県下二十会場余で上演が予定されている。これも六十一年の「エフコープまつり」での「真夏の夜の夢」の大好評等が、事の運びとなった。

その間小劇場では博多演劇塾ともいえる若手俳優の修業の場「若葉会」を創立する。佐々町商工会青年部では二四〇〇人動員を目標とし、私達を待っている。まさに地域に根付いた劇団活動が展開されようとしている。

(812) 福岡市博多区奈良屋町二一九

〇九二二七一一五〇九〇

世仁下乃一座

近況報告。三月三日より渋谷ジャン・ジャン恒例、オリジナルレパートリー、日替り三本連続公演「ネーム・リング」「たてられて・華」「洞道のヒカリ虫」。つづいて五日後の三月一日、都内女子高校、一二日、神奈川青少年センターにて「太平洋ベルトライン」を上演。

三月二六、二七、二八日。小豆島児童演劇祭に「ベルト」で招待参加。パネラーとして岡安伸治が参加。

六月、俳優座劇場ワークショップに新作予定。

八月、「かちかち山のブルートン」をもって旭川から札幌フェスティバルへ。
(173 東京都練馬区豊玉中3-15-12-1 304

岡安伸治

〇三一九四八七三三八

制作問合せ

〇三一九九二六三六三 (カトー)

劇団伊丹市民劇やき

拝啓。

・ようやくチョッピリと春のおとずれを感じられる今日ですが残念ながら私どもの劇団では厳しい冬が続いております。昨年12月の公演(「落ちこぼれの神様」園山士筆・作、山本哲也・演出)のあと、団員がチョッピリと退団しました。為に今年早々の劇団総会は例年になく熱い討論が繰り広げられました。先ず劇団員募集のチラシを豪華(?)印刷致しました。目下の処、成果は女性一名が入団(?)しそうです。

・また今年度も春に児童劇、秋に市の関係公演で、市の教育長の書き下ろし時代劇を予定しております。

・なお、今から北海道でのフェスティバル参加についても劇団員一同楽しく(多少観光気分)で会話しております。その節の宿舎には

是非、子供の為に禁煙室と禁酒室と託児室の用意をお願い致します。 敬具。

(664 伊丹市千僧字船原二〇一九坂上

〇七二七七八一六五五〇)

劇団さっぽろ

・フェスティバル88インサッポロまで数ヶ月余り。やっとこ、のんびり屋の道産子も目の色が変わってきました。(デッカイことを云うのは得意のくせに、どうして、やることもトロイんでしようね)

2月27・28日に道演集総会(16劇団40余名参加)、3月12日札幌ブロック総会(ここが事務局・受け入れ側の要めであります)、4月早々には理事会等。マラソンで云えば、はるか後方から猛烈とスパークをかけたのであります。

でも、心配しないで下さい、北海道的ペーサーでやる事やっています。おもしろい芝居とうまい物を山ほど用意しています。(本当です)

・「清水の舞台から飛び降りた!」とばかりに、西区の中心街に事務所を開設しました。劇団の事情も、もちろんあります。でも、半分はフェスティバルめざして、この全国に有名な貧乏劇団が一大決心したので。心意気

だけは認めて下さい。(カンパ大歓迎。お金とフェスティバルは琴似へ、公演依頼は宮の沢へ、よろしく)

・萩坂編集長の本音で通信を!にお答えします。(私はいつだって本気ですよ)

全リ演加盟の専門劇団のみなさまに強く訴えます。いろいろあるでしょう。が、しかし全リ演はフェスティバルの主催団体です。そして誰も来なかった、なんてことの絶対ないようお願いいたします。近年、学校公演や子ども劇場例会などで来道する劇団がたくさんあります。でも、連絡もくれない劇団も多いのです。(あいさつしろなどと云っているのはありませんよ)そのようなわけで、心から呼びかけます、参加して下さい。

我々は、フェスティバルに全力をあげています。したがって、今年は新作ナシです。(あつ、そう、おたく、今年は金をかけないんだと、あつさり某劇団に云われた。まったく頭にくる。幸い、加盟劇団ではない)

(長谷川)

(063 札幌市西区手稲宮の沢四八五一四一

〇一一六六三二五九)

フェスティバル・事務局

(063 札幌市西区琴似二条五丁目四四〇

斎藤アバート2F

TEL・FAX〇一一六一三〇五七六

劇団四紀会

土屋さんの計報、残念です。

劇団が上演する創作劇は必ず観てくれたし、彼の存在が私たちの創造に多くの影響を与えていたことも確かでした。つい最近では、こんな舞台を産み出す四紀会と創造の場が本気になって格闘してみたいと言っていたし、ぼくもいつかは機会をつくりたいと願っていたのです。

2月末に上演した劇団三〇周年記念4連作の3作目、神戸庶民伝第3部、内田昌夫と梶武史の共作「青葉茂れる」の客席に彼の姿がないのがいかにも悔しい。

さて第4作目の公演は6月下旬で、未来宇宙を題材にして構想を練ってきたものの、現在、その台本をめぐる激論中。とりあえず「モモと灰色の紳士たち」の5月上演を準備しているところです。

では8月に北海道で再会しましょう。

(650 神戸市中央区元町通二一九一

元町プラザ六二二

〇七八一三九二二四二二)

劇団からっかぜ

まだまだ寒さの続く今日この頃、全国の皆さんいかがお過ごしですか。でもこの通信が載る頃はもう春ですね。

さて今年のスケジュールは昨年12月の総会で大まかに決められ、7月に本公演、10月にはブロックゼミ、11月頃から移動公演、ということになりました。

本公演の作品については年明けから検討に入り、8本もの候補の中から北村想・作「シェルトー」に決まりました。公演の日程と場所は、7月1(金)2(土)3(日)日、浜松科学館。演出は鈴木克法です。(以上予定です)で変更があるかもしれません。

移動公演の作品はまだ決っておりません。今年はブロックゼミの担当劇団でもありそちらの計画もひかえています。

去年末から劇団員の休団があいつぎ新しい入団者もなく人数的に少し苦しい状況ですがなんとこのりきろうとがんばっています。暖かい目で見て下さい。

さて、建設が進められていた新しい稽古場が何とかなったになりました。劇団事務所及び連絡先はこれまで代表布施宅から左記に変わりましたのでよろしく。電話も入りました。

(431-02 浜松市篠原町二二五〇五

〇五三四一四九一〇九三七)

(おことわり・文面をすこし整理させていただきます) いただきました!もも)

劇団夜明け

2月17(水)18(木)20(土)21(日)日 No10小劇場公演(No24公演)「かげの砦」を中津川コミュニティセンターにて上演、5ステージ五九一人の方々に観て頂けました。当初4日間4ステージの予定で行なった公演も台本の良さ、新聞の地方紙で紹介された事なども手伝って観客数が日増に増え、緊急会議を開き21日に追加公演を行うことを決定しての5ステージでした。

昨年秋の公演を断念し、最高8本の多くの芝居を観、劇団員がそれぞれ充電し、劇団内で討議を重ねた、これまでの積重ねが、今回の観客数に結びついたと思います。劇団を支えて下さる地域の方々、劇団OBの方々に感謝し、次回公演に向けて行きたいと思えます。

△次回公演▽

第5回親と子の劇場(No25公演)

6月25・26日 中津川文化会館

7月3日 恵那文化センター

(編集部より・演目は未記載でした)

(508 中津川市北野丸山

劇団京雲

〇五七三ー六五ー四九三七

「陽気な地獄破り」(木下順二作、佐々木
北陸、北信越、五月には東海地方のおやこ劇
場の公演がびっしりつまり、そのまま山陽に
入り「ホルストメール」(トルストイ原作、
藤沢薫演出)の四国山陰公演と息つく間もな
い地獄のスケジュールが待っています。

三月の初旬はじめて稽古場を使って淀小劇
場をはじめました。演目は「ハイキング」
(別役実作、藤沢薫演出)で、これくらいの
空間には最適と好評でした。これを洛北生協
の建物で組合員の方に観ていただいて後の座
談会で大変面白い話が聞けました。淀小劇場
はこれから年一回は続けていくつもりでいま
す。

終了公演に「花よりタンゴ」(井上ひさし
作、長畑豊演出)の大作を上演して意気盛ん
な俳優教室生の中から何人かの入団が決まり、
この春から活動参加します。

来年は劇団創立四〇周年にあたりいま企画
を検討中です。

(612 京都市伏見区納所北城31-18

〇七五-六三一-二六〇九)

エ公演をたのしみにしているお客様に支えら
れて、これからも可能性へ向って飽くなき闘
いです。

88年3月4日(金)ー7日(月)まで砂防
会館ホール、8日(火)江東文化センター、
9日(水)練馬文化センターの3会場で6ス
テージ、大橋喜一作、稲垣純演出の「ゼロの
記録」を公演しました。

観客動員は一九〇〇人。この数年、砂防ホー
ル、都心への動員がむずかしくなってきたま
した。反面、地域での公演が成功しています。
練馬文化ホールでは30名の立ち見が出ました。
地域で愛される劇団・を目ざして来た成果
が少しずつ出て来ています。

創造の面では、まず、三時間半を超える上
演時間をどれだけ短くできるか、作者自身も
認めておられるテーマが分裂している二幕目
をどうまとめるか、それが劇団にとっての最
大の課題でした。(もともと初演を民芸で演
出なさった早川昭二さんは、あれは分裂じゃ
ない、とおっしゃってたのですが…?)

昨三吉がモデルの泉久松と歌人正田篠枝が
モデルの立田友枝の部分を全面的に削除。そ
れに換えて、進行係と読み手たちを登場させ
ました。進行係は現代の視点からドラマを進

劇団「湖」(うみ)

今日は。

雪深い北海道の、更に雪深い三笠市の穴倉
のような家で書いています。何でも二十八年
振りの大雪とか、毎日が雪との闘いです。春
の気配も顕著でないまま、気がつけばもう三
月も半ば、少々慌てています。

八月の札幌フェスティバルの出しものもお
およそ決定したとか、その中で、湖の「ざ・
ほろない」炭山暴動始末はどうなるのだろう
と不安もあります。会員も少く、出演者のほ
とんどが在住のOB・OG、そして重要なと
ころを札幌勢にお願いすることで辛うじて上
演を続けて来た、湖、ですから、札幌に合同
で「SOS神追町」を上演するとなると全員
が二つの作品に出演ということになり、そん
なこと出来るのだろうか、でもこれからじゃ
交代は間に合ない、どうしよう、になってし
まいます。

もうこうなったら、ありのままを観て頂く
しかないとき直った気分です。こんな僻地
で細々と文化活動を続けていくしかない
私たちですから、質より、参加すること活動
を続けることに意義があるなどとい甘えた
気分になりがちです、これ本心です。でもこ

行させてゆくもうひとりの主役。

名作「ゼロの記録」に対する思いはそれぞ
れに重い。そしてかかえている反核のテーマ
はもっと重い。この重いテーマを、どう現代
と接近させてゆくかが、劇団の仕事でした。
この公演で劇団の課題がはっきり見えて来た
ように思います。

「ゼロの記録」の練馬公演が終ると、外は
春の雨。春になったら、早速学校公演が活動
開始。

レジナルド・ローズ作、稲垣純演出の「12
人の怒れる男たち」は、4月25日藤枝公演か
ら始まり、5月京都、静岡、6月北海道、東
北、7月東北と廻ります。

本田英郎作、高橋左近演出の「勲章の川」
は5月京都、米子、6月関東、7月東海地方
へと廻ります。

寺島アキ子脚本、川池文司演出の「翼は心
につけて」は中学校対称で、4月兵庫、5月
九州、6月長野、7月関東地方を廻ります。
今年もしっかり稼がなきゃ!

しかし最近の教育の反動化の動きが気にな
ります。(井上鉄夫記)

(177 東京都練馬区下石神井四一九一十一

〇三九九七-四三四一)

れでは自分を甘やかすことになり、湖、は駄
目になってしまいます。少しでも、ほんの少
しでも観るに耐え得る作品になるよう頑張ら
なきゃと、お互いはげまし合っているところ
です。

どうぞ皆様、ぜひ今年の夏は北海道におい
で下さい、お待ちしております。

(068-21 三笠市本郷町五七八九加藤方
〇二六七一-二一三〇四四)

東京芸術座

昨年の12月23日ー27日、暮のあわただしさ
の中で、さねとう・あきら作、杉本孝司演出
「おばあちゃんの決着」を劇団のアトリエで
6日間8ステージ公演しました。

劇団の経済を支えている学校公演は3班活
動。その活動のあい間をぬつての放れた技的公
演でした。

アトリエ公演で一貫して追求しているのは
リアリズムの可能性。ちょうど一年前の暮に
は同じ作者、同じ演出の「ウメコがふたり」
をウメコ婆アを男が演って徹底して大衆演劇
的に創ってみました。これが地元の商店街の
おかみさんたちに大ウケ!今度の「おとしま
え」もその路線で追求。リアリズムの演劇創
造に「決着」などつこうはずもなく、アトリ

劇団未来

新年のケイ古は1月8日の総会からでした。

昨年11月13日ー15日、20日ー23日、9ステ
ージの長期にわたる、劇団創立25周年記念公演
No.1、兼ワークスタジオ披露公演、座付作者
和田葉子の久し振りの創作劇「ああウェディ
ングドレス」は成功裡に終えることが出来ま
した。

この成果を受けての総会でしたが、団員の
減少やケイ古場への集中の悪さは依然として
続いています。この現実をみんな確認して
つづ演劇の楽しさを発見し、すべての劇団員が
もう一歩づつ努力して、劇団を活性化させる
中で、創立25周年No.11公演を成功させ、30周
年への確かな礎をつくっていかうと結びまし
た。

△今後のスケジュール▽

・3月21日(月) 劇団教室生の試演会「探
偵小説」と劇団員による朗読劇「ちいちゃん
のかげおくり」、「ごんべえ太鼓」をワーク
スタジオで公演。

・5月20日(金)ー22日(日) 大阪春の演
劇まつり参加。こばやし・ひろし作「カンナ
の咲き乱れるはー遠い遠い戦争よー」を、
森の宮青少年会館小ホールで予定しておりま

す。(F)

(536) 大阪市城東区成育一四一五

劇団名芸

名芸は去る2月27・28の両日、研究公演をして、北村想・作、成田美佳・演出「Fairy Tale」を上演しました。北村作品への初挑戦を、十九才の初演出でやり遂げた訳ですが、「いつもと異なる名芸の舞台を観た」ということで概ね好評をいただきました。が、他方若手の成長が課題と痛感させられた試みでもありました。

現在は、二年ぶりのシェイクスピア劇場に取り組んでいます。

「ベニスの商人」 台本/栗木 演出/柘植

6月10・12日 名芸平針小劇場

楽しい舞台にしようとして張り切っていますので、皆さんの御観劇をお待ちしています。

また一年ぶりの研究生教育も、6人程の参加でスタートしました。7月の卒業公演では潑刺とした姿を見せてくれるものと期待しているところです。そのあとは、名古屋で開催される世界人形劇フェスティバルに呼応した南区劇場の取り組みや、恒例となっている子供劇場へと向かっていきます。この多忙さの

中で、北海道フェスティバルが埋没しないよう一人でも多くの参加を呼びかけていきたいと思っています。

秋は、市芸術劇場・名古屋劇団協議会合同公演として、大作「ペール・ギュント」に演集、名古屋等と共に取り組みます。(原作/イブセン、台本/栗木、演出/若尾正也) 栗木台本の第一稿は2月末に脱稿、4月には製本化し、6月より稽古が開始されます。上演は11月11・13、会場は市民会館中ホールです。迄御期待!

それから、共産党創立65周年記念・文芸作品戯曲部門で、栗木の「受難の像」が入選し、去る2月7日、地元中心の「共に祝う会」を行いました。が、外部より40名の出席をいただき、有意義な集いとすることができました。厚く御礼申し上げます。

(468) 名古屋市天白区平針一丁目一八〇八

〇五二一八〇三二九二二

尚、お急ぎの通信や小包品類は左記へよろしく。

(457) 名古屋市南区汐田町三十四

栗木方

〇五二一八二二一三六九一

劇団あしぶえ

2月21日から、あしぶえ50人劇場オープン一周を記念して「落ちこぼれの神様」を、4月17日まで続演。これで、一年六ヶ月の間「落ちこぼれ」の稽古と本番を、演り続けていることになりました。

全員が成長しました。若いうちの一年半という期間は、個人生活でもめざましい進歩のある時ですが、合計34ステージの舞台は、演出を育て、役者を育て、そして、観客を育てました。

高校の定時制の生徒たちも、学校行事の一環として、50人劇場へ足を運んでくれました。長期にわたる多ステージは、中高の教師、高校の演劇部の生徒たち、地元周辺の村おこし町づくりの関係者、遠距離在住者、マスコミ、全リ演関係者、また、同一観客の複数回観劇など、新しい観客を増しました。

二週間に一日2ステージという公演サイクルは、決して楽ではありませんでしたが、スタッフも役者も、それぞれが自分自身に、次々と課題を与えて努力したことは、次回の作品に、大きく生かされることでしょう。

私自身が書いた、66号のレポートも、今泉氏や萩坂氏の劇評も、もう過去のものとなりました。

5月からは、あしぶえトランク劇場の作品づくりに入り、12月公演。途中、9月に出雲市、10月に広島市で「落ちこぼれの神様」を上演して、この作品は、一応、卒業、ということになります。

(690) 島根県松江市砂子町二〇九一三

〇八五二二七三〇五〇

お急ぎの場合は左記へお願いします。

(733) 広島市西区楠木町4-4-15-102

園山土筆

(追記・67号での劇評は考えさせられました。文盲の生徒たちばかりという事実が、客席から観るとホントかな、と思われ、誇張されたパロディで、アンチ学歴社会のメルヘンでは、先輩の生徒さんたちの立場がないと思っただけです。あのシーンは、原作者の松崎先生が、まさしくあれです。と言われた箇所でもありました。又、私が適当にフィクションしたシーンが感動的であったこと。実は私自身、一番気になっていたところで、又、沢山のアンケートの中でもあのような意見はじめてでしたので。3・12 園山土筆)

劇団やませ

薄暗がりの中で一筋の光明といったところか。今、昨年暮れにかけて入団した若者三人

の稽古場自主公演の練習が続いている。団員、団友のうちわで観る会となりそう。

昨年は、八戸市民劇場創立二十五周年記念特別例会として「赤い海」を採り上げていただいた。エキストラを含む総勢三十名余の舞台となり、初稿に手を加えた分、前回より好評だった。若者群像と打ち壊し場面が主な付け加え部分だが、悲しさと力強さが加わったとの評価を得た。勿論、改善しなければならぬ点も数多くあり、鯨騒動八十周年の四年後、完璧?を目指してもう一度挑戦しようという声が上がっている。

実質的登場人物は十七人だったが、現在は様々な都合で日常的な活動から離れている団友諸氏の協力が大きかった。大切にしたいと思う。また、公演二ヶ月前とエキストラの中から新人団員も入り、終演後また一人と、しばらく振り若い力を獲得できた。うれしいかぎりだし、彼等に是非がなばってもらいたいと思っています。

その彼らの実質的初舞台が、冒頭の稽古場公演「ポンチ絵」である。井畑潤が演出を担当し、遅いテンポながらも、確認し合いながら進行している。公演日、三月二十六日が案しみである。

さて、今年のやませの公演は、小ホールでの連続公演を春と秋に予定している。一本はもう一度練り直した「海村」で、あと一本は「死のかげの谷間」(劇団未踏がもう公演しているらしい)で、一月中に脚本が出来上がる予定だが、まだ音沙汰がない。六月に予定しているの、ぼつぼつ限界が近づいているところだが、本業が忙しく、まだ手がまわらない状態らしい。とにかく、電話攻勢で筆を進ませなければ……。核燃基地がいよいよ現実的なものになってきた。なんとか止めるためにも、六月に向けて、ラストスパークといつたところ。

以上が最近の様子である。これからの予定としては、当地の俳人三峰館寛兆・歌人佐々木章村、そして、創立二十周年(解散公演と半分真剣に考えている?)に安藤昌益を考えている。いつもながらの少ない人数ががんばっていきます。(征谷伸夫)

(031) 八戸市鮫町蕪島町一四 征谷方

〇一七八三三三一九一三

(編集部より・締切後、風張さんからも通信がとどきましたが、内容が全く同じなので、先着のものにします。劇団からは一通にしてください。)

劇団群馬中芸

一月の関東ブロック新年交流会では思わぬ歓待を受けありがたうございました。朋友遠方より来たるの、気が溢れていて、日頃疎遠になっている事を心の隅で恥じました。

疎遠になっている私達に昨年は夏のブロックセミを群馬でという話になり、ブロック事務局の方々の御尽力でセミが創造的連帯の場になり得たことをうれしく思っています。

さて、前号でもお知らせ致しましたように「群馬未来劇場を建設する千人の会」の人々によって進められてきました「群馬未来スタジオ」の建設工事は、寒風の中着々と進行しています。12月28日には上棟式が行なわれ、鉄筋コンクリート造り・二階建・延四〇一坪の全貌が赤城山麓の大地の上に表われてきました。

今後は、4・5月の中で内装や客席作り、音響・照明等の諸設備を千人の会の人々と私達の手造りです。6月上旬にオープニングセレモニーを予定しています。

現在、企画委員会にて記念公演の企画と細部の調整中で、6・7月は事のほかに忙しい月になりそうです。私達劇団群馬中芸は、現在巡演中の作品の他に新たに川村光夫・鈴木四

郎演出による「劇版・うたよみざる」を上演の予定で目下稽古に取りかかっています。詳細は次号で。（秋山としひと）

（371）前橋市昭和町三一五一二

〇二七二二二〇五五〇

演劇集団石るつ

初春を迎えて以来、あいかわらず、イベント続きの「石るつ」です。

太鼓、三味線を持つての新年会、何周年記念行事参加を続けつぎとこなし、二月末には地域の子供会にて、三百人弱の子供達を前に、おこんじょうるり、上演と交流のつどい、三月十日には東京大空襲での構成劇出演を終え、一息ついたところです。

そんなこんなで、春公演についてはこれから、なだれ込みになりそうです。

少人数での奮闘に待ったをかけるべく、人員獲得合戦真最中ではありますが……？

（いとうエリコ）

（135）東京都江東区白河二一三三八

吉川複写工業内 境野修次方

〇三一六四二一六三八三

劇団新芸

去年11月の銭函小学校に続いて、2月28日小樽市内ですが、ちょっと余市の方にある蘭

島会館で、矢作京介作「あほう村の九助」を上演しました。町内役員の三関さんや佐々木さんそれに新芸代表の鹿角と職場を共にする（国鉄の精算事業団です）中村さん達のおかげで児童と大人約一〇〇名に観劇してもらいました。素朴なおばさん、お母さん達から共感の大笑いが続きましたが、小学校低学年が多かったため子供たちには今一つ乗って来ません。演劇の前、30分、うたごえサークル「つばさ」に参加してもらったのですが、子供たちはそちらの方に乗ってたようです。

日頃稽古場を借りている相生町会からも要請があるのですが、役者の勤務がきつくと残念ながら断わらざるを得ないのです。

蘭島公演と同じ日に道演集の総会がありました。必ず二名は出席する新芸ですが、人手が足りなく助人を借りて居る状態での仕込みと公演のため参加させることが出来ませんでした。

3月13日、道演集後志（シリベツ）ブロック総会を蘭島で行い、そこで岩内の「波」と小樽の「うみねこ」から経過を知らせてもらいました。なんと言っても今年のフェスティバルの大変さです。お金の問題、実務の問題、いま道演集の中心になっている40代の働き手

が所属する職場環境の中で、時間と身体を自分のために（演劇のために）使えない人が増えてきている。その中で劇団さっぽろなどにきつい厳格が行っているように聞きました。

事務局や理事会や札幌ブロックの総会で内容が詰められると思うけど、成功させるためにはどうやってゆくの、オソロシイような感じですよ。

今年度の新芸の見通しは全く立っていません。2年後の一九九〇年道演集演劇祭を後志の岩内で引受けようという事は決まりました。岩内の中心の坂井氏、うちの鹿角、共に40代です。それに次ぐ実力者がいれば少しは展望が開けるのですが……。一年先も見えないけどやる事になってます。一番の問題は地元、岩内の「波」の公演をどうやって創るの、かなんです。ちなみに小樽と岩内間は車で一時間十分あります。やるっきゃないで、又々今年も始まりました。（宮津泰子）

（047-02）小樽市銭函町三一三三二一六二

鹿角優一 方

〇一三四一六二二二五五〇

京浜協同劇団

今年は、劇団代表だった黒沢参吉の七回忌にあたりますが、黒沢がベトナムの民話に材

をとって書いた「タック・サインの冒険」（未発表の作品です）を上演します。川崎市教育委員会と川崎演劇協会の共催で行われる第一七回かわさき演劇まつりに川崎演劇塾、劇団辻シアターの三劇団で合同出演します。

三月十九、二十の両日、三ステージ。いつかやりたいと思っていたスペクタクルな作品です。演出は昨年「貧の意地」を演出した室野定子です。九才から六十二才までの四十人で稽古場はムンムンです。今回は、劇団はぐるまの加納さんの娘さん加納豊美さんにすばらしい衣裳をデザインしていただきました。

黒沢の七回忌はこの公演のあと、六月十二日（日）に、京浜協同劇団、川崎文化会議、黒川静江さん（黒沢夫人）、萩坂桃彦氏のよびかけ、主催で行う予定で準備にかかっています。

劇団は今年十二月に創立三十周年を迎えますが、今年から三年間、いろんな記念行事を企画中です。

記念公演の第一弾は、三十年間私たちを支えてくれた人たちに思い切った楽しい芝居をみてもらおうとシェイクスピアの「真夏の夜の夢」（演出・細田寿郎）を今年九月から十月にかけて、川崎、横浜、東京の四会場で上

演する予定です。

第二弾は広島県の原爆をとりあげた創作を予定しています。これは、三年前に月曜会の土屋清氏に依頼していた作品ですが、執筆途中で土屋氏が他界されたため、劇団内でその作品を完成させようと今、中沢研郎ら三名が集団創作の作業をすすめています。土屋さんが残してくれた莫大な資料やメモの中に、土屋さんの驚くほどの意欲と、無念さをあらためて感じずにはいられません。

夏の北海道演劇フェスティバルには劇団から二十名ちかくが参加する予定です。ぜひ成功させましょう。

（211）川崎市幸区古市場二一〇九

〇四四一五一四九五二

劇団埼芸

今年でちょうど二十周年目を迎えた埼芸は、これを記念する活動の第一弾として、六月十日、十一日、浦和市民会館で、可能あらた・作「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」を川村武夫・演出で公演することになりました。

この公演は若手・新人の演技水準を高めることを中心課題にするともに、公演に必要なさまざまな仕事の進め方を、担当者任せではなく、どの仕事も全員の合議と協力で、一

一人が公演のための活動への確かな参加を体験してみようと云うことで、現在進められています。

第二弾としては昨秋に公演した「柚之木谷譚」(作・高橋治・演出・由布木一平)を再演します。十二月十二日・十三日、東京の砂防会館ホールです。初演で得た一定の成果の上に更に深みを加えてよりよい舞台をつくり、東京の観客の皆さんに観ていただきたいと思っています。

なおこの他に、五月、九月、十一月に、児童劇の移動公演が予定されています。今年も大変忙しい年になることは確実です。

(330) 大宮市染谷一七一一四

○四八六八四一三〇八二二

劇団やまなみ

皆さん、こんにちは！

やまなみの今年の活動(予定)は次の通りです。

・3月6日 山梨県移動芸術劇場公演(主催 山梨県教育委員会、早川町教育委員会)、別役実・作、河野司・演出「窓を開ければ港が見える」。

あの東会議議を行なった早川町で、「御礼公演」を打つことができました。教育委員

会の寿大学の特別例会も兼ねて頂き、町で会場まで送迎バスまで出して頂きました。観客は約80名。

・6月10日11日 春の公演。県民会館小ホール。レバは現時点で、未定。

・11月?日 山梨県演劇協会合同公演。複数の県内作家に創作劇を執筆依頼し、現在進行中。

・89年2月?日 仮称「梅津幸三を観る会」公演。

昨年の劇団三分裂(その後、彼等自身が分裂して四分裂!)の後遺症はまだ克服しきれません。ともかく良い舞台をつくり続けるしかない、との「火事場の踏ん張り」から再び「やまなみの原点に戻って」の芝居作りにと、団員の目が向いてきたようです。

(400) 甲府市青沼一八八五 梅津方

○五五二二二二二二九五五六

演劇サークル、麦の会

二月に定期総会を行いました。昨年は、例年春、秋の二回の公演をやったのですが、息切れたのか、一回の公演になってしまいました。その反省をし、公演活動をしてこそ演劇集団であるという思いを強くし、今年は再び春、秋の二回公演をすることにしました。

さしあたり春は六月に、井上ひさし作「頭痛肩こり樋口一葉」を上演し、秋は十二月に公演することに決めたのです。更に来年は創立三十五年になりますので、創造的にも組織的にも観客動員にも大きく力を強め、三十五周年記念公演を成功させようということも決めました。そのためには今年は飛躍の年にさせようと、会員一同もえています。

「黄昏」にならないようガンバリます。

(133) 東京都江戸川区北小岩七三一二〇

吉岡利根雄

○三六五九一八七〇四

劇団どろ

今日は。久々の通信になります。

去年の秋のプレヒト作品の上演、そして高校演劇部との合同公演を終え、今、若い人達が主力の稽古場公演の準備に忙しい毎日を送っています。しかしわが集団も例にもれず、色々な問題を内包しつつ時を刻んでいるようです。

△活動報告△

87年10月 「ブンテイヤ旦那と下僕マッテ

イ」 作・プレヒト 演出・合田幸平

88年2月 「グスコブドリの伝記」

作・宮沢賢治 脚色・ふじた・あさや

演出・合田幸平

88年5月 「トムは真夜中の庭で」

作・P・ピアス 脚色・波原純明

演出・山内正俊

(652) 神戸市兵庫区大開通七四一七

谷垣ビル4F

○七八一五七六六四八八

演劇集団、あり

昨年十一月十九日 宮沢賢治の「注文の多い料理店」を構成脚色した一幕劇を終り、十二月に入ると、空倉庫を正式使用者が決まるまでと借りていた稽古場を、年末までに立ち退きを告げられ、八ヶ月ほどとはいえ、初めて稽古場を持ち、道具類も多く作ったり、集めたりしたので、その保管と整理と運搬に限られた人数で、一ヶ月ほどの苦闘を続けることになりました。

サークル員二十数名とは名ばかり、舞台以外の労働への結果の悪さは、今更ながらサークルのひ弱さとして感じています。

年明けと共に、新しい運営体制も出来たものの、古手のサークル仲間、サークル演劇の原点をあらためて問い直す時だと反省しています。

世の中、益々、働く者や庶民に不利な風が

吹く時だけに、すべてに言えることではある

が、長年続けた者は、その体験とそこから生み出した道すじは、若者たちに伝える義務があるということを感じています。

体制を立て直しながら、まずは、七月の県演劇連盟公演の準備にかかることと共に、三月十四日から三日間、チェーホフの「煙草の害について」の喫茶店公演を行なうこととされています。

(683) 米子市昭和町二三

○八五九一三三三九三〇二

劇団だいこん座

春の公演を四月十六日に行なうべく稽古中です。演目は、園山土筆作「落ちこぼれの神様」で既に他の劇団の公演の様子が「演劇会議」で紹介されておりましたが、どこまで創りあげられるか、不安一杯の毎日です。

今年の冬は二月以降、降雪が多く、閉ざされたような季節の中では頭も気持ちも身体もなかなか目覚めず、稽古の進行状況も最悪の状態です。また三月に入って、学生団員の試験、進学、就職と転機を迎え、劇団にとっても落着かない日々が続いております。

春は、とくに北国の春は何もかもが一斉に目覚める時です。重苦しかった冬の日々を一

気に晴らせるような舞台にできたらいいとおっております。

(997) 鶴岡市本町三一九一一 高橋方

○二三五二二四一六八八

劇団すがお

第40回公演 3月5日・6日 桑名市民会

館 「有王塚由来 俊寛と有王丸」 観客五

〇〇名。

歌舞伎の「俊寛」をとり入れ、俊寛の侍童有王丸が諸国行脚の末、桑名の地で歿した記念の塚の由来を舞台化した創作劇、伍藤かずよし作・演出で上演いたしました。

制作期間 稽古期間が2ヶ月という短期決戦は横着な話ですが、何とか漕ぎつけました。近松門左衛門の「俊寛」と創作の俊寛とのトーンの異いに違和感がありました。観客の反応は概ね好評でした。

郷土の歴史を知り、俊寛、有王丸への人間的感動、未熟な舞台ではありましたが、創作ならではの評判です。

62年7月の「夏の夜空に」に続く郷土の話を中心とした創作で、劇団の創立25周年記念公演でしたが、自分達の力以上の作品で、結局は県下の仲間劇団の援助を求めることとなりました。

劇団員が病氣、仕事、勉学にと多忙な中の事故者が相次ぎ、相当の無理をしての公演が続いただけに、今はホッと一息といったところだ。

質、量ともに十分な充電をして夏のフェスティバル、秋の公演に望みたいとおもいます。

(511) 桑名市森忠一〇五八

〇五九四一三二一四二一〇

黒石演劇研究会

長く厳しかった寒さも次第に緩み、ようやく春の足音が近づいて来たような今日この頃、全リ演の皆様、仕事に演劇活動に励んでいらっしやることと思います。

黒石劇研はつい先日(3月6日)移動のステージを終えました。レバは昨年より引続いて上演している「イソップのお話」(J・ブローック作)で通算上演回数は21ステージになりました。その間キャスト、スタッフ、歌が替り、少しづつ手直しを繰返しての公演でしたが、長い劇研の歴史にもこれだけの上演回数を重ねたレバはなく「いわゆるひとつの財産」になりました。

しかし相変わらず我々を取巻く現実には厳しく転勤の為に単身赴任を余儀なくされた会員(しかし彼は車で一時間以上の距離を吹雪を

ついで稽古に駆けつけます)、「出稼ぎ」に出た者2名、失業の為に他市に移る者etc.。暗い話題を数えたら両手でも足りない程ですが、芝居への情熱だけは失わないように頑張りたいと思っています。

春の公演予定はありませんが、今秋は久方振りの「大ホール」での公演を予定しています。現在候補作を絞り込んでる最中で、四月中には稽古に入る予定です。又数人で積立をしていきますので夏の北海道で皆様にお会い出来ることと思います。厳しい状況ですが、お互い頑張るって良い芝居を創りましょう。

(036-03) 黒石市乙徳兵衛町五一加賀谷方

〇一七二五二二四〇九七

劇団弘演

続けて通信をお休みしていました。ごめんなさい。近況を報告します。

12月2日の第25回公演「劇団日本国憲法」今日、私はリンゴの木を植える」(ふじたあさや作/秋本博子演出)は、出演者70名といふ力作であったのですが、当日大雪にみまわれ、制作的には二五〇と散々なものとなりました。見てくれた方は「地域の問題をも導入しながら、無理なく見れた」「憲法施行40周年にふさわしい舞台だった」と喜んでもらえ

関西芸術座

昨年は劇団創立30周年の記念行事と公演で華々しい一年でした。

88年は、長期公演で中学・高校及びこども劇場高学年例作、山田洋次・廣沢栄シノブス、広沢栄・作「もうひとつの教室」(夜間中学)富田悦史演出で全国移動公演。

昨年より続演中の「翔べーその翼で」(「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」可能あらた作・仲武司演出)は、6月の福井方面の公演で終了します。

新たに、全国こども・おやこ劇場・及び小学校公演、はるき悦巳原作「じゃりン子チエ」を劇団の作家駒来慎の脚色、道井直次演出で、3月26日、小豆島演劇祭典に出演。以降6月の北海道を皮切りに長期の移動公演にはいります。

一般公演は、川村光夫作「うたよみざる」を岩田直二演出で、5月18・22日、関芸スタジオで公演。

附属演劇研究所では、31期生本科卒業公演を、野坂昭如作・柴崎卓三脚色「かあさんが話してくれた戦争の話」を、仲武司演出で、3月12日、吹田メイ・シアターで公演。

(545) 大阪市阿倍野区文の里四一八一六

青年劇場

〇六六二二二二二二

昨年は、総ステージ数が四百を超え、史上最高を記録、通年三班体制がほぼ定着しつつありますが、団員総数は三年前と同じで、その過密さがうかがえます。その中で一つ一つの舞台をとりこぼすことなく務めあげてきた強いアンサンブルは一人一人の力として蓄積されるでしょう。

昨年は、四四四回上演の「少年とラクダ」七二七回上演の「青春の岩」の二つの作品が打ち上げとなりました。両作品とも戦争と平和を正面からとりあげた作品として惜しまれながらの打ち上げでした。又、「少年とラクダ」が「ファミリー劇場」公演、「シシとササの伝説」が「青少年劇場」公演として東京における公演を行ない、青少年観客の新劇はなれがいわれる中、その意義が高く評価されました。

今年正月明けから新年三本の仕込みが同時進行、更に養成所の卒業公演、道具制作、新年度にむけての学校普及と、上を下への大騒ぎ。そのうち「真夏の夜の夢」が三月二日から首都圏学校公演で幕を開け、次いで「恐竜族に敬礼！」が公開GPを経て小豆島演劇

たのですが、全団員が役者・スタッフに総動員された事もあり、券売まで手が回らず、目標の半分も実現できず赤字をつくってしまいました。

この事は、1月末の劇団総会でも話し合われ、「劇団全体の制作力が落ちていた事」「目標の立て方が安易だった事」等々があげられました。仕事が年々忙しくされて、劇団員の減少、会場費等も上昇しつつある今日、この弘演で継続しつつける事の困難をかえりて創立25周年を迎えるにはどうするかが話し合われました。

運営委・役員は引き続き同メンバーで頑張る。今年25周年記念公演を持つ。劇団員を増す。等を決定しました。

レバについては、候補作品は何本かでしたが、3月中には結論を出したいと思っています。

最後に「津川武一、三上斎太郎、作間雄二の文学碑建立募金」についてとりくんでいきます。(趣意書を同封しました)

レバと公演期日が決定次第、又お知らせします。(武中 正)

(036) 弘前市品川町一 プラザ内

〇一七二二三五二四六七〇

祭へ参加、また「ザ・チーム」は秋からの上演に備えての大特訓(ハンドボールチームの物語です)が行なわれました。

劇団は三月二十日二十一日の両日、二年に一度の劇団総会を迎え、そして四月十六日から二十四日まで定例公演「続・夜の笑い」を終えると「シシとササの伝説」が学校公演へ。同時に一昨上演され、全国公演が望まれた問題作「書かれなかった頁」の上演。実行委員会公演があり、その間に「夜の笑い」労演東北ブロック公演と、なんとこの上半期に六本の作品が上演されます。

これだけ働いても一向に楽にならない暮らしに加え、またぞろ「大型間接税」の動き：なんとでも粉砕しなければ！劇団は三月下旬、劇団あげて反対することを決議しました。大型間接税の火種を消すまでもに闘いましょう。(葛西和雄)

(160) 東京都新宿区新宿二一九二〇

間川ビル6F

〇三三三二二六九二二

劇団同胞

厳寒の地旭川も春のやわらかい陽ざしが感じられる今日このごろです。

劇団同胞も今年十二日目に入り、いつかは

地元根ざした作品を採っていましたが、やっこの秋、北海道を題材とした後藤竜二作「地平線の五人兄弟」を団員の大門正の脚色により公演予定となりました。しかし上演にあたっては、先ず登場人物四〇名以上という多さに、今から充分な準備にとりかからねばと、少い団員ながらも皆燃えております。現状がきびしいほど、これに立ち向っていくこそ、いま必要ではないでしょうか。

これまでの公演経過は次の通りです。

第十八回公演（八七年五月三十日）

「陽気な地獄破り」 演出・沢田和彦
第十九回公演（八八年二月九日）

「熱海殺人事件」 演出・本間弘幸

（071-13 旭川市末広4条8丁目 高桑方

〇一六六―五七―三八三六）

劇団山形

△活動報告▽

・八七年五月 移動公演

宮本研・作「人を喰った話」

・八七年六月 稽古場公演 3ステージ

「人を喰った話」 観客一五〇人

・八七年十月 「奇跡の人」 五八〇人

山形県芸術祭奨励賞受賞

・八八年二月 山形テレビ制作
「山形の昭和史」のドラマに出演
・八八年二月 県人オペラ「夕鶴」

舞監・照明・メイクを担当
（990 山形市東青田五―八―五

〇三六―三二―四一〇五）

（編集部より・年度は推測して書きました。
折角下さったのだからもう少し筆を加えて下さってもよかったです。）

劇団名古屋

こんにちは劇団名古屋です。昨年6月、

「イトハロボの劇列車」で始まった創立30周年記念公演も、8月のアトリエ公演「精霊流し」、11月の創作劇「夢工場・メイクアップする労働者たち」。12月のアトリエ公演No.2「門」を経て3月の「きらめく星座」で堂々の締めくくりやジャズ喫茶もしくはダンスホールと化したケイコ場で、ケイコの最後の追いつみに入っています。

今回は劇団の単独公演としては初めての、名古屋芸術創造センター進出です。過去に合同公演や名古屋主催の公演としては使用出来ても、劇団単独ではなかなか使用出来ないので現実でした。ですが今回は、劇団員の黒柱ともいえる30代が団結して舞台の主軸

をなし、20代が表に裏にと走りまわり、40代がそれをしっかり受けとめるという、劇団名古屋最高の布陣で取り組んでいます。この最高の布陣と良い劇場が合っ合って、どんな舞台に仕上がるか……。

尚この本の出来る頃には公演も終り、そして息つくひまもなく7月の名古屋演劇フェスティバルのケイコに取り組んでいる筈です。では8月の北海道でお会いしましょう。

（456 名古屋市熱田区新尾頭二―二―一九

〇五二―六八―二六〇一四）

釧路演劇集団

今年は創立十五周年の節目にあたり劇団総会（1・19）では展望も含めた基盤作り、創造姿勢について討論しました。

①秋に創立記念公演、それに向けて候補作品を検討する。5月にはケイ古場公演。

②創立以来借用のケイ古場に終止符を打ち、現ケイ古場の土地（古い倉庫の建物つき）を購入することを決定。（3月7日登記手続を完了。車で10分。土地30坪。二五〇万円、手続費用13万円、銀行借入にて一括払い。返済は月額3万、12月に36万円で五年払い）返済後ケイ古場の建設及び別の土地等について検討する。

③創造の巾を広げるため楽器の練習にとりくむ。金管、木管楽器を購入する。総額80万円。

④市内のアマチュア六劇団で組織している釧路演劇協議会を自らの創造姿勢を正すために脱会する。マンネリに陥り、互いの舞台を批評し合ったりの学ぶ姿勢のないところからは何も生れず、観客の減少しか招かない難な芝居の多い現状である。

⑤創立当初からの友の会（年会費千円、現在20名）を発展的に解散し、旧「友の会」員旧劇団員を核に、観客名簿・広告掲載の業者を地域的に網羅した「えんしゅうネットワー」づくりを一年がかりでつくる。これは公演毎の有機関係を維持するためである。

以上の5点が確認されました。しかしさし当てる急務は、団員12名の現状から新入団員の確保と燃えあがるケイ古場づくりです。八月、札幌で、多くの仲間と会えるのが楽しみです。

（085 釧路市新富士町四―一―五

〇一五四―五二―四〇五七）

（おことわり・僅かですが文面を整理させていただきますました。もも）

演劇集団土くれ

①創立二〇周年記念公演の締めくり、第三

五回公演「奇跡の人」は二月一日（日）二日

（火）六本木俳優座劇場で幕を降ろしました。

キャパ三〇〇席（補助含め三五〇）の会場に初日三八八人、二日目四〇八人という立錐の余地もない超員、両日で一〇〇名近い入場お断りが出るという状況となりました。たくさんの方々のご支援で、第一弾の「太陽の子」とも制作的には二〇周年にふさわしい大成功に終わりました。

「奇跡の人」は舞台の出来についても大変好評で、たくさんの方から感動の言葉が伝えられました。集団内では八六年、三三回公演の再演ということもあり、きちんとした総括をする予定しています。

②八八年の活動は年初公演というこれまでにない幕開けとなったことから、定期総会が四月二日、三日となっています。現在二〇年の積み上げに立って、二〇年の総括を創立メンバーやそれに続く中堅層だけのものとせず、若手を含め全体のものとするため、定期公演を秋に設定し、あせらずしっかりと討議を深める予定です。世代への引継も含め、新しい創造の活力を内部的にどう見つけ出していくか、二〇年目にしての深刻な問題も出されて

います。

③北海道フェスティバルへの参加準備をすすめています。現時点でも一人、二人ではない数を参加させることが出来そうです。

（石塚幹雄）

（108 東京都港区三田三―二―一

弓和ビジデンス三〇三福田事務所

〇三―四五―三三―五八六）

名古屋演劇集団

劇団創立四〇周年記念レセプション（一月二三日）には多数のご出席をいただきありがとうございます。おかげ様で予想を上回り二〇〇名近い方々のご参加をいただきました。この誌上をおかりして心からお礼を申し上げます。

さてこれからの予定は、三月二九・三〇日第24期研究所卒業公演、川村光夫作、北原雅子演出「うたよみざる」名演小劇場です。

四〇周年記念公演として、名古屋演劇フェスティバル88参加、井上ひさし作、浦はじめ演出「国語元年」に取り組みます。五日・九・一二日、六ステージで名演小劇場。いま各地の方言（特に鹿児島弁・東北弁等）に四苦八苦しながら、立稽古に入ろうとしています。

秋の公演は、名古屋文化振興事業団企画公演に、若尾正也演出「ペールギント」を名古屋劇団協議会合同公演として取り組む予定で現在話し合いを進めています。

又、代表の若尾正也が、62年度名古屋芸術特賞を受賞しましたので、その祝賀会を四月一八日(月)、愛知県厚生年金会館で行ないます。

夏の北海道演劇ゼミの取り組みは、劇団の公演が終るまではまだ実感として伝わらないようで、現在の所余り具体化していません。いづれにしても乗物は飛行機と電車の両方になりそうです。出来るだけ多勢参加出来るよう働きかけています。(沢田靖一)

(451) 名古屋市中区庄内通四一六一三
○五二一五二四一五九七五
演劇集団和歌山

雑事に追われてしばらく劇団通信をごぶさたしてしまいました。さて昨年から劇団はごたごたしていたのですが、ようやく本年度の活動が決まりました。

四月二日(金)七時、二三日(土)三時、七時、二九日(金)七時、三〇日(土)三時、の五ステージにわたって、岡安伸治作「太平洋ベルトライン」を楠本幸男

演出でけい古場公演をいたします。けい古場での五ステージは初めてのことであり、劇団活動を攻勢に転じ、全リ演加盟費を滞りなく納められるよう奮闘します。(幸)

(641) 和歌山市和歌浦南一丁目一四
○七三四一四五五三七
劇団展望

○昨秋、新作三本立てで上演した八ま昼のちやうちん No.40、41、42Vの集団改作に取り組んでいます。ひとつづつ再演していく予定です。

○手作り総合雑誌「足手」第三号の印刷に入っていますが、また増頁になるのでなかなかたひへんです。6月ごろは出せるでしょう。

○数少ない「硬派」の映画評論家・白井佳夫さんを囲んで会員制の八阿佐ヶ谷映画村Vが展望阿佐ヶ谷小劇場で昨年12月からスタート。

①「無法松の一生」②「王将」③「飢餓海峡」ときて、④「血槍富士」の予定。毎月第一土曜日。このあたり最近とうとう映画館が全滅(昔は五つぐらいありました)ということもあり、まずは好評。(小島 政男)

(166) 東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-3-32
○三三三三三二七三九
劇団支木

こんにちは。みなさんお元気ですか？わたしたちの新しい稽古場は最高です。

一月一五・一六日 市民文化ホール
「とおりゃんせ」(作・岡安伸治)
プロローグと十景

久しぶりの舞台公演です。長い期間の稽古でしたが、引越しも終り、開演ベルを鳴らすことができました。

現在、札幌での演劇フェスティバルに向けてがんばっております。

劇団は今年25周年を迎えました。しかし、未だに若い力が育ちにくくなっています。

若い人は入団して来ないし、来たとしても仕事や個人の事情で続けることができません。みなさんのところはどうか？

現在劇団員の数は18名ですが、実際に活動しているのは約8人位であります。その他は仕事や家庭の事情で、定例集会にも毎回出れない状態です。何とかしなければなりません。劇団の住所(稽古場)が変わりましたので、郵便物はこちらに送って下さい。

(030) 青森市長島四丁目21-13
○一七七一七七四六七七
神戸職演連

三月十一日、十二日の公演の舞台写真を送

りたく思い、遅れてしまいました。

二間四方の二重を動かす装置となつて大変な転換で、観客の皆さんからずい分と不評を買いましたが真面目な脚本を真面目に熱演していたとの感想もいただき、大いに激励されています。作者の大阪シナリオ学校の井上満寿夫氏にも観ていただき「思ったよりよかったヨ」と言っていたきました。

えん罪事件がモチーフの作品ですので拘禁二法反対で奮闘している兵庫県民法律協会や国民救援会兵庫県本部の支援も得ましたが、初日(金)一六八人、二日目(土・昼)が悪くて一〇三人と目標に達しなかったのが残念です。

上演したのは
作・井上満寿夫 演出・堀 斉
「走れ！おれたちの明日」

です。
「いつもながら新人サークル員のエネルギーが強烈でした。秋の公演に向けて意欲満々です。秋は9月30日、10月1日、シィガルホルの予定ですが脚本・演出は未定です。」

(650) 神戸市中央区山手通九一九一七
西藤ビル2F
洲崎雅春



○七八一三五一一六九六九

(編集部より・締切もすぎ、全部の原稿が印刷に入ってから届きましたので、写真は巻頭に組みこめませんでしたので、こういうことになりました。)

劇団はぐるま

日・中・台合作の「紅鼻子」が終わった。最初心配されていた手品や一輪車も何とか無事にこなし、大きな拍手をもらうことができた。一輪車については近くの遊園地で演っていた某国雑技団より良かったという人もいて、アザを作りながら特訓を重ねた一輪車班の面々にはこの一言が何よりのご褒美だったようだ。それにもうひとつ、舞台にMXバイクを登場

させたときにはお客さんかなり驚いたようだ。これの運転していたのが熊崎開示。階段を降り、四尺の高さから飛び降り、また階段を登って帰って行く。少しでもタイミングが狂えば客席まで暴走しかねない演技で、いつもひょうきんなクマさんが、舞台に出るときには毎回足が震えた、と言うほどの緊張感。おかげで事故もなく無事終了。おつかれさまでした。

この芝居は、内容は勿論だが、カーテンコールを観るだけでも価値があった。と言われるほどラストは感動的だった。日本(こはやし)中国(陳、宇)、台湾(姚)、三ヶ国4人が堅く手を握りあい涙で声を詰らせながら舞台あいさつを行なったことを、ここで報告しておきたい。五ステージ、二五〇〇人のお客さんにも、十分この感動が伝わったと思う。

さて、いまはぐるまが取り組んでいるのは、横内謙介作「まほうつかいのでし」。なみ悟朗が演出を担当し、劇団の若手メンバーによる公演を目指している。本番まで後一週間。どんな芝居になるか、まずはみてのお楽しみ……。(内田薫)

(500) 岐阜市西野町一丁目十一
○五八二一六五一八五二二

国民文化祭について

梶 武 史

一昨年に始まった国民文化祭は、東京、熊本に続いて、今秋は兵庫県で開催され、来年以降も埼玉、愛媛、千葉、石川と各県持ち回りで開催される予定になっている。国体の文化版といった形だ。

国民文化祭の主催者は文化庁、開催地都道府県、開催地市町村等となっているが、文化庁の主導によることはいうまでもない。

文化庁の開催要綱によると、文化祭の主旨を「国民一般の各種の文化活動を全国的な規模で発表する場を提供すること等により、文化活動への参加の意欲を喚起し、新しい芸能、文化の創造を促し、併せて地方文化の発展に寄与するとともに、国民生活のより一層の充実に資することを目的とするものである」と記されている。

また、中央には国民文化祭実行委員会、企画委員会等が組織され、実行委員会の会長は文化庁長官が指名し、開催府県でもほぼ同様

の委員会がつくられる。演劇関係者としては中央の実行委員に倉橋健氏、企画委員には同氏と加藤衛氏がいる。

文化祭の事業は主催事業と協賛事業からなり、主催事業を次のように規定している。

- ① 総合フェスティバル
アマチュア文化活動の新たな発展の方向性を示す内容とする。
- ② シンポジウム
アマチュア文化活動、地域文化活動等を含めた日本文化の動向について広く国民の関心を喚起するとともに、その振興の在り方を探る内容とする。
- ③ 分野別フェスティバル
合唱、民族芸能などの分野ごとに、県や全国規模の文化関係団体等から推薦された団体等を中心とした公演及び分野別の展示・展覧会を行う。

事業分野としては特に規定はなく、民俗芸

能、合唱、文芸、美術などのほか、お茶、お華、囲碁、将棋、カルタ、チェス、盆栽など生活文化全般が対象である。

実施方法を兵庫県の場合で見ると、さまざまな分野をコンクール16事業、フェスティバル22事業にまとめて開催することになっている。

国民文化祭がその主旨に述べているように、国民の文化創造を促し、地方文化の発展や国民生活の充実に資するものであるかどうかは現在のところ、きわめて疑わしいと言わざるを得ない。

地方の時代と言ったり文化の時代と言ったりはみても、地方自治とは名ばかりで中央集権体質がますます強化され、文化関係予算もまた軍事費の煽りをくって文化国家というには程遠い低水準に閉じ込められており、諸外国とは比較にならないお粗末さである。

そのような政策から生まれてきた国民文化祭に期待や幻想を持つことはどうだ無理な話である。それぞれの地域で宮々として自主的な文化活動を続けている人々、埋もれている民衆のすぐれた創造や文化遺産に光をあてることなどはとうてい期待できないし、国民文

化祭もその主旨とは裏腹に始めから視野には入れていないようである。言ってみれば、弱者切り捨て中央指向のお祭り行事なのだ。

実際、参加に要する経費は原則として参加者が負担することになっており、演劇の場合でも今年は舞台装置等の運搬費の半額を主催者が負担するだけであとは全て参加団体の負担である。いかにすぐれた作品を創っていても負担能力のない団体は参加できないわけだ。

国の行事であるにもかかわらず、経費の点で見れば私たちの自主的な企画である全り演劇劇フェスティバルと何ら変るところはない。私たちが納めた多額の税金は一体何処へ行ったのだと改めて言いたくなる。

のつけから経費の話になったが、文化活動を危機に陥れかねない新型大型間接税で神経がとがっているせいでもある。

経費の話が続けるならば、国民文化祭への参加には大きな負担を強いられる。したがって国や各自治体から参加者や団体への援助が必要であり、参加者や団体も積極的に援助を要求していくことが大切であるが、それぞれの自治体も文化政策や財政事情は国と似たようなものであるから容易ではないだろう。そのため自治体も企業からの援助を要請するこ

とが想像されるし、参加団体もまた企業の援助を期待するようになる。

金あまりの企業からの資金援助を拒否することもないが、企業からの援助を期待しなればならない国民文化祭のありようが問題であり、企業からの資金援助に頼ることによって、文化の商品化や自主的な文化活動の企業支配を招きかねない危険性を孕んでいることは確かだ。

政府が押しすすめている行革、民活政策を考えると、将来は国民文化祭まると企業意思によって運営されるということにもなりかねない。

だからと言って国民文化祭を傍観したり無視するだけでよいだろうか。むしろこのような企画を民主的なものにするための運動こそ大切であろう。そのため、文化祭への参加の如何にかかわらず、各地域はもちろん、特に開催府県では民主的な文化関係者が連帯しながら積極的に発言していくことが望まれるし、それは納税者としての権利でもあるのだ。この点、中央での委員である演劇関係の両氏の努力にも期待したい。

昨年の熊本では、熊本演劇協議会が実行委員会に参加し、開催当日の舞台進行にも当たっていた。兵庫県の場合は地域の演劇組織である兵庫県劇団協議会を自治体との窓口としながら演劇関係の企画に参加しているが、今後どのように具体的に関わっていくかは、劇団協議会で非加盟団体の動向をも参考にして民主的な討議を経ながらすすめていくことにしている。

しかし、意識の多様化や諸団体の孤立化傾向が著しい今日、他の分野との連帯活動は必ずしも期待どおりではなく、むしろこれからというのが現状である。

全り演では議長団会議等でこれらの問題を討議し、国民文化祭への対応はそれぞれの集団の主体的判断に委ねることとしている。このことは全り演の組織原則からは当然ではあるが、同時に各集団は集団内での討議はもちろん、地域の諸団体との連帯活動を強めて国民文化祭を真に国民のものにするための努力を重ねることを確認している。

劇団はぐるまの

「紅鼻子」公演総括によせて

萩坂 桃彦

劇団はぐるまの昨年十一月の公演「紅鼻子」については本誌前号でも「赤鼻のピエロの行方」（いずみ凜）、トピック「劇団はぐるまの快挙」（桃）の二つの記事で案内済みである。ところが、編集部へは公演が終ってどうという通信も来ないし、写真のカケラもない。三月公演「まほうつかいのでし」（作・横内謙介、演出・なみ悟朗）にとり紛れたのであると、内部事情がわかるので、それを責めるのではない。（と書いたが通信は届いた）

——と、ここまでが表向きの話で実は劇団では、ほとんど完全に「紅鼻子」総括を遂げているのである。座内機関誌「はにわ」一冊（五八頁）をつぶすほどの分量なので読めば成程とわかるが、入手できない本誌の読者には、前号で片道切符を買わされたかたちである。余計なこと、どうしてそれにこだわるのか、

はぐるまへのお追従も程々にしろと言われそうであるが、全くそれがないとはいえないが、実はこれには理由があるのである。引き金になったのは幻野の会発行の「幻野通信」（一九八八・一・二三、復刊3号）で読むことのできた、永平和雄氏の戯曲「紅鼻子」評の刺戟がそれである。

永平さんは「紅鼻子」公演を岐阜の演劇界における空前のイベントとしてむかえ、日中友好、国際文化交流の意義についてはつけ加えることは何一つないが、不審なことに、演劇としての評価はほとんど見当らず、僅かに十一月二十六日朝日新聞の劇評と「演劇会議」六十七号のトピック欄で見るといってところから筆をおこされ、イベントへの讃辞だけで、表現者の側、創造者の側、劇団にとって果してそれに甘んじられるだろうかという疑問である。その視点での、姚一葦氏作品

「紅鼻子」（いずみ凜訳「悲劇喜劇」一九八七年九月号）の分析が論旨の柱になっている。ここでそのすべてをつたえる余裕はないので要約する——

「台風のために避暑地のホテルにさまざまな境遇の人たちが足止めされている。アメリカから帰る息子を持つ紡績会社の会長と秘書の青年、破産寸前の若い経営者の二人組、作曲に行き詰って悩む著名な作曲家とその恋人、自閉症の娘を伴って避暑に來たサラリーマンの家族、社会主義中国ではない、台湾が舞台であり、そのまま日本でもヨーロッパでも、どこの資本主義国にも通用する設定。交通杜絶から復旧までの一昼夜を限った始と終り、大富豪からブチブルまでの人々の生活を点綴しながら、旅回りサーカス団が駆け込み、ハア鼻のピエロと関わることになる」と前置を紹介の上、たしかによく出来た作品であり、ウエルメイドという言葉もあてはまるが、しかし「歌あり踊りあり、マジックあり、涙もあれば笑いもある、そしてハビエロの献身と人間愛の提示に終わる、盛り沢山の人情劇には、真の人間のドラマが存在するだろうか、どこに人間や人生や社会について新たな発見があるだろうか。」という

ころへすすむのである。

急ぐので結論を先に言ってしまうと——

「ホテルに足立めされた数種類の人間たち（以下の叙述は必ずしも永平さんの言葉そのものではない）皮相な、時には便宜的な説明の域を出ないし、苦惱する作曲家の設定なども通俗的だし、喧嘩別れしてまた舞い戻って来て慰めたり励ましたりする彼の恋人の女性にいたっては素性も性格も何一つわからない。自閉症の少女を連れだした両親にしても、平凡なサラリーマンの旅行先での感情的軋轢と

れ「気づいてはいるのだが、それはそれとして見過して△作劇のうまさ▽を讃えて済むのか、と手きびしい。」「ぼくは△紅鼻子▽の舞台を観て、菊田一夫の△花咲く港△△東京哀詞△から△放浪記△等を思い出した。すくなくともそうした水準の、良質の大衆性をもったウエルメイド・プレイではないかと。」——これも永平さんの言葉である。

——にどれだけのリアリティを感じる事ができるのであろうか。幕切れの、サーカス団の踊り子のひとりが海におぼれ、誰ひとり救助に赴かぬのに泳ぎのできない彼がただひとりで海にとびこみ、少女を救ったのち溺死するという△△△は、まさに御都合主義ではないか」と決められるのである。

以上、いささか乱暴すぎる紹介になったけれど、別にそれに異を唱えるつもりもないこととで許されると思う。たしかに戯曲そのものについては、その通りと云えるのである。ぼくも一読、あ、これはチャップリンだと飲みこんでしまった。

戯曲そのものは永平さんのご指摘どおりだとして、問題はその先にある。劇団の創造がそれにどうこたえたかということである。戯曲に便宜性や人間の堀りや背景の浅さ乏しさがあったとして、それに気づかずいたら舞台は戯曲とともに沈没である。

実は上演を一回位みることで、そこまでの詮索は、そんなにラクな仕事ではない。永平さんも舞台の感想はあとにして、先ず戯曲の批評に手をつけられたにちがいない。むしろ

永平さんは、「演劇会議」六十七号に訳者（いずみ凜）の「この物語には実際に都合のよすぎる部分がある。」、トピック欄（桃）で「どこか教訓めいているが」との箇所にもふ

「熱い情熱と広い心で私に大きな視線を与

そのことで、イベントに酔い痴れたかもしれない観客に、もとより劇団はぐるまへの、いかにも永平さんらしいインパクトだ、とぼくはうけとめる。これはしかし劇団としても有難いとすべきように思う。上演の評判のよいのを理由に、戯曲の欠陥を免罪符にするなどはよくあることだ。劇作家こぼしひろしが健在の劇団はぐるまに、それがあつてはならぬとするのが永平さんの指摘ではないだろうか。

ところで座内誌「はにわ」の総括では「紅鼻子」上演の関係者が思いのたけを書いてい。いづれ手前味噌と言ってしまうればそれだけの話であるが、ぼくはやはり興味があるのだ。はるばる北京から迎えた中国青年芸術学院の著名な演出家陳頤女史とやはり有名な女優である于黛琴さんによる、岐阜での三十日間の稽古のなかで劇団はぐるまの一人ひとりが何を学んだであろうかという興味である。当然のことながら誰ひとり、それだけを目的として書いていないが、問わず語りで陳女史や于さんの風格は伝わってくる。列挙すれば次のとおりである。

えて下さったけれど、それよりも一番陳先生から教えられたことは、はぐるまが素晴らしいこと」(莊加真美)

「厳しい中に優しさがあり、いつも私達を気遣って下さった」(吉田越子)

「陳先生や于先生にも、わが子のような可愛がっていただき少しは成長したような気がします」(林隆昌「一輪車乗り」)

「陳、于、黛琴両氏を迎えて、芝居の熱い想いと迫力あるパワーに実際に触れることができたのは最高の収穫」(いづみ凜)

「陳先生と于先生がじっとみていました。そして私達の動き、表情、思いについて、体でぶつかって教えて下さいました。泣いたり、笑ったり、喜んだり、手をたいたたり、顔をしかめたり、だきついたり……本

当に素直な表情を私達に語りかけてくださった」(河井せつ子「自閉症の子」)

「時々子供を連れて稽古を見に行くと陳先生と于先生が気を使って、子供の相手をして下さるのです。大事な稽古中に手をわづらわけてしまい、本当に申し訳なかった」(カコみちる「音楽」)

「連日の苦しい稽古態勢のなか、陳さん、于さんの情熱的というか、大陸的というか、

その上に気配りのある稽古」(船渡治郎)

「陳顯はほんとうに力のある演出家だった。あのエネルギーとパワーとやさしい感受性、何よりも人間性」

「芝居をやる人間にとって一番必要なのは、芝居を愛する心だと言った陳さんの言葉」(なみ悟朗「紅鼻子」)

「日中友好等と大上段にふりかかせる必要はさらさら無いのだという、後から考えれば実にあたりまえのことを、自然な形で教えていただけたように思う。これが先ず一番の収穫でした」(三島幸司)

「陳さん、于さんはケイコ中実によく見て下さり、よく笑ってもらえて、ありがたかった。冒頭、セリフを言うことしか頭になかった僕に、受話器を取りながら、ボーイを追う仕草をつけたら等と、細かい注意を授かり助けられた」(藤本昭「支配人」)

「稽古に対して非常に厳しく、バイタリテイのある演出家だと、前にこばやしさんから聞いていたから緊張した。しかし最初のうちは、ほとんど何も言われなかった。じつと稽古の成り行きを見つめ、時折ノートにメモをとったり……今に、ものすごいダメが出るんじゃないかと思ったり、反面遠慮されているんじゃないか感じたり。しか

しサーカス団の一輪車乗りに拍手し、ツカさん(大塚鏡子)団長夫人の役のセリフに大笑いし、小珍の演技に、彼女の頭を、涙を流さんばかりに強く抱きしめたりして、役者の気分を乗せていくのはさすがだった」(浦田ひさし「自閉症の子の親」)

「陳先生の厳しく熱い視線。頷き、眉をよせ、首をふり、時には豪快に笑って、(好！)と親指をたてる。北京を代表する演出家なんて気取りはカケラもなかった。時には役者と共に涙ぐみ、役者を抱きしめる。すばらしい演出とはやはり(熱い心)だということであらためて教えられた想いがする。その横で熱心にメモをとり、通訳だけでなく細かい演技指導をして下さった于さんも又実にエネルギーで迫力に満ちていた」(汲田正子「自閉症の子の母親」)

「カッコいいことを云ったりやったりする人をすぐには信用出来ず、かなりの期間が要るのです。だから顔は笑顔でも心のどこかで警戒心があって心の底から喜んで相手と握手が出来ないのです。なのに、どういふ訳か陳先生に初めて稽古場で(ハニハオ)と手を握られた時、もう随分以前からの知り合いのように、ごく自然な心がそこ

にあったのです」(服部みつまさ「舞監」)

「私は名古屋空港を忘れない。陳、于両先生を迎え、姚先生を迎え、そして送った。みな、泣いて見送った。姚先生も泣いておられた。陳先生も于さんも泣いた。こんな感動を私は生涯忘れることはないでしょう」(こばやしひろし)

急いで拾ったので見落しがあるかもしれないが、以上が、劇団のひとり一人の、肌についた両先生の印象である。これに、あの堂々としたお二人の風格をかさねると、情熱的で暖かい、そしてゆきとどいた稽古のありさまが想像できる。つまり、劇団は芝居づくりのたのしさを理想にちかいかたちで通過したのである。

「紅鼻子」の舞台で、どこかこれまでのとはぐるとは色合のちがっているのを、ぼくも感じた。しかしそのちがいは際立ったものではなく、むしろこの感触は前にも一、二度出会っているともいえる、たとえば汲田正子さんの「血の婚礼」などで受けた、あの、やさしさのこもった熱さである。

それが「紅鼻子」では大輪の花となって咲いている。

このゆたかさは、こばやしひろしの論理性に陳顯女史のあふれるような情感が加味されたところからきたものと、ぼくは考えた。

こばやしひろしの特徴、ロジカルな面は、人物設定を簡潔にし、セリフを大巾に整理してたたみこみ、登場人物間に対立をつくらせて盛り上げるという得意わざである。

永平さんの指摘された戯曲の甘さや人物の浅さに彼が気づかぬはずがないし、第一その前に、中国留学中でこの芝居をみたいずみ凜と加納豊美のふたりが、はぐるまによる日本上演に賛成していない。かの女らからして、この戯曲を甘いとしたのだ。その話はぼくも聞いて知っていた。

だから上演にふみ切ったのは、戯曲がすばらしいという認識からではなくて、この台本で十分、中国と日本の、熱い握手の舞台がつかれるという、むしろ位相を変えたこばやしのロマンである。

と云い切ってしまうと別の話になりかねないが、昨年、南京虐殺五〇年の戦争の痛みを据えて、戦死した亡兄への哀惜で書いた「カシナ」の咲き乱れるはてが先行していること、かれの「中国想い」のふかさをあらためて思うのだ。しかもそれが地方劇団としての

発想なのだ。

もう予定の紙数がきた。これも「はにわ」からの転用だが、「紅鼻子」の作者姚一蕓さんの手紙(部分)を紹介しておこう。

「わたしたち(姚氏夫妻)が今回、岐阜を訪れたことは一生のうちで最も忘れたい思い出です。送っていただいたビデオは非常によくとれていました。これをダビングしてうちの学校(国立芸術学院)の演劇科と図書館に永久保存し、学生たちの学習と参考のために使うつもりです。曲終人散(イベントが済んでひっそりとなること)、しかし私達の友情は永遠のものにしたいと思います」。

「なみ悟朗の好演をはじめ、劇団が丸とあってとりくんだ努力とショウの場面をよく消化した成果は認めなければなりません。特に前半をカットして苦心した演出、作品の短所を上演によって救おうとした意図もよくわかりました。ただその上で、中日友好の意義を十分認めた上で、今功利を捨てて創造しようとする現代演劇の志は何かを問いたいのです」このしめくくりは永平さんである。

宇野さんは私の演劇の師

大橋 喜一

宇野さんは私の演劇の師。

もし、「君の演劇での師とよぶ人をひとりだけあげよ」とだれかに設問されたら、私は宇野重吉氏の名をあげる。ただし、それは演劇の師であって、戯曲の師ではない。そして、現実的には演劇は戯曲よりはるかに大きい。戯曲は演劇の形を与えられることによってのみ、はじめて生命を与えられるものだから。

昨年の暮、家族が入院して大きな手術を受け、私はずっと付添看護をし、正月すぎてやっと退院にこぎつけた。その夜看護の疲れのせいか体調をくずしておかしくなっていたとき、劇団からの電話で宇野さんの計報をきいた。疲労と衝撃とで一時期動けないくらいだった。不整脈がはげしく意識され、その夜とても劇

団まで行ける自信がなかった。ショックは一週間ほど後をひいた。基本的にはその時の私の体調にあったが、宇野さんの計報だけのこではないのだが、心理的にはうつ状態、生理的には自律神経の失調におち込んだ。

このところしばらく、そしてかなり長い期間、私は宇野さんにお会いしていなかった。私の体調がすぐれず劇団へもほとんど顔を出不さないう状態ではあったが、卒直に言えば私は宇野さんとお顔を合わす機会を避けるようにしていた。理由はなんとなくこわいからである。なぜか私は宇野さんがこわくて仕方なかった。その心理的な根本はよくわからない。ともかく私には宇野さんくらいこわい人はほかにはいない。それくらい私の心の深いところで、私を呪縛していた人だったともいえる。

う。(こうしてペンをとって、そのことを考えるだけでも、私の心には小さな波が立つ。)こんな状態は、宇野さんにも私にも決して好いはずはない。と、わかつてはいてもどうにもならない心の呪縛の縋。そのような私の心の有さまを、多分宇野さんは見抜いていらしたと思う。宇野さんが見抜いていると私が思っていることを、宇野さんはまた察しているにちがいない。宇野さんがもつこわさは、その心理的直観の鋭さにあり、そしてその鋭さは私に対して、いつもむき出しに射出されているようであった。私はこの方の前に出ると、出ると意識するだけで、その洞察の心理的直観の矢を意識して、胸の動悸が高まってしまふ。そのようなこわさを私はたえず意識せられた。その意識があるために無意識に宇野さんを避けるように行動していた。

二八年頃、私はなけば絶望のどん底にいた。専門劇作家の道に踏み出してはみたものの、その道で生きてゆくには、基礎的な学力も、もとより学歴も、知識人社会へのなんの人的脈絡も、わずかの知名度さえもなく、その上新劇界に自己を位置づけさせるなんらの才覚ももち合わせない自分を意識して、所詮私は

市井の一労働者として生きるしか道がないと、弱気になっていたその時、文芸部員として劇団民芸への入団をすすめてくれたのが宇野さんだった。だから私の心の底には、いつも宇野さんに拾いあげられたのだ、という意識がある。この当時、労働者上りの劇作志望者が劇団文芸部へ入れるとの、宇野さんの決断がなかったとしたら、あるいは私の専門劇作家への道は途切れていたかもしれないと思っている。

当時(六〇年安保前後)、すでに「楠三吉の青春」という戯曲(劇団青俳上演)で、新劇戯曲賞をうけ、わずかではあるが新劇界への足がかりをつけていた私が、このように断定するのは弱気にすぎると思う人もあろう。それは有名大学に籍をおいたことがあり、そのことでマスコミ知識人社会に、先輩輩の人脈知人を持ち、知識人社会をなんとか渡り歩く基礎的意識の所有者にしてはじめて言えることで、学歴学歴なし、人脈知人もなく、まして自信もなければ、生活基盤もない一介の労働者あがりにとっては、このプロレタリア意識の強い新劇界でさえも、生き抜くことは容易ではない。まして劇作一本で食おうなんて、たとえ知名度や学歴をもっているにも困難

なこの世界では、無暴に近いことを感じていた。生活費は小説かなにかで稼ぎ、合せて知名度を高め、あるいはマスコミに顔を出し、それに引き廻されることなく、何とかタケシさんのように強力に自己を売り出す才能の、百分の一でもたない限り、労働者上りの弱虫体質の私には生存困難な世界である。

こうした戯曲書きの生きてゆくことの困難さ、まして妻がかわたそのむずかしさを、よく知り抜いている苦勞人が宇野さんであった。だから私を拾いあげ、私は拾いあげられて、今日曲なりにも劇作家として生存している、私は思っている。私が宇野さんをこわいと感じることの根底には、この人のあの時の決断によって拾いあげられることなしには、劇作家としての自己の存在がなかったらうとの、意識があるのである。

民芸に入団しても二三年間、私は世に出なかつた。(民芸での作品を発表する機会がなかつた。)戯曲を書いても板にのらない。大劇団とよばれる民芸での一晚芝居を書き得るコンスタントな力は、まだ私にはなかつた。(たとえ新劇戯曲賞をとってはいても。)という劇団の判断がある。より正しく言えば、

民芸入団後の最初の舞台作品を失敗したら、おそろくマスコミも相手にしなくなり、新人劇作家の売出しをしにくることを、知りぬいている劇団制作部としては、新人の初陣にはとても慎重であった。これらは後年になって私が知り得たことであるが、私が民芸に入団する以前に書いた戯曲の、他劇団での上演にも、劇団は細かく気を配っていた。出来ることなら、民芸での第一作の発表までは、それまでの一切の戯曲の上演も許可することがないように。民芸での初陣まで手垢を一切つけないためである。このことはじつは劇作家の著作権に係わる微妙な問題でもあるが。

これらの事柄で宇野さんが私になにかを言ったということは、もちろんまったくない。話はずだつた私は、それらの制作部の意見なるものの多くを、結果としてはほとんど無視してしまつた。著作権者としては他からの制肘をうけたくないとの意地もあった。私の古い作品の、中小の劇団での上演を、それらを考慮して取り止めたことは記憶していない。幸いそこでは大した失敗もなければ、話題になるような成功もなかつた。もともとマスコミの関心の外にあった劇作家であつたことが幸

いしたのであろう。だが後から振り返ってみると、危い橋がなかったわけではないようだ。多分そうしたことがあった後では、私をおさえることができなかった制作部のだけれが、宇野さんから叱責されたということは推測される。(あくまで推測である)私は愚鈍であるからそれらを気にとめなかった。つまり愚鈍な性格であるため、劇作家としては自由であったようだ。

マスコミというところは新人が出ると好奇心からかき立てる。二作、三作とすぎると余程話題性がなければ、また他の新人に目を向ける。だから第一作、第二作では絶対にヒットを打たなければならぬ。それまで、劇団は若い劇作家に投資する。(例えば貧しくあっても)そして手垢に汚れることなくマスコミ界でも成長させなければならない。その点映画スターやプロ野球新人育成と同じ法則はたらく。(経済基盤のことは別にして)宇野さんはそれらの点をじつに緻密に計算する人で、それらを直接ではなく、制作部を通して指示させる人だった。このあたりから宇野さんは私に対して、次第に強面を見せるようになってゆく。但しそれらはすべて劇団指導者対劇団員の関係においてであって、いや

しくも演出家対劇作家の関係であったことは一度もない。つまり組織内の仕事の面に限られていて、芸術上の関係では微塵もそれはなかった。その点の人間関係での対処の仕方は見事であり、その人格の切換えの素早さと徹底さは、まさに俳優であるために水際立っていた。あのこわさもあるいは俳優の演技として計算されていたのかも知れない。天真爛漫な私がコロリと参ってしまうのも仕方がないといえよう。

宇野さんの演出による私の第一作公演は「消えた人」(一九六三年)であった。この第一作はたいへん問題が多い政治演劇(松川事件)であるがために、上演に至るまでのエピソードは多々あるのだが、この稿の目的からは逸れるので略そう。私の戯曲で宇野演出によるものは「消えた人」「コンペア野郎に夜はない」(六五年)「ああ野麦峠」(早川昭二共同演出・七〇年)「銀河鉄道の恋人たち」(七一年)の四作品である。これらを通して私は単に舞台技術上のことだけでなく、演劇行動すべてについて有益な示唆を多く受けたが、ここではそれらの概略を项目的にあげるにとどめておこう。

- 一、演劇公演での社会的・政治的責任について。(これはとくに「消えた人」の場合。)
- 二、演出家の目的の視点による戯曲の検討。
- 三、戯曲の性格とけいこ方法の組み立て。
- 四、戯曲の主題の構成と場割との関係。
- 五、配役の方法、声のトーンによる役の組合せ。(とくに「コンペア野郎」において)
- 六、人物のせりふ(行動)の矛盾と、性格の表現。
- 七、せりふの分析、俳優の追求と指導の方法。
- 八、せりふの技術、(発声法や発音の質と役の内的過程)
- 九、ドラマの進行と、間、トーン、リズムなどの関係。

二、戯曲の内面、構造、文体などにひそんでいる音楽的なものについて。

エトセトラ……数えあげればきりが無い。それらは整理されない断片的なメモとして、いまだに私のノートに埋もれている。これらの教訓の七割方は、劇作というよりは演技指導や演出法に関するもので、劇作の根底にふれるものは三割方といえよう。これらの経験を通して、私は舞台作りという仕事と戯曲を考えせりふを書くという仕事のちがいが、つま

り舞台作りと文学との、本質的なちがいを学んでいった。たしかに俳優の演技や演出家の方法は、戯曲に大きな可能性をもたらすものではあるが、戯曲書きの真の悩みを解決するものは、根底を文学におく劇作の方法ではない。そのことは一方では私の、劇作手法としてのプレヒトへの傾斜をよびおこして行くものでもあった。

ところで、私が宇野さんから学んだものは、以上の舞台上、芸術上のことだけではなく、それ以上に八職業的演劇集団の経営Vというものである。もちろん文芸部員である私は経営制作にたずさわったことはない。しかし何年間かの劇団総務という仕事と、俳優教室担当者としての立場から、この文化的にきびしい日本という社会のなかで、劇団という組織を——ある一定数の人々の芸術生活を保証しながら存在しつづけるには、日々どのような課題のかわずかをこなさなければならぬいかを、一日二四時間をそのことのみ念頭に置いて、ままたぬ組織の部署々々を、ままたぬ劇団員全体を、鬼のようになって叱咤しつづける宇野重吉という人の行動を、目のあたりにすることによって、いやおうなし

に知っていった。

私が宇野さんを演劇の師とよび、畏怖している所以も、その経営の総師として垣間みた鬼神のような人格への畏怖であることはたしかである。

おもうに、劇作——戯曲とは、現実を映すかもしれないが本質的には虚構世界である。だが、演劇の経営とは、現実世界で生活してゆく芸術的企業で、それ自体は経済で泥まみれになっている現実である。その点宇野さんは私などが足もとにも及ばない現実人でもあった。

……私は、亡くなられる前の宇野さんからかなり離れていた。宇野さんがその日頃にあつて、私をどう思われていたかはまったく知らない。おそらくは眼中にはなかったであろう。あるいは忘恩の徒と、あるいは思い出すのいやな奴とも、思われていたかもしれない。それはそれでいたしかたないことだし、それなりの理由もなくはない、と思っ

ている。では、そう私が思う具体的な理由は?……もとより、しかとはわからないが。ただ私の心が宇野さんから次第に離れるに

は私が劇団員として受けた叱責にある。叱責の内容のひとつは著作権に関する事だ。劇団民芸で初演して世に知られた私の戯曲の上演権に関する事で、そこには私を育てあげた劇団の指導者としての立場があり、私には著作権者としての立場があった。叱責の具体的内容は書かないが、叱責された私はほとんど自分の立場を主張しなかった。主張すればおそらく宇野さんは激怒し、その激怒をみれば退団すると言いかねない自分の心を知っていたから。そこまで踏み切れない自分を知っていたし、宇野さんもそうした私の心を読んでいたのかもしれない。私は自分の立場を主張せず、ただ謝った。「自分の考慮が至らないから」と。謝れば宇野さんは優しくはなった。でも私の心は少しづつ冷くなり、信服の念はうすらいだ。もうひとつの事件はかなり偶発的だった。それは宇野さんが演出する予定であった私の新しい戯曲について、私が説明をしながら不用意にもプレヒトの演劇用語を使ってしまった。八異化効果Vという言葉である。宇野さんは「それはなんのことだ?説明してくれ」と、すごい形相で反問した。

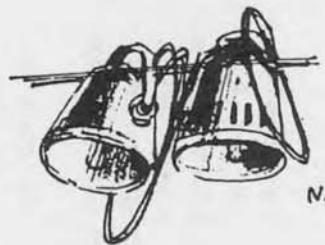
たいへん感情的で怒りを押えているように思えた。私は思いがけずに言葉がつまりしどろ

もどろになった。その直後に宇野さんは演出を下りられてしまった。作品は別の演出家にわたされ上演はされたものの……

そうした小トラブルはほかにもあった。そのたびに私の心は宇野さんから離れていった。それは悲しいことだったが、どうにも致し方のないことだった。そしてある時期から、私はぼんやりと「もはや私の作品が、この劇団で上演されることはあるまい……」と考えるようになった。でも自分から退団を言い出す気持にはなれなかった。それくらい自分の劇作家としての存在について、宇野さんの恩になったことを忘れていけないとの意識が、歯止めとしてあったのである。

私にとってもっともこわい人はいなくなっ
てしまった。でも宇野さんのこわい顔はよく
よくみると悲しい顔にも見える。宇野さんは
その悲しみを悲しみとして他人には見せない
お人であった。私は思う。私が若く、宇野さ
んもまだまだ若い日のころ、宇野重吉なる人
の決断によって、私の戯曲は新劇界の片隅に
咲きはじめることができた。私の生涯にとっ
てもっとも輝かしい日々のこと。けいこ場で、
私のとなりには鬼が坐っている。戯曲のせりふ

をたどりながら、目をつぶり俳優のせりふに
耳をすまし、突如目を見開くや、舌鋒するど
くダメを出す。ときには立ち上り俳優たちを
睨めつけ叱咤する。そこにはけいこ場の鬼が
いた。
鬼のとなりの席で、作者である私はうつと
り鬼の顔をみている、幸せな瞬間を、私は
生涯忘れないであろう。
(八八年三月)



△新刊紹介△

藤川健夫戯曲集(1) 二二〇〇円

△内容▽ (反核劇・反戦劇)

・ある反逆者たち — 尾崎・ゾルゲ事件

尾崎 (作中大垣) の妻の美保子が少い

場面ながら香りをはなっている。

・戦火にゆれる紅い花 — 沖繩秘話

敗戦一九四五年から一九七三年にかけ

て戦争の傷痕を身につけて終る女の一生。

・暗い空 — 沖繩を返せ

小学五年の桃原隆子さんが演習中の米

軍のトラレーに突き落されて死んだ!

・傷だらけの手

— 被爆詩人福田須磨子モデルに

作者が改稿を何回にもおよんでかわ

る人間の生き方はいまだに大きな課題だ。

・まだ遅くはない

— 核戦争が起これば

核戦争で日本が全滅するというショッ

キングなSF・恐怖劇。

発行所 青雲書房

東京都文京区大塚三二〇一四

TEL 〇三一九四四一六〇〇二

劇評

心を搏たれた「神戸庶民伝」三部作——

小松 徹

神戸の劇団四紀会が、実にいい仕事をして
いる。創立三〇周年を記念しての、神戸庶民
伝三部作の連続上演だ。

「ああ八月の陽の如く」—— 昨年七月末

「雨になるらむ 風になるらむ」—— 昨年

一〇月末

「青葉茂れる」—— 今年二月末

いずれも座付作者内田昌夫の作。前二作が
それぞれ三演、再演であるのに対して、最後
の作品は今回が初演の最新作である。

▲人に顔があるように、町にも顔がある。
その顔を伺おうとしたのが、このシリーズの
きっかけだった。顔とは個性である。人が背
後に押しやった過去の営為の中にその顔を見
出そうとしてきた。……

と「青葉茂れる」のパンフレットにある作

者自身のことばかりも察せられるように、最
初から三部作と意図されたものではなかった
し、作者の態度が一貫しているのは当然のこ
とながら、顔の伺いかたはさまざまである。
作品の練りあげかたにも差があるし、演出者
のちがいがくる様相の相異もある。

しかし、いずれの作品とも骨格あくまで太
く、劇団の総力をあげねば成立しようのない
大作を、これだけの期間に休みなく連続上演
していくということは、並大抵のことでは出
来ない。

この劇団の三〇年が、いたずらに時日を重
ねてきただけのものでなく、しっかりと神戸
の地に根をおろしつづけてきた実績——歴史
の積み重ねの上にあることを証明してみせた、
誇っていい仕事であった。

わけでも「雨になるらむ 風になるらむ」
の舞台成果は、アンサンブル(単にまとまり

のよさといったものではない、創造的な内実
をもって形成されたものとしてのものだ)の、
ほとんど頂点をかけのぼったものとして、私
の胸を強く搏つものがあつた。その舞台を中
心に、まずは語りはじめたい。

ここで一言お断りを。一昨年夏発行の本誌
63号で、演劇生活からの全面撤退を述べた私
が、のこのことまた本誌に顔をのぞかせるに
いたつたことについて。あれから一年余、演
劇との関係を一切断つてきた。その間にも病
勢は進行、遂に昨年五月からは、人工透析生
活に入り、器械の助けをかりなければ生命を
維持出来ない体となった。さまざまな生活制
限を強いられ、窮屈な日常である。ところが
体調が予想以上に快復してきた。と、自分で
はほとんど離れきつたと思っていた芝居への
思いが、噴きあげてきたのである。七月末に
「ああ八月の陽の如く」を観劇した後、九月
から本格的に観劇を再開した。

しかし本誌にまた原稿を書くようなことが、
こんな早くにやってこようとは思ってみない
かった。ブランクがあるし、広島まで出かけ
て暑い体育館で観た「ガリレイの生涯」——
東京演劇アンサンブルの公演を除いて、私

の胸を叩いてくれる舞台は皆無だった。地元
関西の芝居は特に虚しかった。一年余の空白
が無念に思われるような舞台にぶつからない、
批評意欲もそられなかったからである。

十月末神戸で、「雨になるらむ 風になる
らむ」の開演を待つ間も、四百余の客席に百
人も入っていない観客席で、私の心は寂寥たる
ものだった。

ところが、幕が下りた時、私は静かな興奮
のなかに居て、しばらくは席から立てなかつ
たのである。受付近くにいた劇団代表の岸本
君に、△この劇評、演劇会議誌に誰か書くの？
まだ決まっていれば是非書かせてほしいな△
と申し出てしまったのだ。批評を書きたいと
いうよりも、この感動をより多くの人々に伝
えたいという思いが、私をつき動かしたので
ある。

劇団四紀会が今回の企画を決定するにあたっ
ては、団内でも相当異論がとび交い、もつれ
もしたようである。特に若年層からの異議・
反発。

「三〇年の歴史といっても、自分たちには
さして関係ない。現在が問題なのだ。それに、
大正末期からの神戸の庶民の歴史という重い

課題を、なんで背負わんといかんのか。それ
は古い人たちのノスタルジアに過ぎないので
はないか——etc」

稽古に入ってから、そのことはなお引き
ずっていたようである。事実「ああ八月の陽
の如く」の舞台は、初演（一九七八）再演
（七九）と、磨きぬかれていった成果を知る
私からみれば、不満の多いものであった。た
とえていうならば、演出者（梶武史）を中心
に、ベテラン・中堅陣が騎手となって若馬——
若年層——たちに必死のムチをあてる。若馬
たちも喘ぎながらも、なんとかコースをはず
れることなく馬場を駆けぬけ通したという舞
台だった。エネルギーにあふれてはいたが、
騒々しく、粗かった。

後刻聞いたことだが、本書一〇日程前になっ
て、ベテラン・中堅陣の作品への深いかかわ
りよう、そこからくる確かな演技形象を通し
ての相互信頼の姿に、若い人たちの眼の色も
変ってきたという。しかし時おそし、それは
「ああ八月の陽の如く」では、アンサンブル
にまで昇まるには至らなかったが、つづく
「雨になるらむ 風になるらむ」にむけての
スタートを整え、創造レベルを押しあげてい
く推進力になったことは疑いない。いつもな

ら配役発表後、辞退者が出るのが通例なのに
「雨——」では一名も出なかったというのも、
その証しだろう。

演出が初演の岸本敏朗から、中堅の三村省
三に代ったことも、今回の場合成功の大きな
ポイントになったようだ。

初演（一九八四）の舞台も私は観ているが、
非常に活力のあふれたものだった。だが欲ば
りすぎてやたらエピソードが多く、整理しき
れなかったのを、チンドン屋に時代の流れや
世相を語らせることによって接点を印象づけ
ようとしたのだが、かえって出来事全体を風
俗の枠内にとどめてしまったように、私には
思えた。

今回はチンドン屋を含めて一切の説明的な
描写を排し、出来事のなかにある人間と人間
の関係、その推移・変化のプロセスを通して、
さまざまな人間模様をくつきりと浮びあがら
せることに重点がおかれた。エピソードも整
理され、あるいは追加されて、個々が深化す
るとともに、それぞれが時代という太いロー
プに深くあみこまれていく様相が、説得力を
もってモンタージュされていく、そのように
ダイナミックに再構成されたのだ。

「ああ八月——」は大正末の三菱・川崎の

大争議、労働運動の昂揚のなかで、結末は敗
北に終りししたもの、そのなかで懸命に生
き、成長していく職工とその家族たちの成長
にスポットをあてて描かれた。

「雨——」では昭和のはじめ、吹きすさぶ
世界大不況のさなか、急速な技術的革新と国
際的潮流にのことでそれを切り抜けようとの
資本の思惑をはねのけて、勢力を伸し足
場を固めていく軍権力の拡大への流れを縦軸
に、懸命ながらも、分断され疲弊していく庶
民を描ききろうとする。

「ああ八月——」で父の警察権力による惨
殺と引きかえにして成長を遂げた平八は、こ
こでは下駄みがきの仕事から、近所の人たち
の困窮をなんとか救おうとはじめた内職の世
話が、結局は陸軍に納入する防寒帽の下請の
ピンハネで生計をたてる存在となり、彼を支
えてきた清二のエネルギーは、焦りのなかで
アナキーとなり、運動資金の借金のかたと
して妹を苦界に沈めるに至り、浜口首相暗殺
を策すが先をこされた。

彼らと同じ町内に住む下級巡査の文之助の
善意も、苛酷な時代にあつては庶民の力にな
らぬばかりか、権力の側からも見切られ、一
家離散に追いこまれる。

夜学に通って技術革新の担い手たらんとし
た青年職工のかがやける瞳も、不況の進行——
誠首——思想統制の強化によって圧殺される。
借金にあえぎながら、女と酒に溺れゆく小商
人とその家族。
国家主義の歪んだ教育をうけ、死をおそれ
ぬと晴れやかに語る青年士官は文之助巡査の
娘の婚約者だ。娘は娘で熱心なクリスチャン
であるが故に、現実と神の教えのはざままで苦
悩しつつも明日を探ろうとはするが。
さまざまな人間たちが、その周囲の人々を
もまきこんで、さまざまな文様を描き、軌跡
をつくる。

作者はまた、資本と軍との確執——癒着にも
筆を及ぼして時代をひっぱりつる力の根源を見据
えようとする。

こうした人間像を、あくまで庶民の側に身
を寄せながら、作者は庶民——善——といったステ
ロタイプ化した視点を脱して凝視する。否応
なく抱えてこまれた内部矛盾の深まりのなか
で、苦吟し、人を傷つけ、過ちを犯しながら
も、出口を求めようと喘ぎながらも生き続け
る人々を描く。哀しく、しかしそこに埋没す
ることなく、また生命力はあるが限界を越え
られなかった庶民の姿が、観客の前に立ちあ

らわれるのである。

最終景、菊の紋章をつけた艦首を描いた紗
幕の背後で、観艦式に熱狂する庶民の姿に、
不況脱出の途を軍拡に托す夢をみて、観客は
胸を刺される——ところへ少女によって詩が
口ずさまれる。

言わぬ語らぬ蝶ふたつ／等しく立ちて舞い
行けり／うしろを見れば野は寂し、前に向へ
ば風冷し／過ぎし春は夢なれど、迷ひし行方
は何処ぞや。
……………

風雷の雲に委ねて雨となるらむ／盲目の時
の流れに風となるらむ／時は昭和の御代なれ
ど、乙女の心に鬼が住む／洞穴深く世を呪い、
眼じり上げたる鬼がいる。

厳しい幕切れである。

私がその時の自分を、静かな興奮のなかに
居たと表現したことを、わかって頂けただろ
うか。

これだけ凝縮度の高い舞台をつくりあげた
功績の第一は、作者と演出者の新しい組合せ
にあるが、初演の成果があつてはじめて凝
縮作用が可能であつたろうことは無論のこと

である。

それだけではない、演技陣の昂まりを、こ
こで強調したいのだ。ベテラン・中堅陣が牽
引車の役割を果たしたことは言をまたない。
平八＝小森清太郎、清二＝司村清の中堅は
「ああ八月の陽の如く」初演以来の持役で
「雨になるらむ 風になるらむ」にも登場し
て舞台を引き緊めた。文之助＝文之助巡査＝大西衛一
はベテラン中のベテランだが、苦悩する下級
官吏の姿を、余計な情緒表現におちこむこと
なく、サラリとだが適確に演じて、舞台の興
行きを深いものにした。いささか個人的感慨
をつけ加えさせてもらうと、十年程前にはく
さい演技の代表格のような人だった、最近に
なつてこの人の演技の位は変わった。こういう
現象に接すると、「人間年をとっても変わり得
る」ということを信じさせてくれるから嬉し
い。

しかし「ああ八月——」の時とちがって、
彼らが全員にムチをあてているといった様子
は、「雨——」の場合には感じられなかった。
若い人たちが、それぞれに、他人との関係で
人間像を追求していた。今眼をつむって舞台
を睨む裏に、よみがえらしてみても「ああ八
月——」では、熱演して舞台を引っぱってい

どうぞお受けとり下さい」と、謙虚に、だが
凛とした態度の観客への対峙がそこにはあっ
た。

ブレヒトではないかこれは——という思い
が、舞台展開の途中から私にはあったが、そ
れは確信となる。

演劇とは、与えられた、あるいは考案され
た人間間の出来事の生き生きとした模写をつ
くり出すことである。

これは、ブレヒトが「演劇のための小思考
原理」の、まえがきに続いている書きだしの言
葉だが、今回の「雨となるらむ 風となるら
む」ほど、人間間の出来事に徹底してこだわ
り、それを通して時代を切りとり得た創作劇
を、少くとも関西の劇団では観ていない。作
者や演出者、劇団にそれほどブレヒトを意識
することはなかった——というより、神戸に
はブレヒト劇連続上演の実績をもつ劇団どろ
があり、その舞台がブレヒト的というならむ
しろブレヒトからは遠いと思っているふしの
ある劇団四紀会が、私からみれば、もつとも
ブレヒトの創造態度に近い舞台をつくりあげ

た役者さんの姿が突出してうかんできると、
「雨——」の場合それはない。平八にしろ清
二にしろ、また文之助その他もろの人の、
場面のなかで喉にうかぶ。つまり人間関係の
なかでよみがえってくるのだ。熱演では全く
なく、静かで、それでいて矛盾をいっばいに
はらんだ空間が、観客にむけて提示され、モ
ンタージュされていくのである。

みんながみんな、急にうまくいった訳では
ない。うまいとかへたとかいう基準ではかる
気持を起させぬような演技が、展開されたの
だ。

たとえば、三菱川崎の争議の際、なんらか
の形でかわりをもった一人の女が、今は芸
妓に身を落しているし、という女が登場し、
ふとしたことで、同じ過去をひきずっている
清二とかかわることになる。演技についてい
えば、いわゆる芸妓らしさはないし、らしさ
を粧おうとする意識もないみたいだ。世態的
リアリズムの尺度ではあれば、到底及第点は
つけられない。ところがこの人物にすごい存
在感があるのだ。芸妓に身を落している現在
に、清二によって、青春を決定づけたであろ
う大争議の体験がよみがえり、ショートする
のである。見知らぬうさんくさい男が、すず

た——というのが、皮肉な教訓を与えてくれ
る。ブレヒト読みのブレヒト織らずが、退屈
なブレヒト劇を上演してブレヒトへの興味関
心を遠ざけている日本にあって、これは貴重
な警鐘である。

先に引用したブレヒトの言葉に徹底的にこ
だわること——というのは演技の質が変化す
ること抜きに、生き生きとしたブレヒト的空
間が現出することなどあり得ないことを、思
い知るべきなのだ、謙虚に、謙虚に。

ただ残念なのは、その生の舞台を観た人た
ちの数があまりに少いことだ。三日間で四百
足らずというのは、劇団側の努力を促したい
数字である。と同時に、たまたま上演前に地
下の食堂で劇団代表の岸本君、作者の内田君
と逢った際「どう、この頃（関西地域の）み
んな観にくる？」と問いかけたのに対して、
かえってきた「いやあ、みんな忙しいのか以
前ほど観にくてくれないなあ」との寂しげな
言葉がひっかかっている。

それに、引きつづく「青葉茂れる」の公演
が十分に「雨——」の舞台成果をさらに着実
に伸ばし得なかったことも残念であった。

「青葉茂れる」は第二次大戦末期、昭和一

にとつて、ポツカリあいた穴をうめる存在に
なる。それを香崎桃代という女優さんは見事
に追求しきったのである。

また、商売が危機に傾いているのに、女に
入れあげ、酒におぼれる夫に逃げられ孤軍奮
斗している女ナツ、娘ハルが居る。夫が入れ
あげている女三日月も追いつめられ、心中を
決意し、残余のものを処分して、娘ハルに手
渡して去る。ナツへのせめてもの謝罪の意志
表示だ。それを知ってナツは三日月に叩き返
したい。しかしその金子があれば、当座がな
んとか切り抜かれるのだ。この上ないほど
の悲劇的状況だ。それを延吉広子、山本圭子、
谷田環の諸子が涙に乾いた感性で提示して
く。

ほとんどすべての俳優たちが、情緒的表現
におちこむことなく、それぞれの生きかたの
根底にある矛盾を、胸いっばいにはらますこ
とに創造の核を握えて、かわり合っている
——と私には思えた。

「彼らはこのように生きること、時代と
かわり、かわられました。貴方たちなら
どのように生きましたか。——今日現在の生
きかたに、ささやかでも教訓が得られるなら、

九年秋から二〇年春にかけての、神戸和田岬
の裏長屋を主舞台に展開される。忠君の典型
とまではやされた、補正成を唄った歌から題
名をとったことは、年配の人にはすぐにわか
るほどのことだ。

夫や息子、兄弟たちを兵隊にとられて、残
るは女、こども、年寄りばかりとなった、下
町の庶民生活が中軸に据えられているのは前
二作と同じだが、大きな相異は、喜劇タッチ
で人物が描かれていることだ。

演出は「ああ八月——」と同じ、梶武史。
失敗作というのでは決してない。今回の
「ああ八月——」に比べれば、むしろ水準は
高いと言えるだろう。が、「雨——」の到達
点を考えると、どうしても評価が辛くならざ
るを得ないのだ。その辺りはどうか気配りし
ながら、以下を読みすすんで頂きたい。

喜劇には、過剰な表現がつきものである。
そこに難かしさがあり、落とし穴もある。表現
が上ずり、一面的となり、喜劇狙いが見えす
くと、しらせを生む危険がある。そのことに
留意していることは読みとれるが、やはり、
少なからず足をすくわれているのだ。

奸演者がない訳ではない。が、総体として、
戦争の被害者としての庶民のなかに潜む加害

者としての側面、困難を生き抜く生活力の裏にへばりついている八長いものには巻かれるVの知恵、無知な誠実さ——そうした矛盾をいっばいにはらんだ人間像の造出、さらには彼らがつかり合うことによって矛盾が深まっていくという舞台には、手が届かなかつたということである。

そうしたなかでしかし、町内会長役の演技がひととき眼をひいた。

川崎造船の下請会社の社長でもあるこの男は、町内の女たちを工員として使いながら、楠正成を祀る湊川神社を神戸の誇りとして、人々に忠君愛国と滅死奉公を説き、戦意昂揚をわが使命と感じている。常に鉄かぶとを背中に、ゲートルを巻き、いわば銃後の完全装備で町内に眼を光らすその姿は、滑稽であると同時に、なんとも怖ろしい空気をかもしだす。この男が戦局末期、自分の工場で爆発事故をおこし、兵器——といつてもくずのよなものなのだが——の生産計画を狂わせてしまう責任にさいなまれる姿は、一転して哀れの限りの様相を示すが、滑稽さもその極に達しゆく。

くそ真面目に、ひたむきに演ずれば演ずるほど、彫りの深い人間像が現出し、喜劇性は

増幅される。この秀逸な演技をつくりだしたのが、「雨——」の演出者三村省三だというのは、偶然の一致ではないと思う。

全体が彼のレベルに達し、しかも相互にみ合っていけば、舞台は一層奥行きが深いものになったであろうと惜しまれるのだ。

初演ということで、磨きをかける余裕はなかったろうとか、一部、二部と続けてきての疲れもあったかもしれないなど、いろんな事情は考えられぬことではない。しかし結果は舞台である。再度言うようだが、四紀会なればこそ受け止めてくれるだろうと思つて、高度な注文をつけているのである。

こうした問題点を残しながらも、しかし劇団四紀会の、「雨」となるらむ風となるらむを頂点とする、神戸庶民伝三部作の連続上演は、演劇が俳優を中心に押し出すアンサンブルの芸術であることを、改めて示してくれたとも言える。そのアンサンブルは、個々の力量の加算の上に成立するものでは決してなく、相互信頼の精算の上にはじめて成立し、また成長していくものであることをも。

あとは駆足になるが、昨秋の観劇のななか

ら、いくつかの問題点を語り足して、この稿を終えたい。

プレヒト作品の上演が重なったことが、ひとつ特徴的だ。

劇団どろの「ブンティラの旦那と下僕マッティ」——合田幸平演出。

劇団大阪の「マハゴニー」——市川明の新訳、堀江ひろゆき演出。

そして全り演外だが、京都演劇教室の近藤公一演出による「魔波郷の掟——デス・バイ・ノーマナー」。

「ブンティラ」は私にとって、おそろしく退屈な舞台だった。一個の人間のなかに併存する矛盾が、緊張関係をもつものとして示されない。他人との関係においても同様である。いわば立体のなかに緊張感をもって存在する矛盾を、平面の上に展開図として描くような味気なさを覚えるのだ。どろのプレヒトはほとんどそのようになるのは何故か。

後の二公演は、オペラ「マハゴニー」市の繁栄と没落によって居り、それぞれにレジーが施されている。

劇団大阪はミュージカルと銘うって、二十数曲の創作曲への挑戦にも可成りのエネルギーを注ぎこんでいる。

そのチャレンジ精神に敬意を表するにやぶさかでないし、そこそこ歌もこなしている。が、そこそこの表現をどのように受けとめるかが問題だろう。私としては可成り辛い言葉として受けとめてほしいと思う。

しかしより大きく根源的な問題は、やはり民衆の側の矛盾の捉えかたであり、深めようであろう。なんぞく特に注意を喚起したいは、中心人物の一人、パウルのアナキーなエネルギーをどう表現しようとしたか——ということだ。

初期プレヒトの作品には必ず、アナキーなエネルギーを持つ魅力的であると同時に危険な人物が登場し、それが作品に私たちを惹きつけるキーを提示してくれる。

ところが「リアリズム」の世界には、アナキー悪という風に短絡的に捉えるか、あるいは深入りをする傾向が存在しはしないだろうか。劇団大阪は、明らかに避けることを選んでしまったようである。それではプレヒトの初期作品を上演する意味がない——とは言われないが、大きく減殺されることとなる、と私には思われる。

ことは単に劇団大阪だけの、あるいは初期プレヒト作品上演の際だけの問題ではない。

現実を舞台上に再構築するにあたって、割り切りよく表現することが鋭い科学的分析だと錯覚してきたことが、「リアリズム演劇」を衰退させたとも言えるのである。魅力的かつ危険なアナキーなエネルギーは、芸術にとっては解決することのない永遠の課題だろう。もっと正面から対峙しなければならぬのではなからうか。

新しく獲得した稽古場を、本格的な公演の場として、観客に開いてみせた公演が二つあった。

劇団未来の和田葉子作「ああウェディングドレス」——森本景文演出。

劇団息吹の岡安伸二作「別れが辻」——木田昌秀演出。

創造の根拠地たる稽古場公演なればこそ、規模は小さくとも、その劇団のアイデンティティを問う成果を期待したのだが、外された気がする。

特にその歴史の長さと、輝やける幾多の実績に対して敬意を抱くが故に、劇団未来とあの座付作者である和田さんには、厳しい注文をつけたくなるのである。

第二次大戦によって結婚の機会を逸した女

性を中心に、日常生活に投影される戦争の傷跡を描こうと意図しているのだが、なぜ戦争の話となると、ああも理窟っぽく説明的で、そこだけ独立したような場面になってしまいうのだろう。あくまで人間間の出来事の生き生きとした模写を通して描ききろうとせず、どうして安易な説明的描写に走ってしまったのか。キャリアの長い人だけに、惜しいというよりも、悲しみの方が先に立つ。

演出、演技陣に、小空間感覚といったものが、ほとんど感じられないのは何故だろう。芝居くさすぎるのだ。

劇団息吹は、これまでの劇団の体質とはちがう作品への挑戦をしたと言っただけだが、挑戦という言葉のひびきには、たとえ破綻があるにせよこれだけという突出したものを感ぜさせるものがあるのだが、それが見えなかったのは寂しかった。

まだまだ触れたい公演はあるのだが、すでに予定の紙数は大巾に越えた。

最後に、ユニークな活動を展開している、尼崎の劇団螺線館の近況について報告しておきたい。廃工場に舞台空間を構築しての、近松作品によるほぼ二〇日間にわたる長期公演

の快挙について。

「おなつ」——おなつ清十郎五十年忌歌念
仏より——嶋田三朗演出。

びつくりしたことの第一は、下手くそな役者のひよっ子たちが、近松の文休をそのままの朗々と語っていくのである。そのあまりの乱暴さで意味不明の言葉のやりとりには、はじめは啞然とさせられるのだが、やがて、この文休をなんとしてでも劇表現として成立させていくのだという意気込みに、力づくでねじ伏せられていくような、不思議な体験をさせられることと相成る。もちろん中心人物たちの好演もある。特に清十郎を演じた、とりのかなとはほぼ二年ぶりの対面だが、驚異的な成長を遂げている。彼女の存在を抜きにしては劇として成立し難かったろう。

第二に度肝を抜かされるのは、舞台奥及び客席の下手仕切りを取払っての、一〇〇〇坪におよぶ劇空間の現出だ。錆びた鉄骨にあたる照明のなかに、無数（とも思える）ローソクの灯りがきわだち、無限世界を観客の前にひらき、そこを遠ざかる由づりのおなつ清十郎のゆくてには漕がてがいない。

以前にも螺線館の活動については、丁寧な報告とつっこんだ分析が必要と本誌に書いた

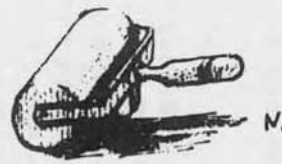
ことがあるが、今回もまたここまでで終るところを許してほしい。

全リ演関係者でどれだけの人が、尼崎の地で這いつくばるような活動を続ける彼らの生の姿に接しているか、これもまた問題だろう。

結びの言葉は書かない。というよりも今の私には書けそうにない。

ただ、芝居はやはり現場での作業だということ。だからそういう場に立ち得る人々にはうんと貪欲になってほしい、特に自分以外の世界とかかわることに対しては。

ということだけは、くどいようだが言いたいのだ。



あらゆる新型間接税に反対する

売上税は先に国会では国民的な反対にあり、廃案に追込まれたのですが、性根もななく再び直間比率の見直しとか、福祉目的税とか、安定した財源確保と称して持ち出し、国会にも提出したいといひだしている始末です。全く国民を愚弄するものといひてまちがいありません。

どんな理屈をつけようと間接税は大衆課税なのです。税の負担の公平を求める国民大衆の要求とは全く裏腹のものであることはいままでもないのです。それどころか安定した財源を求めながら防衛費だけ突出させ、いまや世界第三位の軍事大国となりつつあるのです。

大衆課税によって真っ先にしわ寄せされるのは文化であり、生活であることは間違いないありません。日本の文化を守り、生活を守り、平和を守るためにも、私たち全日本リアリズム演劇会議傘下の七二二集団はあらゆる諸団体と連帯し、この悪税に断固として反対することを声明します。

88年2月7日 全日本リアリズム演劇会議

劇評

新旧それぞれに……

——中部ブロック・11月～3月の上演から——

丸子礼二

(1) 五十や六十花ならつぼみ、七十八は働き盛り、九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ……（京都大徳寺内大仙院尾関宗園師作「長寿の歌」）歌ってくれたのは今井春さん、この三月で九十才になる。私達の劇団「演集」の元後援会員である。最近、名演小劇場の四階にある客席までは足がきかなくなつたので、観劇はこの所お休みであるが、新年会のようなパーティには、楽しみにして出席、前記の歌を聞かせて下さった。

もう一昨年になるが朝日新聞の「ひととき」欄に、今井さんの文章が載った。八十八になり、足が動かず目もよく見え、最近耳がきこえなくなりました。もう私は生ける屍になつたと嘆いていました、耳のお医者に行つたら大きなかたまりが、ポコリと出て、又聞えるようになりました。弱気になつたのがはずかしく（中略）出来ることをやってがんば

ていきます……という内容だった。短い投稿にせよ、一応の文章をまとめるためには人の知らない労苦を要するはずで、あのお春さんがこんながんばるのか、と感動した。それ以来私も、もう年だからと弱音を吐いたりしないことにしているのだが……。

(2) さて、昨年11月から今年3月15日までの上演は次の通りである。

劇団名古屋 創立30周年記念公演第3弾
11/13～15 名演小劇場 熊谷昭吾作 久保田明演出「夢・工場」 同第4弾 アトリエ公演その2 12/25～27 稽古場 別役実作 千田三郎・那須美穂演出「門」
劇団名芸 第31回公演 11/20～23 名芸平針小劇場 栗木英章作 片野耕治演出「夢家族」 第4回研究公演 2/27・28 名芸平針小劇場 北村想作 成田美佳演出「フェアリー・テール」

劇団はぐるま 第76回公演 11/20～22 岐阜市文化センター小劇場 姚一葦作 いずみ源次 陳顯・こばやしひろし演出「紅鼻子あか鼻のピエロ」 研究所第21期生中間発表 10/18 御浪町ホール 如月小春作 上野敏士演出「DOLL」 同卒業公演 3/12・13 御浪町ホール 研究生集団創作 上野敏士演出「リフレクション」
名古屋演劇集団 11/26～29 名演小劇場 園山土筆作 丸子礼二演出「落ちこぼれの神様」
岡崎演劇集団 創立20周年記念 第38回公演 1/30・31 岡崎市せきれいホール V・ローソフ作 野崎昭夫訳 八田満穂演出「とわに生きるもの」

劇団夜明け No.24公演 No.10小劇場公演 2/17・18・20・21 中津川コミュニティセンター 小寺隆昭作 青年劇場台本 鈴木弘文演出「かげの塔」
劇団すがお 員弁郡全小学校巡演 10/24～12/20（18校）各校体育館 桑名市子ども文化祭 11/3 桑名市民会館 新美南吉作 筒井敬介脚色 加藤武夫演出「花の木村と盗人たち」 第40回公演 創立25周年記念 桑名市制50周年協賛 3/5・6・桑名市生

会館 伍藤かずよし作・演出「有王塚由来」
劇団四日市 各子供会小集会上演 2月より
パース北村作・演出「土曜日のだいどろん」

…上野市民劇場は殆ど全員が劇団すがおの
「有王塚由来」に協力出演していた。

(3) 嵐で道路が崩れ、海辺のホテルに閉じこめられた人達…大実業家は息子の飛行機事故のニュースで半狂乱、彼に哀願する小企業の社長、スランプの作曲家と愛人、自閉症で人形同然の娘を連れた夫妻、そして旅芸人の一座。

その中に不思議な能力を示すあかい鼻の仮面をつけたピエロ——紅鼻子（なみ悟朗）がいる。歌い踊る明るい彼にかかると、一座を閉め出そうとしたホテルの支配人の心は解け、大実業家の心配はおちつき、作曲家に曲想が回復し…そして氷の様だった娘の表情が動き出す。一步、一步足を動かす娘小珍とやさしく手をのべるピエロの場面は張りつめた気持ちで見ていた。息子が無事らしいという知らせで喜んだ大実業家（藤沢伸二）がしぶい味を見せたいの買切りで芸人達が演じ出す。怪力男（熊崎閑示）がオートバイで、高い所から着地したり、座長の息子小猿（莊加真美）が切

れのいい個性を見せていた）を肩車にした林隆昌以下の一輪車…あまり褒めると、芝居よりそっちの方がよかった。みたいになってしまいが、修練の程に感心した。

盛り上っている所へ白い服の女性が出現して紅鼻子のマスクをむしり取る…何も出来ずに家出した商家の若旦那が彼の正体…仮面をつけて道化になることで生きる喜びを得た彼は、はるばる探しあてて、必死に説得する妻（松久美保）がしつかりと表現していた）に動かされ、遂にマスクを捨てる決意をするが、海で溺れかかった一座の踊り子を助けようとして、かえって水に没してしまふ。

涙を目に一杯ためて、自閉症の少女（河井せつ子）の口が開いて、ホン…ビー…ズ！と呼びつづける幕切れの感動が、台・中・日の協力を喜ぶ場内の感動につながっていた。久し振りに人の心の深みに触れた舞台を見せてくれた作者と、こんなすごい企画を支えた切った制作（加納美千子）に拍手したい。

(4) 家を新築したばかりのサラリーマン、泉大介は、職場演劇で「夕鶴」を共演したこともある妻の秀子、大学受験生の長男真一、女優志望の娘千恵と四人暮らし、しあわせそうだが

方は役作りとか、ストーリーなんか、気にしているとかバカにされてしまふそうである。

アルバイトでクリーニング店に働く少女が腹を立てた一言「こんな衣裳なんて乾かなきゃいい」に神様が共鳴して人類が亡びそう大雨を降らせる。彼女と知りあった俳優志望の少年を殺そうと追駆けるあやしげな終末教信者たち、「ドラゴン」を退治して姫を救えば雨が止む」と予言する神様らしき老人（柘植洋の）とばけた味はよかった。

「実は私は電話局につとめていました」

「実は私は検察局にアルバイトで」「実は私は空手部で…」と、少年がその都度弁解しながら種々な能力を発揮して、劇中劇で、童親分を倒して人質の少女を救出したり、本当の悪魔即ちドラゴンとして狂信者達をやっつけた…実は皆精神病院からの集団脱走だった、らしいという話になったり、そんなら、役者としては、単に自分の生地の上まで、「お伽話」を楽しく元気に喋って動いていればいいのか？…ところが、研究、公演なのか、よく判らなかつた。こんな世の中、洗い流した方がよい、とお伽話の世界に遊ぶにも、それだけの人生の裏付けから来る、想い、がないと、あまりにも無邪気な味のないドタバ

タに終わってしまうのではなからうか。

(5)

ドイツ軍の侵略で祖国が蹂躪されるのを防ぐと志願するポリースと、それを怒る世間知らずのヴェロニカ。ポリースのいとこのマルクは兵役免除を不正な手段で受け、やがてヴェロニカと結婚。モスクワにも戦火が迫り、一家はシベリアへ避難。そこにも不正な方法でせいに暮らす人達と、苦しみ耐えて、祖国防衛のために生きる人達の対立があり、やがてヴェロニカは、人間愛、とは

どういうことなのか理解し、不正を働く人々、夫のマルクの生き方を否定するようになる。

彼女は負傷して帰還したヴェロニカから、彼を救ってくれて戦死した人がポリースらしいと聞き、その場所スモレンスク郊外へ行っで見たいと願う。ラストシーンは三年後のスモレンスクで、記念碑の前、ポリースではなかった戦死者の名前がある。しかしヴェロニカは、ポリースの心を継いで生きて行こうと決心する…と、あらすじを書いて、ローズの大作の中でぶつかりあう人間の心の葛藤はとて表現できない、八田満穂演出のもと、岡崎演劇集団の演技者達はよく動かされてはいるし、戯曲の内容もかなりよく伝わって来

心はそれぞれバラバラなのである。

所が、技術畑の彼に電気メーカーの会社の上司は、新しい電気製品の仏壇（？）のセールスマンとして東京への単身赴任を命じる。

新居と家族からはなれ慣れない街を、ラーメンを食糧に歩きまわる大介、善良さとペーソスを軽く表現する栗木英章の自作自演は何ともいえず可笑味と、その中にひそむふてぶてしさを感じさせて、うまい。妻秀子のおっとりした中になんとなく女性の執念を見せた坂野加納子のフィリングがよく、この所名芸の演技陣に文句を言いつづけて来た私もこの舞台はけっこう楽しかった。

父の旅先きの情事に、オーディションのため上京した娘がぶつかってしまったり、単身赴任者が会社のために心から元気で働いているPRビデオの制作のため一家をそろってニコニコさせられたり、結局父が団地の階段から落ちて骨折、会社からも人員整備され、どん底で一家が心のつながりを取り戻すというお話…うまいとは思いますが、一寸軽すぎた…

この上演が十一月、そして年末の休みを挟んで僅か三ヶ月後には、「研究公演」として北村想作の「フェアリー・テール」をやるのだから名芸さんも忙しい。もっともこちらの

だが、全体として演技陣に荷が重すぎた様である。シベリアで同居するしつかりした学校の先生アーンナの鈴木かよ子、その息子の帰還兵ヴェロニカの亀崎浩二の明るいハッキリした形象、姉イリーナの梅田恵美子の三人はそれでも、見ていてうなづける所があった。他の諸氏も、それらしい形象にはなっているのだが、悪役らしすぎたり、もう一つハッキリしなかつたりで、見ていて時々じれったくなつた…

(6)

鬼界ヶ島へ流された俊寛の苦しみは、前進座の舞台で何度も見たが、すがおの「有王塚」はその前後に、有王が旅の途次病に倒れて救われた寺で人々に物語りをし、死んでからは「有王塚」として祀られる話が付加されたものだった。俊寛の石垣正司がこれまでにない力強い表現力を見せ、妹尾太郎（上野市民劇場・福北弁）にいじめられるやりとりは充分見えたえがあった。俊寛の娘松子（小山七瀬・劇団FREE）も可憐でよかった。有王の病は歯から来たもので、当時松葉を使って膿みを抜いた故事から、有王さんの松が残っている、という話を紹介する新聞記者の上谷軍二（これも上野）もシブくてよかった…

観劇雑感

——「土くれ」「石るつ」「蒼生樹」「世仁下乃一座」「展望」
「文化座」「プレヒトの会」「東京芸術座」「東演」——

萩坂桃彦

「太陽の子」(土くれ)

開演に遅れてすではじまっていた満席の客席でやっと最前列に一つの空席を見つけて坐る。セリフを言う役者の口腔の中まで見える感じだ。表情もはっきり、しっかり見え、実によくわかる。それが演出(福田悦雄)の実に熱心な説明としてうつってくる。役者の自在に任せるのではなく、設定し、そこに誤たず立たせ、そして一言一言をかつきりと言わせるという、いわば建築士の仕事である。どの役もひとり残らず熱演だ。怒るにしろ泣くにしろ、かなり無理な姿勢でもそれに耐えている。そして、竟にやりとおす。テーマは明確だ。戦争の悲劇を負い、さらに差別される沖繩からの怒りである。(原作・灰谷健

次郎、脚色・山田民雄。)

主役のふうちゃん(谷合明美)は懸命の活躍である。かなり捲えられたシチュエーションにも耐えている。この役に必要な伸びやかさも役者からの自然さからではない。強いられたギクシャクさをのりこえようとしている努力の結果である。

キヨシ(中村克)、わかり易い演技だが、ちょっとズサンだ。

とにかく全員が何かにかりたてられている。満員の客席のはてりのおおいか、テーブルを伝えた熱心さからか、芝居を盛り上げたい集団の、あるいは個々の意識のためか、たとえ六さん(久藤忍)のセリフの過度な詠嘆調などは、その典型である。三人の若者たち(安原昇、相場宏、川村富雄)の年齢や気分を合せようとした、誇張された道化ぶりもそこ

れである。

以上のこしらえは悉く、前作「奇蹟の人」では成功して見せた福田演出であったが、同じパターンで「太陽の子」を塗りつぶしたのには誤算であった。(87・11・21 勤労福祉会館ホール)

「茜色の水原から帰って来た男」

(演劇集団石るつ)

前回公演の「ブギウギと真青な空」では、瓦礫の町角で奏でる敗戦エレジーを聞いたのだったが、これもやり切れない程の、痛ましいロボロボの敗戦秘話である。

境野修次という作者は、多少、あの戦争に体験の原点があるのかどうか、くり返しこうした題材で自分を痛めつけずにはいられないようである。

あつからんとした装置とも言えない装置である。食堂などによく見かける安卓が一つ、それを店に見立てて、うしろに二階に通じる階段が見える。それでもなんと昭和二十四、五年頃の赤線まがいの曖昧屋に仕立てている。おんなは時には自分でも客をとるらしい、この店の主人お玉(いとうエリコ)と看板を

張っている里子(匹田あき子)しか出てこないが、実はまだ四、五人は抱えている感じにはなっているが、手不足で省略されている。

もうひとり下働きの小母さん(勝又芳子)とこの店のたったひとりの男、お玉のヒモなのかボン引なのか有体不明の朝吉というのがいて、接客のほかにタツプを踊ったり、ハモニカを吹いたり、そういうことでは、これまでも使われすぎの感じの(従ってマンネリだが)手塚孝夫が、その役である。

店へ入れかわり客は現れるが、これも人手不足でいつも田中という男一人に限られる。その役者は阿達修こと作者でもある境野修次である。(これをばくはまじめに書いているのだ。)

もう一人登場する男に宮下(ひぐち丹青・演出も兼ねている)というのがいて、ヤクザの出入りで人を刺したらしく、自分も左肩に深傷を負って、この店にこがり込んでくる。里子の常客でもあるらしい。お玉と里子が介抱して、これを二階にかくまう。

次の場面はタイムスリップして、日本敗戦直後のソ連の捕虜収容所。

そこでは日本軍の上官が同じ日本の下士兵を死に到らしめるほどの酷使、拷問のシーン

が出てくる。これは例の、曉に祈る、で知られた吉村隊事件のひきつりである。

吉村隊長を思わせる田中義一は実は幕あきでみてきた、札ビラを切ってみせた客田中であり、ラーゲリイでことん田中に痛めつけられた兵隊の宮下が、肩に傷つけてころがりこんで来た、当の宮下であり、宮下は田中の手先によって消されようとしたのだったことがわかる。

茜色の水原下の惨劇の復讐怨念の決闘が、もう一度、東京下町で再現するのである。

宮下は田中に誣いられて囚えられたとき、愛情を交し合ったラターニャ(この匹田あき子がよかった)からもらったプラトック(布)を肌身はなさず持っていた。

宮下との対決で田中は土下座して謝るが、宮下は外に出るや田中の手先に刺されるのである。お玉は死に類した宮下を抱えて、「あなた、いい人だね」と啜く。折からの新聞の号外は朝鮮戦争勃発である。

以上の物語とは関係なく、フィナーレに玉子や里子や朝吉が銀座のカンカン娘を踊る。

これは観客へのサービスかと思うが、吉村隊事件のようなシリアスな素材と戦争と天皇制にこだわりつづける境野修次の作劇と下座

音楽を得意とする集団石るつがなにもかもいっしょくたにして手ばなしではうり出してみせる公演のあり方を、観客はこのあたりも笑って許すかどうか、もう限界にきているのではないかと思っただろう。

(87・11・28 深川江戸資料館小劇場)

「頭痛肩こり樋口一葉」(蒼生樹)

この劇団の前身がその一部分東演時代代によこはま青年座でもあるのでたまには観ることになる。もちろんそのことに別に意味はない。

公演のリーフレットのなかに樋口一葉の母多喜役の勝崎若子さんの「今回の演目が実現したのは我が劇団の寛容で心やさしい男性群のお蔭です」というのが目にとまった。

このことを三十分前に会場に着いたが、受付に向って長い観客の行列の出来ていたことと思ひ合せる。女性陣パワーの噴出かなと思う。そういえばこれまでの山本周五郎の「おたふく物語」や「つゆのひめまに」でその気配はあった。

井上ひさしのこの作品はよく知られているので内容について語る必要もないと思うが、

母親の多喜役が何かと辛抱役なのだ。ストーリーの流れにはのらないで、節目節目をコメディタッチでしめる難役だ。心もとなない女優さんでは成り立たない。勝崎若子は合格である。

作者の筆の伸びにのっては一葉の夏子（清水泰子）も、恨みがはらしきれず迷い出てくる、もと遊女の花螢の幽霊（渡辺孝子）も多喜が乳母となって育てあげた稲葉のお鉾（金山直子）も「にこりえ」のおりきを藉りた八重（浜田絹子）もそろって無難にやり了せている。ただお互いに競い合うのか、影響し合うのか一様にモノトーンになったのが惜しい。逆に話が平明になったという取柄がある。

こんどの芝居の働きでは夏子の妹の邦子（鈴木さゆり）に点をいれたいと思った。アブノーマルな人物揃いのなかでただひとり健全な常識人として生きている。天才の姉を誇りに思い、苦しい家計を背負っている。いたけな姿がよく出ていたと思う。勿論、凄艶さといったものをいくらかは漂わせた花螢の演技や多喜とお鉾の、誰が世の中変えたのサ、と囁きたる歌と踊りのおかしさなども相当なものである。

十景ほどの風景のリフレインは悉く七月十六日のお盆の日であるが、それをくりかえし変らぬ音楽（安藤久義）でつないでいく暗転の重復はさすがにあきてくる。切角の大道具（美術・内山勉）の転換も劇場の不備で気の毒である。

受付にもカーテンコールにもいっさい姿を見せなかった男衆は残らず裏方にまわったのにちがいない。演出スタッフは浜田重行、河住靖一、鈴木弘明の陣容である。花やいだ舞台の裏に彼等が廻ったその分だけ、井上ひさしが案出した、一葉が小説をかりての世間への男っばい怒り、この芝居は或は天皇制批判かもしれない鋭い切先をかわした気がしないでもない。とにかくそれはそれ、連日満員だったようである。

(87・12・11 横浜教育文化ホール)

「洞道のヒカリ虫」(世仁下乃一座)

小屋となった文芸座ル・ピリエは地下二、三階をぶちぬいた穴倉の感じで、もとの営業はわからないが、急上りになった客席の根元のところに二抱えもある角柱が立っている。摺鉢状の底が舞台である。(とだけ先ず言っ

ておく。)ともかくここで「洞道のヒカリ虫」とはドンビシャの演目である。

戯曲は八七年二月号の「テアトロ」に載っているので詳しくはそちらにゆずるとして、例によって、水道管、ガス管、電気や電話のケーブル線がはりめぐされた、大都市東京の地下道、それを何故か「洞道」というらしいという電話工事夫の前口上で芝居ははじまるのである。

これも例によってだが戯曲を読んで脈絡をつけることは殆ど至難のわざだ。ところが、作・演出の岡安伸治に手にかかると、判じものが解けるように、もつれた糸がはぐれるように、何ともわかり易い話になってくるから奇妙である。

ただ地下洞穴での労働者の生活からくる幻想の中に、大正十二年の東京震災を奇貨として起った朝鮮人虐殺が絡んでくるという仕組はわかりにくい上にもわかりにくい、という声はきいた。実はこのからくりは知るものは知っているのだ。東京湾にひきよせられた強制連行の朝鮮人たちが船の上で、戒厳令下の東京の軍隊や自警団の邀撃に遭って悶絶死するという設定は、一九七六年十一月上演の、説教節・小栗判官「賽の河原の船遊び」とい

う芝居で見せられている。それに下水道の汚物処理の例の「別れが辻」をかきねると、一見難解な岡安の世界も明々白々である。

岡安伸治という作者の中に地底を徘徊するような労働者が、或はトラック運転手となり(「太平洋ベルトライン」)、船底修理工となり(「ネームリング」)、原発工場の下請工(「とおやんせ」)となって何回繰り返えされようそれはいいこうにかまわない、むしろ彼のこだわりの根の深さに声援を送りたい気はするが、新作が自作の複合だったり復習ではないかという危惧だけは免れてほしいと思う。岡安の刃先が鈍ったとするのは早すぎる。

それにしても「洞道のヒカリ虫」の芝居作りは狂巻である。文芸座ル・ピリエの構造を二〇パーセント使いこなして、むしろ観客はところを失う。頭上の天井の梁に役者がとまって見せたり、あらぬところから鼠のように餌を出したりするのも演技とすれば、作品の思想などといって肩肘張ることもないとするかと思ふをなげたくなる。

その意味では「世仁下乃一座」はよくも悪くも急成長のプロになった。

(87・12・7 文芸座ル・ピリエ)

「まひるのちようちん」(劇団展望)

劇団内創作である。すでにこのタイトルで三十九本の芝居(場面)をつくり見せて来ているが、かれこれ五年ぶりにこんど三本をつけ加えた。

① No. 40 「押捺」

自転車に二人乗りの娘がつかまり、警官に訊問されて、少女のひとり韓国籍とわかり登録証明書に押捺がないというのが話のはじまりである。かの女の名はイム・ヤン・ジャという。日本名の呼び名は良子。かの女と大の仲好しの日本の少女の名も良子。その良子(樋口千鶴子)が「押捺」に対する疑問を、怒りよりも解らなさが先に立つ感じで、坦々とした口調で語ってみせる。かえってそれがうったえてくる。

② No. 41 「開発幽霊」

母ちゃんに死なれて残された父娘家族。母ちゃんは耕転機を運転していて、開発のブルドーザに接触して死んだのだ。開発の名のもとで農村の変貌の本質をあばく。

これを焼酎をのみながらボンボンと語るとうちゃん、そこへ命日の日とあって特別出演

の許可をもらってきたといってあらわれる母ちゃんの幽霊、このふたりの対話がおもしろい。父うちゃんの小島政男と母あちゃんの林陽子が自在の東北弁を駆使して飽きさせない。

③ No. 42 「サンタクルスの病院にて」

病院のベッドで寝たきりなのは、日本人移民の老婆、通称タキおばさんという。ここは南米ボリビア、サンタクルス。

タキおばさんを訪ねて来たのは日本のタケオと名告る遠縁の男。はるばるやって来た理由は日本に残してあるタキの土地の権利書の書き換え(譲渡)をたのみに来たのらしい。(このあたり聞き洩らして不確か)

ところがタキ婆さんはまるでそれにとりあわず、毫釐もして、全く話は別の、マサヨシという男の来訪を待っている。マサヨシというのはこんどの戦争に従軍した孫でもあるのか、婆さんは、日本の敗戦をみとめていない。なぜなら、今でもちゃんと天皇様は生きてござらっしゃるじゃないかという。敗けたなら生きてはるがいないという老婆のセリフはグサリとくる。

婆さんがベッドの下古いトランクからとり出したのは、タケオが期待した土地の権利書ではなくて、昭和二十年に発布された「在

外日本人に与うる勅語」の扁額であった。

老婆を林陽子、訪ねて来た男を小島政男、韓国籍日本人のカコトの日本語をはなす看護婦を樋口千鶴子、この三人で織つてみせる舞台の影りは深い。少数数の集団ではあるがそれを逆手にとった無視できぬ仕事である。演出は大沢郁夫。

(87・12・5 阿佐ヶ谷小劇場)

「斬られの仙太」(劇団文化座)

一九三三年(昭和八年)に書かれたこの作品の、三好十郎の仕事における位置づけは、すでに多くの人によって語られていることなので、下手に書くことをかく。

文化座の上演にあたっては西村博子氏の「百姓仙太はいま蘇るか」という、パンフレットに寄せられた一文にふれてもそう思った。「エンゲルスの『シテ・ガール』」に関するハークネス宛未発表書簡の公開(昭和七年七月)に触発された三好十郎が、それまでの、意図で現実を截断する、いわゆる唯物弁証法的作風から脱皮し、ほんとうに知っていることを生き生きと書くことと決意した、ちょうど転機にあたる作品」という指摘などもそのひとつである。

とつである。

三好十郎の転機(転向という言葉と無縁ではないだろう)については、これは改めて大きな柱を立てて考える必要があるけれども、斬られの仙太、で、どこか、三好十郎がもろ肌脱いだという感じがある位は言ってもいいだろうと思う。

その頃病床にあった愛妻操さんを抱えての経済的な必要もあって、この作品を「オール読物」などに売りこもうとしたことなども、それに加わる。この戯曲の随所に出てくる仙太の訴えは、折々の三好十郎のそれと重なって、迫ってくる。

真壁村の百姓仙太郎が、強訴のカドで百叩き所払いの仕置にあっている兄仙右衛門の救命を数願して路ゆくひとに土下座して合力をねがっているときに通りかかったのは、水戸藩士加多源次郎と長州藩士兵藤治之、そして利根の博徒の甚伍左の三人であった。これがキッカで仙太は百姓を捨て、渡世人となり、やがて加多の与する天狗党に加担してゆく。

そして天狗党の負ったとする使命・論理の矛盾、内部間の抗争、外庄(幕府と天皇府)への屈服という悲劇の中で、仙太は斬りすて

られようとする。それは天狗党の拳兵が博徒や下層百姓までも捲きこんだ単なる暴徒集団であるという指摘から免れたいとする、最期のおがきからである。

この仙太のドラマで武士(インテリゲンチヤ)と百姓(ひいては労働者階級)の離間を図り、天狗党(革命党)に対して不信を煽る劇として批判した政治的な発言(村山知義)も、三好十郎を一方の極に据えた、当時としては、必然的でもあった、もう一つの極であったかも知れない。

こんど全曲を見せた文化座の舞台で、そうしたことがまるごと見えてくるのがあるがたい。演出(秋浜悟史)の仕事は、仙太というひとりの無垢素朴な人間が辿られた、辿らざるをえなかった時代を背景とした悲劇、怨念の劇としてとらえたように思う。

幕あきの一八六七年(慶応三年)におきた「ええじゃないか」の狂舞(デモンストレーション)の群衆を白装束と肌襦袢でいるところや大詰で仙太の斬殺が図られる越前木芽峠(第九場)を迎える前奏で、遍路や行者たちの陰々滅々とした、六根清浄の行進がそれである。

それは見ていて切なく悲しいが、その分だけ

け観客の気持は仙太へ傾く。それはこの芝居の、かもし出すひとつの甘さへの許容となる。

若い頃燃え切った仙太(阪井康人)が第十場で様子の変わった気骨の老爺の表現に不足があったとしても許せるのである。仙太に惚れぬいた義侠肌の芸者お萬(佐々木愛)の綺麗すぎるのも許せるといったら叱られるか。

仙太のほうばい段六(小金井宣夫)の、その都度場面をうめつきたい仕振り、インテリ(武士)の苦悩を活かした加多源次郎(小倉警)、いかにも思想の凝縮度を具象化してみせた兵藤治之(伊藤惣一)、この劇に太い骨格を与えた甚伍左(湯浅実)などの活躍が、ともすると大衆劇になりそうなおどろきと、とくに文化座らしいのは女優陣を主体としたマイムやコラスのぜいたくをきわめた迫力である。フィナーレの民謡と手踊りの大合唱の中で早乙女衆に、鈴木光枝、河村久子、遠藤慎子というご馳走のあったのを知ったのは、帰りの電車の中でひろげてみたパンフレットによってであった。

ところでこれは全く別な話であるが、ぼくは草稿とおぼしきナマの原稿で、三好十郎の「襲はれた町」(一六三枚)を、いろいろないきさつがあって手に入って秘蔵しているが

昭和十三年四月の作である。「斬られの仙太」から五年後に書かれたものだが、題材は全く同じ背景で「天狗党余燼」である。この本は前進座に向けて書かれたことはわかるが、仔細はまだ調べていない。

実はこの原稿、昭和二十三年頃だったと思うが、当時の横浜葡萄座の梨地四郎につられて一度だけお会いできた三好さんにお返ししようとして出したことがあるが、この綴じ原稿の表紙の字はボクだが、中身はちがうから要らない、キミが持っていたまえと戻されたものである。いま思うとその後改稿されてもはや不要になっていったのかもしれない。手書きも誰かが写したのかもしれない。しかし読んでみると一字一句ひどく三好十郎臭いのだ。仙太に背中を切りつけられるようで、なんとなく、こわい。

(88・2・2 サンシャイン劇場)

「コーカサスの白雲の輪」

(プレヒトの会)

冒頭に「谷の争い」という土地の所有をめぐる二つのコルホーズのやりとりがある。これについては公演のリーフレットに演出者

(岩淵達治)の文章があるので先ずふれておきたい。

「戦後のこの時期のソ同盟の現実からいえば、こういう問題は当事者であるコルホーズ住民の意志は全く無視され、中央の委員会から官僚主義的な決定が押しつけられたと考えた方が自然であろう」とあって、たしかに上演の力点でこの序景にこだわるのは、ましてやいまの日本ではことさら感興を殺ぐかもしれないと思った。従ってこの部分をカットする上演も多いらしい。

しかし芝居の成り立ちで、これがあることの効用も無視できないと思うのだ。

こんどの「プレヒトの会」の上演でもその程度の配慮はあって、一ベルが鳴って、客席から岩淵さんが舞台上に上ってゆく。片手に手頃なプラカードが携えてあって、そこには「開幕前の討論」とある。つまり、この頭の部分「谷の争い」を客席の皆さんや出演者で話し合いますというジュエスチュアである。当然それはジュエスチュアであって、実際にそこで討論が起きていい筈のものではない。

つまりこれからはじまる劇中劇への橋渡しをしたのだ。何故ならこの劇の筋の語り手、進行役の歌手アルカディ・チャイゼが、トラ

クターの若い女運転手から「同志たち、この

ひとが歌の専門家アルカディさんよ」と紹介されてはじまる。一コマは欠かせない主要なモメントである。質朴で遅く親しみのあるこの語り手アルカディによって、どきどきするような大胆な転換、グルシユとアツダクを両極に据えてくりひろげる奔放自在なストーリーは、見てたのしむだけではなく、見ながら考えてくれ、この物語はかつてあった昔話ではなく、これからはありうる話として、君たち、割り込んで来てくれと手をさしのべてくる寓意劇としての恰好の設定である。プレヒトの会の舞台もそのこととして胸に落ちてくる。

とりたてて表現力の際立ちは見えぬけれどもの一人ひとりがしっかりと中身を受けとめていたまじめさと精一杯の奮闘ぶりが気持ちいい。あらためてプレヒトはおもしろいと思った。

グルシユ（森都のり）は甘いマスクで前半が好く流れに乗っていたが、後半きたえられてゆく辛味がほしい。アツダク（高橋伸）の無頼者になりきれず随所に善良さがのぞけるのがおもしろく、従者のシャウワ（永田陽二）を小粒にしたのがたのしかった。シモン（新城聡）が時にギター、ハーモニカの演奏に廻っ

ているのが目に入った。

多少面識のある人たちもいて、それには声援をおくることになる。斉藤文哉（建築技師、請願者、グルシユのいつときの夫となったユスブ、後半ではゆすり、大地主、老夫婦の片方）と大活躍である。この中で素面で見せたユスブがおもしろい。

富田正久も（建築技師、グルシユになぐられた上等兵、ユスブの葬式と婚礼に立ち会う僧侶、後半でちんば、大地主）と忙しい。原田あおい（ビジュアルガン・カツベキ、グルシユの兄の妻）も声質のすてきな女優さんとして知っていたが、やはり、維田修二（歌手アルカディ）と組んだ語り手の仕事がよかった。気ばらず、さりとて手抜きをせず、プレヒトそのものをたのしませてくれた演出（岩瀬達治）であった。

（88・2・3 ドイツ文化センター）

「ゼロの記録」（東京芸術座）

「ゼロの記録」の初演の戯曲（作・大橋喜一）は一九六八年五月号の「テアトロ」で読める。こんどの東京芸術座の上演に刺戟されて、久しぶりに振り返ってみた。

巴、四つ巴となって作者の胸底をるつぽとしてくりひろげられている。しかも、いやそれ故にか、作者のモノローグ（詩の型式をとったダイレクトな思想の表現）がある。万葉調の古歌にも思えるし、朔太郎ばりの象徴詩とおもえる作者の思い込みの世界。これをなんとか客席につたえようとすればいっそう混乱を招くと、作者をふくめて予想されたのが民芸の初演の舞台である。つまり全部カットされたのだ。

この処置はそれでよかったと思うが、では葬り去られた作者の、あのモノローグは何処へいったのか。どこへも行かずに作者の中に沈んでいたのがある。

一九六八年の頃はベトナム戦争におけるアメリカの敗北も日程にのぼっていたし、われわれは政治の局面でも文化運動の面でもホットであった。「ゼロの記録」の舞台とともに客席も燃えたのである。そうした背景から、作者の祝詞といわれたモノローグや原爆をうたった詩人峠三吉や歌人の正田篠枝や地下活動に潜る反戦労働者の登場がゆるされたのである。

二十年後、そのよまの再演では時代の錯誤

となる。加えて、今更原爆でもあるまい、という演劇の鑑賞事情。改訂本はその挾撃に遭った作業となった筈である。

しかしそれは折々の時代への適応性や衣がえのとりつくりで補えるであらうとは思えない。この劇が使命とした不変の真実——原爆弾投下時における日本医師界の狼狽、アメリカ占領軍による被爆実態調査の壟断、未解明の医学的状況下で悲惨な犠牲者となっていた被爆者たち、放射線障害の実状をなんとかしてきわめたいと、愚直ともいえる一徹さで喰らいついていた開業医小津に宿らせられた作者の憤り——を別にしてはありえなかったのだ。

モノローグは歴史の解明を兼ねた進行解説者にかわり、分岐していた片方の峠三吉たちの全部を落して小津を中心とした医学的リアリティに収斂したのが成功したと思う。

舞台から何ひとつサービスのない、重くて、長い芝居に客席は息をのんでいる。全力投球の東京芸術座の作風（演出・稲垣純）をうけとめた客席にも心ひそかに感謝したい気持ちになった。これ以上つけ加えることもないし出演者の仕どころにも格別注文もないが外人特派員（与那城正夫）と憲兵（井上鉄夫）の切

開業医の小津が佐野浅夫、博愛病院の院長が大滝秀治、事務局長は長浜藤夫、峠三吉をモデルにした詩人泉久松は梅野泰靖といった俳優たちの顔が記憶に甦ってくる。何よりも演出は現在劇団銅鑼の早川昭二氏であった。

しかし書きたいのはそのことではない。二十年ぶりでとりくむことになった作者による改訂の質についてである。

「この戯曲の欠陥はたえず痛感していたが改訂してみる自信がなかった。改訂して少しは変わるか？一向に変わりばえしないか？わからない。改訂は必ずしもプラスとは限らない。作者としては怖い。二十一年間で劇作家としてどれ程の成長があったのか。あるいは退歩さえしていないか、ともかく思い切って戯曲にメスを入れてみた」という、上演パンフでの作者の心配にこたえるのも評者のつとめかもしれないと思うわけだ。

結論から言うと、十分、作者はその不安を払ってもいい仕事になったと思う。

初演の本には、一九四五年八月六日の広島への原爆投下をゼロとおさえて、そこから起る、じつにいろいろなことが、或は被爆者や医師、医療の問題となり、占領政策への批判となり、平和運動となり、といった風に三つ

れ味のよさが印象にのこったこと、小津（林邦明）はこちらの好みでいえばどこか欠けた無頼の側面も一寸ほしいと思ひ、進行役係（をわり万造）に作者にかさねて、もう少し老けてもらって渋味がほしいなどと考えたのだけは間違いかもしれないと思ひたりした。

（88・3・5 砂防会館ホール）

「ハーベン」（劇団東演）

ハンガリーの作家ユリウス・ハインの「ハーベン」（持つということ・千田是也訳）について書くのは、これで二度目である。三年程前、京浜協同劇団の上演で衝撃を受けた。舞台についてはあとからいろいろと注文をつけたが、戯曲で扱われている世界そのもののスゴさには唖った。

一九二九年、ハンガリーの一農村で実際に起きた事件——その部落の三十一人の女たちが四十二人の男たち（大部分は彼の女たちの夫たち）を毒殺したカドによって裁判に付されたという事件——が下敷になっていた、かつて戦前新築地劇団で上演を企画したが検閲で不許可になったという話、これを千田先生にちか

に聞いたということもすでに書いた。

読者のために極めて簡単に物語のあらすじを書く。

貧しい寡婦アールタの娘マリイが、村の治安にたずさわっている憲兵伍長と深い仲になり、お腹には子どもを宿している。しかし伍長の安給料では世帯が持てない。もつとひどいくらしが待っているだけだ。

そのマリイが、産婆のケーベシュのおかみさんを頭目にした、寡婦たちの「殺人集団」ととりこまれるのである。

寡婦たちが考えたのは、マリイにひと目惚れしている村一番の物持ちダーヴィッドに嫁がせて目的を遂げることである。幸いなことにダーヴィッドは持病の脳卒中で明日をも知れない。マリイはお腹の子どものために決意する。ケーベシュのおかみさんから、どの寡婦たちもそれで成功していた「白い粉」を渡される。

恋人の伍長バルロー・ダニはダーヴィッドの死に不審を嗅ぎつける。その原因を告発すれば出世の緒口になる。どうやら父親の遺産のひとり占めを狙ったダーヴィッドの娘、跛足のジュオーフィの仕業にちがいないと踏むが、すべてマリイの犯行とわかって、幕がお

りる。

「おらはおめえの子ども、腹ん中におめえの子どものためにしたんでねえか」と叫ぶマリイ。だから告発されたのは、逆に伍長ということになる。

中身は以上であるが、実は、ストーリーもさることながらユリウス・ハイの描きたかったのは、この異常な事件を孕んだ村そのもの。一九三〇年代のハンガリーの農民や労働者の貧しさ、それを背景にして、治安や教会の偽瞞、村の寡婦達の陰湿なたたかい、左官屋、ワアゴー爺さんとその孫娘ロジイたちのひそやかな抵抗をやどした村、村そのものを象徴的に描きたかったにちがいない。

劇団東演の舞台は、はまり役、努力役、その他いろいろで、懸命に見せる。

はまり役では神父（近石真介）、ワアゴー爺さん（笹山栄一）、ダヴィッド旦那（大宮悌二）、憲兵曹長（側見民雄）、うってつけの表現力ではマリイの母アールワ（山田珠真子）、寡婦のビロー（腰越夏水）、レーツィ婆さん（矢野泰子）、努力どころでは伍長（根岸明）、左官屋（西村栄彦）、乗っていたのでは指物師（井上由起夫）、学校の先生の奥さん（宮地牧子）、医者（辻谷耕史）など、寡婦連

（伊藤典子、尾崎節子、野崎美子）もよくうごき、主役のアールワ・マリイ（益田俊子）は難役をこなした。ケーベシュのおかみさん（溝口順子）はもつと大胆に汚れてはしかった。

以上の達者な役者たちを使つての、なおかつ主題を鮮明にするという仕事（演出・松川暢生）には、もうひと押し、というのが初日の所感。

（88・3・10 俳優座劇場）



茜色の氷原から

帰って来た男

境野修次

登場人物

宮下
玉子
朝吉
あや
娼婦の里子
田中
野沢
ラターニヤ

プロローグ

舞台全体にブラーン（雪風）。

ブラーンの中に男の声で「野沢」「ラターニヤ」が、遠くで、かすれたりしながら聞こえる。ブラーン静かになる。

朝吉役がギターで唱う。

あてもないまま 歩いてみれば

夜の町 裏通り

すすけた子供の泣き面が

男心に切なかる

くわえ煙草に浮かんだ顔が

何故に寂しいネオン街

へあ、帰れない 帰ることもない

あ、帰れない 帰ることもない

①特殊飲食店「マリヤ」

カフェ様式で、テーブル、椅子があり、酒、ビール等並ぶ。

壁や柱は模造タイル、カウンターもある。

上手袖は入口、軒下に赤や紫のネオン。下手側に階段があつて、二階に（従業員娼婦）の部屋を通じる。

外では「お兄さん、ねえってば」「そこの素敵な方、遊んでいかない」等女達の声。

豆腐屋のラッパ、子供の泣き声や、それを叱る声。

ラジオからは「桑港（サンフランシス

コ)のチャイナタウン」が流れる。
お玉の三味線のつまびき……。

お玉 (手をとめて、二階に) 里子ちゃん、
里子!

里子 (二階から) はい……。

お玉 具合が悪けりや休みな。

里子 いま、行きます。

お玉 ……(三味を手にする)

あやが来る。

あや お玉さん、ちょっと、これ(一枚の写真を出す)。

お玉 何、これ?

あや 「花貞」に上った客が持ってたのさ。

酔っぱらって落としたから頂いて来た。

お玉 これ迄して客を取ろうって気かい、里子は。

あや 入れ墨の男から買われたんだと。

お玉 墨東組のチンピラだね。

あや 多分ね。

お玉 ヤクザの食い物になる位なら、この商

売やめるわ。

あや どの店の子だって聞かれて、びつく

りしたよ。「マリヤ」のお玉さんがこんなこと迄ってね……。だからさ、聞きたかったら、どうも、里子ちゃんひっかけられたんだねえ……。

お玉 畜生、八、九、三が!

あや 八、九、三?

お玉 三枚って博打じゃ八・九・三は負け目、

つまり役立たずってわけ。

あや それでヤクザかア!

お玉 朝が教えてくれたんだ。

あや 写真をとられて喜んでる店もあるってさ。

お玉 連中に手を貸そうもんなら、骨の髄迄しゃぶられるよ。ヤクザをヒモになんか絶対するなって、言い聞かせてるんだ、うちの娘達にね。

あや ……。

お玉 二度とやらせないさ。……(あやを見て)

ありがとう。

あや 実ね、ここん所、上手い具合に仕事

がなくてね……。

お玉 え?

あや お願ひなだけどさ。

お玉 ……これ(指で丸を)。

あや 悪いねえ。

お玉 いか程?

あや 二千元。……(金を受け取り) すぐ返すよ、家賃たまっちゃってね。

お玉 いいんだよ、したいようにさせてやって、一度しかない命、拾った人なんだから。

あや しょうがない。私みたいな女と一緒になってくれたんだ。戦争で両足吹っ飛ばされちまってさ……。

お玉 亭主の酒代稼ぐ為に働いている、って噂されたって、あやさんがそれで良けりや言わせておきな……。

あや 今週中には何とかするよ。

お玉 ある時払いの催促無しさ。身体だけ気をつけてやってね。

あや 苦しいんだね、あの人。

お玉 ……。

あや 若けりゃ「マリヤ」で働かせてもらうだけどね。

お玉 ……。

あや うちの人、酒が切れると、自殺するかもしれない。

お玉 店、開ける前に来てさ、掃除して貰うと助かるけど。

あや えっ。

お玉 それ終わってから、流しにまわって頂

い。

あや ありがとう

二階から里子がおりに来る。

お玉 本当に何でもないのかい(里子に)。

あや それじゃ、お玉さん(去る)。

お玉 (里子に) 無理しなくていいんだよ。

里子 何かばつとしない気分だな。

お玉 じゃ、休みなさいな。

里子 只、ぼーっとしていたい気分なの。

お玉 好きにおしよ。

里子 ……昨日のラストの若いお客、四時間かけて歩いて帰るんだって。ここに上るだけのお金しか無いんだって、あの子。大工かしら、こんな太い指して、職工さんね。ペ

コリと頭下げて帰っていった……弟、思い出しちまって……ああ、ゆううつ。

お玉 ……。

里子 よし、気分転換だ。ばっちり持ってる客つかまえよう。

お玉 里子!

里子 ……。

お玉 たちの悪い客には気をつけて……。

里子 そのお客、タクシー代貸そうかって言っ

たら、いつ来られるかわからないからいい、だつて。

お玉 そう、いや、そうね……。

田中が来る。

里子 あらっ、田中さん! おかあさん!

お玉 今日は、お早いこと。

田中 (里子に腕をつかまれ) 待て、待て。

里子 今日も上ってくれないんですか。

田中 はい(と包みを出す)。

里子 わっ、うれしい。また頂いちゃった。

お玉 いつも済みません。あら、私にも……何かしら。

田中 はて……?

里子 チョコレート? じゃ、ウイスキー?

田中 いいや。

お玉 ……兜を脱ぎます。

田中 その美貌に、一段と磨きがかかるって代物!

里子 化粧品かア!

田中 アメリカさんの一級品だぞ!

里子 素敵!(包みをほどく)

田中 恩着せがましいかな、明日の夜、二人

予約したいんだが……。

お玉 そりゃ、重ね重ね、ありがとうござい

ます。じゃ、あんたと二人でね。

里子 オーケー。

田中 これにホテルと時間が書いてあるから。

里子 (紙片を受け取って) これ部屋に仕

舞って来ます。あ、あの娘、可愛いやカン

ン娘、赤いブラウス、サンダルはいて……

(と二階へ去る)

お玉 今、泣いてた鳥がねえ。

田中 えっ?

お玉 いえ、こっちの話。

田中 何せ、いい子揃いなもんで、予約して

おかん。

お玉 お上手ですこと。

田中 お得意さんにはこれに限るんでね。

お玉 ゆっくりしていけるんでしょ。

田中 貧乏ひまなし、ひと仕事あってね。

お玉 まア、商売繁盛で!

田中 ここんとこ、景気悪いし、税金は一年

で三倍ときている。このままだと家族揃って

これだ(首に手を当てて、笑う)

お玉 田中さんがそんな、税金なんかいくら

高くなっても関係無しだわ。皮製品やメリ

ヤスを扱ったり、時にはお酒でしょ。

田中 まるで闇屋だな。

お玉 違ったかしら。

田中 商事会社なんだよ、これでも(笑)まア、去年の夏に復員してきた時は、私も職が無くてねえ、巷には、失業者があふれかえってたからね。叔父を頼ってこっちへ来たんだが、叔父の自転車屋は倒産、バラックの中で、一時は途方に暮れてね。我ながら、よくまア、ここまで来たもんだと思ってますよ。それもこれもね、軍隊当時の友人が、上手い商売してたもんで、一枚加えて貰ったってわけさ。戦友は、ありがたいもんだ。

里子 (二階からおりてきて) お待たせしました、どうぞ。

田中 いや、今夜はちょっと……

里子 疎開先から、奥さんと子供さん呼び寄せたから、仕方ないわね。(いたずらっぽい笑い)

田中 馬鹿いうな、そのうち上らせて貰うよ。

里子 家族揃って、おめでとうございます。(ニコツとして外へ出る)

田中 ……

お玉 本当に良かったですこと。

田中 うん。

お玉 生きてるのか死んだのかもわからずに待っている家族がいるかと思えば、ようやく

く復員したら、我が女房は、他人の妻だったね……

田中 女房、子供にあいたい一心だった。

お玉 戦争って一体、何なんでしょうね。戦争か。……旦那はシベリヤだったかしら。

田中 ああ。

お玉 私の弟は、南方でね。三十五になるんですけど、ブラブラしてますよ。マラリヤにやられたもんでね……

田中 ……

里子 (入って来て) ねえ、ホテルに誘われちゃった。四人一緒。

お玉 へえ、お客さん一人で?

里子 まさか。

お玉 そうだろうね、このご時世に、一人で四人も買えるような、羽振りのいい人、いるわけないわ。

里子 それじゃ、行って来ます。(去りかける)

お玉 羽をのばして、小遣い使い過ぎないようにね。

里子 はいはい。

お玉 ああ、そのお客さん、どういう人達。

里子 どうして?

お玉 ああ……別に。

里子 どうしたの、おかあさん?

お玉 だって、あんた、早く金をためて、堅気になるんでしょ。

里子 (笑いながら去る)

お玉は去って行く女達を見る。
女達の声、遠ざかる。

田中 堅気になるって? あんた困るだろう。

お玉 それはそれ。

田中 おいおい、店が寂しくなるよ。

お玉 こんな商売、誰がいつまでさせたいもんか。でも旦那ね、一人がやめりゃあ、又新入りが来る。いつになったらなくなるんですかね(笑い)

田中 ……

お玉 旦那! (写真を見せる)

田中 うん? 何だこりゃあ。……里子じゃないか。この男は? (写真を指す)

お玉 墨東組の仕業。どっかのホテルで隠しどりをされたんですよ。

田中 けしからん。全くけしからんよ。

お玉 今の所、あの子には内緒。

田中 可愛想に。駅前でコソコソ売ってたら買い占めてやる。

お玉 火に油注ぐようなことは止めて下さいな。でまわっちまったものは仕方ありませんよ。

田中 ……

お玉 同じ誤ち繰り返さないこと、これだけです。

田中 相手が墨東組じゃなア。

お玉 旦那も桑田とかいう男にたかられてたとか……。サロン「ハワイ」で、朝が見てたんですよ。

田中 ああ……

お玉 どうしたんですか。

田中 いや、酔って絡まれたんだよ。話も何もあったもんじゃないんだ。……じゃ、そろそろ失礼する。明日はよろしく。

お玉 仕事が終わったら寄って下さい、御馳走しますから。

田中 そりゃ、どうも。じゃ……

田中 田中が出て行く。入れ違いに、宮下が腹をおさえて入って来る。上下白の背広。ビッコをひいている。

お玉 お客さん、一人もあいてないんですよ。

宮下 ……

お玉 申し訳ありませんが、他の店にでも……

外で酔客らしい男の声。

「あの店、あそこだ、あそこ。」

「いや、こっちにしようよ。」

「ここだよ。」

宮下は外の様子を見る。

お玉 ……まア、掛けて下さいな。(ビールを出す)

宮下、椅子に腰をおろそうとして、よろける。

お玉 あッ(宮下を支えて座らせる)……こりや、ひどい。

お玉 カスリ傷だ。

お玉 見せてごらん。

宮下 いい。

お玉 何、意地はってんのさ。ちょっと待って(カウンターに入り洗面器等を持って来る)

背広を脱がすと、シャツの肩から胸に

かけて、真っ赤に染まっている。シャツを脱がす。宮下、痛みをこらえる。
朝吉が来る。

朝吉 また、ヤクザ共のケンカよ、駅裏の路地でさ、アホが……あッ。

お玉 あんた、アルコールに包帯、いや晒がいいわ。

朝吉 え?

お玉 何してるんだよ、早くってば。

朝吉 ああ(下手へ去る)

宮下 ……

お玉 亭主だよ。路地の喧嘩って、あんたじゃないの。馬鹿だね、命に替わりはないんだよ。

朝吉 (下手から) 晒が見つからねえや。

お玉 何でもいいからさ、それからさ、着替えも!

朝吉 (下手から) わかった、わかった。

宮下 痛え……

お玉 (笑い) 我慢、我慢。

朝吉が消毒用アルコール等、持ってくる。

お玉 脱脂綿にアルコールひたして、たっぶりね。

朝吉 あいよ。

お玉、朝吉から受け取り消毒する。

宮下 イタ……ッ。

お玉、笑いながら消毒を繰り返す。朝吉も手伝う。

お玉 お兄さん、墨東組かい。

宮下 俺は、ヤクザなんかじゃない。

お玉 (晒を示し) それ二つに裂いて。(朝吉が裂いた晒を受け取って) そこ持ってて(朝吉と二人で宮下に肩から斜めに晒を巻いてやる) 少しの間、じっとしてな。

朝吉、カウンターからコップに水を入れて持ってくる。

宮下 ……。

朝吉 水だ。

宮下、水を飲む。

お玉 (シャツを着せながら) ヤクザと喧嘩したって勝ち目は無いさ。

朝吉 相手は墨東組か。

宮下 そうらしいな。

朝吉 俺もあいつらはどうも好かねえ、なアお玉。

お玉 ああ。

宮下 お玉? ここは「マリヤ」ですか。

お玉 何か?

宮下 いや、ありがとうございました……。暖かい物でも作ろうか。

宮下 腹は減って無い。

お玉 じゃ、いらっしやいな(二階へ行きかけ) もしチンピラが来たら、合図するから押し入れの天井の張り板を押し上げて、隠れていなさい。チンピラの二人や三人、私にまかしときな!

お玉は階段を上る。宮下、朝吉に一礼してついで行く。

酔客の声、遠くで犬の声。

朝吉は酒を出して来て、一人で飲む。何か思い出したらしく、ぶッ、と吹き出す。

お玉、おりて来る。

お玉 どうしたのさ。

朝吉 あれ、あれさ、晒。

お玉 ああ、あれね。

朝吉 お前って女は面白くもおかしくもねえや。こういう時にやさア、何あれ、晒が無いって言ってたでしょってさ。そうすりゃ、あれは、俺の六尺禪……。

お玉 ふんどし!

朝吉 わかってたんじゃねえのか。

お玉 腹巻きかと思っていたんだ、……六尺ね(笑う)

朝吉 (笑) 奴さん、あの体で明日の朝、出て行けるのかい。

お玉 (三味線を取り出し爪弾きながら) 怪我人を放り出すわけにやいかないよね。

朝吉 ああ。なア、隠まっていることが、墨東組にバレたらことだぜ。

お玉 あの兄さんはお客ですよ、お客。朝吉 ああ。

お玉 びくつくことないわよ。

朝吉 どうも、一人殺っちまってるらしいんだ。連中が放っておかないぜ。

ん匿ってやるわ。

朝吉 おい!

お玉 数ある店の中で、ここを選んだのも何かの縁だよ。

朝吉 まア、お前がそういうならなア、俺ア別に……。

お玉 (例の写真を出して) 連中の仕業だよ。

朝吉 こりゃひでえや……。

お玉 わかるだろう。私が肩入れしているわけが。

朝吉 わかりやした。俺らも命はったア! 一世一代の舞台を踏んでやらア! ヘッヘッヘッ……。

お玉 (笑) はじまったよ。……一寸気になってんだけど。

朝吉 えッ。

お玉 私を知ってただろ。

朝吉 そりゃ、うちに止りたかったんじゃねえの。

お玉 そうかね、それだけだよ。

朝吉 他に何があるんだ……お玉、古新聞ないか。

お玉 えッ?

朝吉 床に血がついてらア。

お玉 あら、……(古新聞をカウンターから

持ってくる)

朝吉 何、読んでるんだ。

お玉 田中さん、義一って言ったよね。

朝吉 田中義一だよ。

お玉 ごらんよ(新聞を見せる)

朝吉 うん?! 連抑留者、まる、カザフ共和国、てん、カラカンドヤ収容所、てん。

お玉 ああ、じれったいね、芝居の台本読んでいるんじゃないだよ。

朝吉 つい、昔のくせでな。Y収容所の兵士諸君、帰還後一年になる。あの戦争の苦難を乗り越え、新たな人生を送るため、我々の友情と懇親を深めようではないか。同胞諸君の連絡を待つ。中隊長、田中義一。

お玉 どう思う。

朝吉 あの人が中隊長ねえ。うーん。一と月前の新聞だ。

お玉 あら、こっちにも出ているわ、たずね人の欄に!

朝吉 どれ……全く同じ文章だ。(記事を切り取る) まア、シベリヤからの復員者は沢山いるからなア(床をふきはじめる)

あやが入ってくる。

あや ちよいと、墨東組の桑田って兄貴分が殺られたらしいよ。

朝吉 やられた? 殺されたのか。

あや ああ、駅の裏手の路地でさ。大変な人だからだよ。

朝吉 あやさん、見たのか。

あや 私が見た時は、桑田はもう虫の息でさ、殺った男はチンピラ共と大立ち回り、ピッコの割にすばしっこかったねえ。腹刺されたけど、逃げちゃったわ。

お玉 墨東組は大変だろうね。

あや そりゃそうさ。何てったって、殺られたのが幹部級だろ、血眼で虱潰にあたってよ。

朝吉 じゃ、ここへも来るな。

あや ああ。

朝吉 厄介なことになりやがったな。

お玉 そうかア(屹となって)

あや その男匿まっていた日には、そら、大変ですよ。(と大笑いする)

お玉 警察は?

あや 駅前行ってごらんよ。チンピラとおまわりが血相変えてるよ。犯人の分捕り合戦にさ。

朝吉 どっちにしろんでも、いい事ねえな。

あや ええ？
朝吉 その男はもう終めえってこと。
お玉 ヤクザだって殺しちまえば殺人罪だ。
あや 二十五、六の身空でねえ。
お玉 余程のわけ有だったのかねえ。
あや ヤクザのもめ事なんか、私等にはわからないね。今夜は早いとこ、店じまいしたうら。
お玉 そうだね。

二階から物音。
人の唸り声が、かすかに聞こえる。

あや あれッ……。
お玉 ……。
朝吉 ……。
あや ……さてと、帰るか（二階を気にし）
お玉 あやさん、一杯やっていかない。
あや ……。
朝吉 そうだ、やろうやろう。
あや ……。
お玉 パーとやろうよ、陽気にさ！そのうち田中さんも見えろし、寝るにはまだ早いさ。
あや でも、私なんか居ていいのかしら。

お玉 明日から掃除して貰う人、もうすっかり身内さ。
あや ……。
お玉 朝さん、お酒用意して頂いな。
朝吉 おっと、合点（カウスターに入る）。
お玉 つぶれたって、朝に送らせるから大丈夫よ。さて、今夜はトコトン飲んじまおうね。
あや そうお、悪いねえ…。

再び、二階から、もっとはっきり人の唸り声。
三人沈黙。

②ブライン（雪嵐）

激しいブラインの中で、宮下と野沢がスコップで土を掘っている。
疲労、時々、手袋の手をもんだり、息を吹きかけ、暖を取る。
宮下 お前、トラックに戻れよ。
野沢 ……。
宮下 俺一人でやるさ。
野沢 やり上げなければ…。

宮下 その熱じゃ無理だぜ。
野沢 いや（仕事を始める）―あれッ（何かを拾い）オイ、芋だ、ジャガイモだよ、宮下！
宮下 えッ、まさか。（見て）何だ馬糞だよ。
野沢 これがか、お前、どこに目をつけてるんだ。わア旨そう！ 蒸したて、ホクホクして湯気のおがっている奴に、塩つけてさ、あ、たまらない。
宮下 ……（スコップの先で割ろうとするが、手がかじかんで、中々割れない）
野沢 止めろよ！
宮下 これは馬糞なんだ。
野沢 よせよ、よせよ。
宮下 今に解る。
野沢 俺が拾ったもんだぞ！
宮下 エイッ、好きなようにしろ。
野沢 お前にもわけてやるよ。
宮下 前に経験があるんだ。煮たった飯盒の中で、姿も形も崩れた物が、強烈な臭いを発してな！
野沢 ……（仕事を始める）
宮下 （仕事を始め）持っていくのか。
野沢 （うなづき）そろそろ正月だな。

宮下 餅が食いてエ。
野沢 こってり鯛をつけてな。
宮下 つきたての、柔らかい奴にな、（スコップを放り出し）ああ、やめた、やめた。トラックに戻ろう。

野沢 何本、柱たてた？
宮下 まだ、五本も残ってらァ。
野沢 夕食を取り上げられるぞ！
宮下 くそ…よし、水を汲んで来る。
野沢 何するんだ。
宮下 セメントがわりよ。
野沢 馬鹿、春になったら柱倒れるぞ！
宮下 そんな時は、こんな所、おさらばさ。（行きかける）
野沢 待てよ、待つんだ。（追おうとして、ふらつく）

宮下 大丈夫か。
野沢 ああ…畜生！（ふらつく）
宮下 休んでいろ！（行こうとする）
野沢 田中の目は誤魔化せないよ。
宮下 俺達は、あいつの道具か。
野沢 わかってるよ。だが、水のセメントはまずい。
宮下 あんな奴が、何故民主化グループのリーダーなんだ。

野沢 俺はな、田中がどうあれ、まず捕虜内の民主化が必要だと思っている。だが、あいつは日本人捕虜のことより、ソ連の大尉殿に尻尾振っている奴だからな。
宮下 元憲兵ってことがばれたら、シベリヤの強制労働収容所だ。民主化ってのは、憲兵を告発することじゃねえのか。（再び行こうとする）
野沢 ……（倒れそうになる）。

宮下 （野沢を支え）野沢、野沢。
野沢 ……。
宮下 トラックに戻ろう、な。

野沢 （腰をおろし）…毎晩見るんだ、彼女の夢をさ。杉木立の中で、髪がなびいて、何ともかぐわしい。物言いた気な眼差しに、ふと手を延ばすと、消えちまうんだ…いつも。

宮下 いいなァ、畜生、俺なんか、毎度食い物さ。昨日は秋刀魚だ。こんがり焼いて油の乗った奴に、大根オロシとしょう油をこってりかけてな。
野沢 旨かったか。
宮下 食う前に目がさめた。
野沢 そりゃ、もったいないことをした。

宮下 今夜又、見るぞ！
野沢 よし、俺もサンマ、サンマって唱えながらねよう。
宮下 彼女の方はどうする。
野沢 それも一緒だ。
宮下 贅沢だぞ（二人で笑う）
野沢 早く帰りたいなァ。ブーシキンの「太尉の娘」が読みかけだった…帰ったら…。
田中が来る。

田中 私語を慎しんで、作業に精出すんだ。貴様達の為に、我が中隊はトラックの中で待機せねばならんのだ、帰れんのだよ。
宮下 田中中隊長殿、野沢はひどい熱です。うん…俺は四十度の熱でも仕事した。宮下、中隊長殿と我々では、食い物が違います。
田中 何！
宮下 野沢をトラックに戻して下さい。
田中 その分、誰が作業するんだ。
宮下 このままじゃ、肺炎になりますよ。
田中 ノルマはどうする。
宮下 明日、取り戻します。作業を中止して下さい。

田中 駄目だ。

宮下 三十八度以上の熱がある場合は、あちらさんだって保障している筈です。

田中 ……

宮下 野沢、ついでに健康診断をして来いよ。運が良ければ、二週間位、オーペーにまわして貰えるぞ！

田中 特別休養室だ。ふん、俺の推薦が無いと無理だな。

宮下 兵隊を殺す気ですか。…作業が遅れたのは、土が凍っているからです。まるで岩だ！

田中 だから焚火をしただろう。

宮下 この辺は土質が固いんです。

田中 いい訳するな！ふん、野沢、貴様はト

ラックに戻れ！

野沢 ……

田中 早くしろ！

野沢 ……

宮下 いけよ、野沢。

野沢 すまん。

宮下 軍医に見せろよ。

野沢 ああ。(去る)

田中 さア、作業続行！お前等のお陰で、みんなは腹を減らして待っている。お前は食

事抜きだ。

宮下 ……

田中 何だ、その目つきは…。

宮下 ……

田中 作業をするんだ。(宮下、作業を始める) 今や俺はな、キャピタンイワノースキーの厚い信頼を得ている。現場監督も桑田兵長にまかされている。お前が喋れば喋る程、お前の立場は不利になる。

宮下 何のことですか。

田中 とぼけるな。

宮下 ……

田中 貴様は神聖なる天皇陛下の軍隊内で花札賭博をやって儲けていた。俺が摘発し、金を没収した、忘れちゃいけないだろう。

宮下 ……

田中 貴様にも困ったもんだ(腕を組んで、

右手のこぶしで額を叩く) 魚心あれば水心。

なア、郷に入らば郷に従えよ。ここ(頭を指さし)使ってな。

宮下 ……

田中 反ソ的、反革命分子の摘発も、俺の仕事だ。お前をそのかで摘発することもできるんだぞ。

宮下 ……

田中 だからさ、余計なことは喋らない方がいい。

宮下 ……(田中をにらむ)

田中 まア、ゆっくり考えるんだな、ブラー

ンの中で…。(笑いながら去る)

宮下 ……

ブラー、更に激しく。暗転——
陽光できらめく氷原。

宮下がスコップの手入れをしている。

野沢が来る。

野沢 俺は決心した。ノルマの問題、田中の

独善的な労働配分。民主主義を手に入れる為に、このことを話さなくては前に進まん。

宮下 お前は弁が立つからなア。でも無理するな。あいつの手先は腐る程いるぜ。

野沢 ソ連側は内実を知らないんだ。他の隊

より成績がいいということで田中を評価しているんだ。部下の意識を革命的、献身的

方向に高めた指導者だと勘違いされているんだ。まず田中だな。

宮下 あいつに話してわかるかな。

野沢 とに角、やってみるさ。

宮下 いいか、野沢、油断するな、慎重にな。

野沢 わかった。…おい、ラターニヤだぞ！

宮下 うん。

野沢 ロシアって広いなア。こんなに日本人に似た人種が居るなんて、信じられなかったよ。ハラショー。

宮下 気をつけてな。

野沢 去る。ラターニヤが来る。

ラターニヤ ズドラスチイ(今日は)

宮下 こんにちは、ラターニヤ。

ラターニヤ (笑顔で宮下の手付を見ている)

宮下 ……(目が合って笑う)

ラターニヤ あなたが直してくれたスコップ

みんなとても感謝しています。

宮下 それは良かった。

ラターニヤ ミヤシタに頼めば、何でも直してくれますもの。本当に上手。

宮下 ……(笑顔)

ラターニヤ 野沢、元気になって良かったです。

宮下 あいつ、日本に待っている人が居るんだ。そう、ラターニヤのような黒い髪を持って、君のように可愛い人なんだって。帰ったら結婚するんだってさ。

ラターニヤ ミヤシタは結婚していますか。

宮下 いないよ。

ラターニヤ 日本へ帰ったら何しますか。

宮下 まず、秋刀魚に大根オロシで、銀シャ

リをのどが詰まる程食ってやるんだ。

ラターニヤ 銀シャリ？

宮下 リース。

ラターニヤ リースね。…ミヤシタ、食べる

ことだけ(笑)

宮下 それに海だ。嫌って程泳ぎたいな。

ラターニヤ 海、素敵ね。私の町、砂漠の中

の古い町だから、海知らないの。見てみた

いです。

宮下 ラターニヤに故郷の海を見せてやりた

いなア。きつと見せてやるよ。

ラターニヤ ……ミヤシタ、スパシーバ。

(自分の頭に巻いたきれを取って) これ！

宮下 (受け取る) ……

陽光の中に二人、シルエット。暗転——

③再びマリヤ

お玉、朝吉、あや。

二階からの唸り声小さくなる。

お玉 何、ぼんやりしてるのさ。支度支度。

朝吉 今夜の客は、やけに激しいんじやねえ

のかい。

お玉 余計な詮索はやめな。今夜は私も酔う

んだからね。

朝吉 承知の助。

お玉 そうだ、三味線でも弾こうか。

あや いいね。三味線っていや、いつも思い

出すよ。あん時のこと。ここを焼け出され、

着のみのまま逃げた時も、あんた、三味

線だけは離さなかった。

お玉 そうだったね。

あや 三味の音は生きてる証だったさ。

(朝吉、酒の用意をして二人についてやり

自分も飲む)

お玉 女房、子供を死なせた人は何て思った

かねえ。

あや だげどさ、火の粉かぶりながら、死体

にけつまずき、それでも生きのびて、腹ア

減らし、あてもなく呆然としていた時、そ

の音聞きながら生きてるっていい事だなア

とかみしめたものさ。

お玉 只、死んでたまるかってね、それだけ

を思ってた。

あや 何でもいいさ、さア、いきましよう。
朝吉 よつ、待ってました。(さつ、あやさん、飲みましょ飲みましょ)

お玉、三味線を弾く。

あや こうなったら、私もやらしてもらいましょ。

お玉 出ました、十八番。

朝吉 まかしときな。(楽器で伴奏)

あや お願いします。私は廊に咲く花よ。

泣いて別れた両親に月が鏡であるならば、映し見せたい我が心——ととしんみりしたかしら。

朝吉 それなら俺が——。浅草の舞台で踏んだタップをひとつ、ヘイ、ミュージック。

音楽、朝吉、タップを踊る。

やああって、田中が登場、ホロ酔い加減。

田中 ヤア、これはお賑やかなことで。(寿司を出す)

朝吉 寿司ですね。こいつは有難いや！(笑ってカウンターに入る)

お玉 ありがとうございます。さア、旦那、おひとつどうぞ。どんどんつけて下さいよ。

朝吉 はい、はいと。

あや 外の様子どうでした。

田中 何が。

あや 知らないんですか？やくざの喧嘩！

田中 又か……

あや それがね、一人殺られたんですってさ。

田中 そりゃア、事だな。銀座からタクシ

飛ばして来たもんでね。

お玉 豪勢なこと。

朝吉 さアさア熱燗でね。(田中に酌をする)

お玉 朝さんも、お座んなさいな。

朝吉 そうこなくちゃな。

あや 本当にまめな人なこと。珍しいよ、殿方でこういうの。

朝吉 そりゃ、惚れた弱味って奴でネ、ヘッ

ヘッ。

あや 御馳走さん。

朝吉 ヘ……(照れ笑い)

田中 うらやましいねえ。

お玉 旦那だっているでしょうが、自慢の奥方が。

田中 私の帰国が遅れたせいかな、どうも男ができたらしくて、まア、子供の為だと言っ

と一緒に暮らすようになったものの、何ともしっくりいかんところがあってな……

お玉 そつとしいてやりなさいな。いつか旦那の気持も解る時がきますよ。

田中 何だか、ここに居た方が、気持が安まるのさ。

お玉 そんな時は、何時だって、お待ちしますよ……

田中 いや、変な話しちゃったな、里子ちゃん達はまだかね。

お玉 ええ。

田中 例の写真のことは。

お玉 いずれ、折をみて話します。

朝吉 あいつら、まったく悪だよ。でもね、こう言っちゃ何だけど、兄貴分の桑田が殺られたんでホッと一息。ザマア見ろってんだ。

田中 えッ、桑田が、誰に？

あや ビッコで白い背広の男に。

田中 ビッコ！それで？

あや まだ捕まっちゃいないようだけど、時間の問題だろうね。相手は墨東組に警察だもんね。

田中 ……ビッコの男。

朝吉 旦那、心当たりでも。

田中 うん、いや。

朝吉 旦那も一安心だね、これで。ホレ、俺は見ちゃったんでね、サロンハワイでの出来事。

お玉 血生臭い話はおしまい、さア。(酌をする)

田中 そうだ、バアツとやろう、私がお酌しますよ。

朝吉 ずい分楽しそうですね。

田中 実は、今夜は一寸したことがあってね。

お玉 えッ？

田中 いや、商いの方が上手くいってね、何とも気分がいいのさ。(笑)

朝吉 旦那。(新聞の切り抜きを出す)

田中 これは？

朝吉 旦那に見せようと思ってね。何しろ同姓同名なもんで、ひょっとしたら……

あや (切り抜きをのぞく)……中隊長田中義一ですって。ヘエー(と顔を見る)

朝吉 旦那……いやまさかね。

田中 全くの偶然だな、何十万もの抑留者の中には、こんな馬の糞みたいな名前だ、居るもんだなア。私は、一兵卒でしてね……

外で数人が走る足音。

「兄貴、姫殿に白い背広が上っているって」

「ビッコか」

「わからねえ」

「急げ！」

走り去る足音。

あや (外をのぞいて)……とうとうみつかったか。

お玉 ……

朝吉 ……

田中 おや、どうしたんだい、景気良くやるんでしょ(笑)シベリヤか、過ぎちまえば辛い事も全部なつかしさにすり変っちゃうなア。冬になると、ナホトカの氷が溶けて帰還できるって噂があちこちで流れるんだ。そんな事でも考えなくては、あの厳しい寒さは耐えられるものじゃない。それを三年も繰り返してね……。凍傷ってのは恐ろしいもんでね。耳でも鼻でも、うっかりすると、簡単にもげてしまう。上の方の色が、青白く変わってきたら、一刻も早くマッサージさ。ロウの様に通き通ってきたら、一巻の終りですからね……。それにさ、外では絶対に立小便はしないこと！

朝吉 あれがもげちゃアネ。それだけはカンベンだ。(笑う)

一同、大笑い。

田中 それと風ね。捕虜になった当座はびつくりしたよ。あんな寒い所によくもまア、着物から靴の上まで一面、行列しているんだ。一晚中風退治で明かした日が続いた。結局、髪はもろろんの事、身体中の毛、全部そられちゃった。

朝吉 えらいこった。誰がやるんですかね。

田中 日本の兵隊がさ。床屋がいるんだ。何と、そり易いように、セガレの奴、右にやったり左にやったりしてやってさ。我ながら情無い恰好だったよ。(笑う)

一同笑う。

二階から、人の唸る声。

一同、沈黙。

ドアの開く音、廊下を歩く音。

沈黙。

④ブライン

激しく舞う雪嵐、宮下が出て来る。

宮下 野沢！……野沢！……。

ラターニヤがやっと追いつく。

ラターニヤ 見つかりませんか……。

宮下 ……野沢、野沢……。

ラターニヤ (下手を指して) あれは！

宮下 ……野沢だ！野沢、野沢！(揺する)

起きろよ、野沢。こんな所で、どうしたんだお前……。(何回も何回も起こそうとする) ……だめだ、死んじゃった。

ラターニヤ ……(宮下の肩に静かに手を置く)

宮下 ……お前、馬鹿だなア、こんな所で、一緒に帰ろうって約束しただろう……。

ラターニヤ キャピタンイワノースキーのところにいきましょう。どうしてこんな事になったのか聞かなければ、野沢が可愛想。

宮下、のろのろと立ち上がる。

田中 おう、宮下か。

宮下 貴様！(殴りかかる)

ラターニヤ ミヤシタ、待って！

宮下 こいつが殺ったんだ！(もがきながら)

ラターニヤ いけない、やめて！(夢中でしがみつく)

田中 野沢は脱走したんだよ。

宮下 嘘だ！ お前がやったんだ。

田中 証拠でもあるのか。

宮下 野沢は、民主化グループのメンバーで目障りだったんだ、だから殺った。

田中 ……仕事は辛くって逃げ出したんだよ、こいつは、ザマア無いよ。キャピタンイワノースキーにも報告してある。まもなく、ここに来るだろうよ。

宮下 貴様って奴は、畜生！

ラターニヤ ミヤシタ！(必死で止める) キャピタンイワノースキーが来るのよ。

宮下 わかった。今ここで調べてもらおう。

田中 うん、あなたは帰った方がいい……ドスビタニヤ、ラターニヤ。(ラターニヤの顔に手をかけ)

ラターニヤ 何もしないで、お願い。

宮下はうなずく。ラターニヤ去る(振り返りながら)。ブラーン激しく。

宮下 こうなったら、トコトン調べてもらうんだ。……もう我慢できねえ……。

田中 お前の言う事なんか取り上げるもんか。

宮下 元憲兵だった事も言わせてもらうぜ。田中 信じないさ。

宮下 そりゃア、向こうさんの勝手だ。お前さん、元憲兵ってことをばらされるのが、何よりこわかったんだらう。俺はやるよ……。

田中 宮下……。

二人、にらみ合う。

田中は、突然、スコップを取り、宮下に打ちかかる。もみあいになる。

宮下、スコップを奪い田中を打つ。田中うずくまる。

田中 (立ち上がり) 脱走だ、宮下上等兵が脱走を計ったぞ！(叫びながら去る)

ブラーン激しくなる。立ちつくす宮下。ブラーンの中でかすんで行く。

⑥ブラーンー半地下牢(一メートル半四方位)

ラターニヤ わかったのね。これ使って頂だい。……待って、(台を持ってきて乗り、小窓から毛布を入れる)

宮下 ありがとう。ラターニヤが来てくれなかったら、すんでのところで、あの世行きだった。

ラターニヤ もう少しの辛抱よ。キャピタンイワノースキーにお願いしています。

宮下 ありがとう、でも上手く行くだらうか。ラターニヤ 大丈夫。……あア、あと(両手で幅を示し)この位あれば……、そうすれば、あなたの顔を見ることができるのに。いいわ、明日はもっと高い台を持って来るから。

宮下 ラターニヤ……もう帰った方がいい。ラターニヤ 寒くない？

宮下 全然！何だか急にボカボカしてきたよ。ラターニヤ 良かった……あつ。

宮下 どうした？

ラターニヤ 誰か来る……。

宮下 早く隠れる、急いで！

ラターニヤは隠れる。

田中 来る。

田中 宮下上等兵、元気か。

宮下 ……。

田中 寝たら、くたばっちゃうからな。お前は、明日から未決拘留監房行きた。そして、軍事裁判だ。まア、十年の強制労働はまぬがれまい。気の毒になア、折角手なずけたロシア娘とい事やろうと思つてたんだらうに。残念ですな。俺達は、噂によると、来春、帰還だと。悪く思うなよ、ああ、それから、夜目を忍んで罪人に会いに来る奴は、日本人であろうが、誰であろうが許されないのだよ。ナア、宮下。

宮下 この下司野郎！殺してやる。

田中 ホウ、生きていたか。

宮下 俺は絶対に死なんぞ！覚えてろ！

田中 (笑い) それじゃな(笑いながら去る)

ラターニヤ (出て来る) プロホツラベウク！

宮下 ラターニヤ、大丈夫か。

ラターニヤ 本当に悪い奴。

宮下 ラターニヤ、早く戻って！

ラターニヤ ミヤシタ、居なくなるのね。宮下 感づかれたかも知れない。危険だ。戻れ！

ラターニヤ イワノースキーに頼まなければ……。

宮下 大丈夫だ、生きていればいつか必ず会える。さア、早く！

ラターニャ わかりました。気をつけてね、ミヤシタ……。

宮下 ラターニャも……。

ラターニャ 去る。

宮下、毛布にくるまって横になる。

ラターニャが明かりに浮かぶ。

暴漢が襲う。

ラターニャの叫び声。

宮下 (はね起きて) ラターニャ!!

激しいブザーンが続くうちに暗転。

⑥「マリヤ」

お玉、朝吉、あや、田中。

二階から宮下がおりて来る。

田中

お玉 少しは眠ったかい。

宮下 ……水を。

お玉 (カウンターに行こうとする)

あや お玉さん、あんた!

お玉 何?

あや ……。

宮下 ……。

田中 ……。

お玉 (水を持って来る、宮下に向けて) 坐りなさいな。どうしたのさ。(田中や皆に向けて)

田中 ……。

宮下水を飲む。

お玉 (宮下の額に手を当て) 寝てた方がい

いよ。

朝吉 医者、呼ぼうか?

宮下 ……田中義一さん、しばらく。

田中 えっ、どちらさんで……。

宮下 宮下ですよ。最後迄面倒みて頂きや

た、宮下喜八。忘れちゃアいまいが。

田中 さアて……。

宮下 皆さん、このお方は元憲兵って肩書き

を持っておりながら、何故か、捕虜収容所では、我々の中隊長だった。ソ連側に前身のばれる事を、恐れたんだなア。改革、推進、ノルマ達成の美名を嵩にかけてのし上がり、やりたい放題やってくれた。

田中 そりゃ、何かの間違いだ。

宮下 野沢とラターニャが犠牲になるまでは、

俺はあんたの事をあちらさんに売ろうなんて思いもなかったんだ。

田中 君の言っていることは、さっぱりわからん。

宮下 あんた、胸見せてくれよ。

田中 なんだ、君!

宮下 見せりゃア、解るのさ。

田中 失礼じゃないか、君!

宮下 人違いだと困るからな。俺がスコップでつけた傷を見たいんだ。

田中 ……じゃあ、見せてやるか。(シャツのボタンをゆっくりはずす)

宮下 ……。

田中 重戦車隊の火炎砲でやられたんだよ。

宮下 ……。

田中 あまり見せたくないものでね、……じゃ、ボチボチ失礼とするか。(額をゲンコで叩く癖)

宮下 一寸、待って下さいよ。(田中にゆくり近づき) 火炎砲だと、上手いことごまかしたもんだ。……いいか、桑田を殺ったのは俺だ。現場監督の桑田兵長を……。

新聞広告を見て、驚いたろうな。すぐに桑田を使って広告主を探らせ、その事をつき

とめた。お前はあいつに金をにぎらせ、俺を殺ろうとした。……桑田はな、死に際に、

お前が出入りしている「マリヤ」を教えてくれた。……どうだ、筋書き通りだろう、田中義一!

田中 ……。

宮下 桑田も汚ねえ。お前の居場所と引き換えに、何回も金をせびられたよ。拳銃の果

て、十万も要求したから、無いと云ったら、突然切りつけて来たんだ。……善人面は、もう沢山だ。(田中の襟をつかむ)

田中 俺は何もしていない。(振りほどく)

宮下 何!

田中 ソ連の囚人脱走者の仕業だ。ソ連当局も認めた。

宮下 まだ、しらばっくれろのか。

田中 戦争だ、戦争だったんだよ。俺だけじゃねえ。

宮下 貴様(とびかかると)

お玉 やめなよ(とめる) 死んだ者は二度と戻りやしないんだ。

田中 確かに、俺は憲兵だった。抗日分子を捕えて殺した事もあった。それだって、軍の命令だ、天皇陛下の命令だ、仕方なかった。そんなことを言ったら、向こうは取

り上げてくれない。バレたら強制労働収容所送りだ。二度と帰れないかもしれない。

俺は生きたかった、そのどこが悪い!

宮下 シベリヤの氷の下で眠っている野沢や

ラターニャはどうなるんだ。俺には、あいつらが本当に大切な宝物だったんだ。

田中 見舞金位は出してやってもいい、いくらなんだ。

宮下 金だ! (匕首を抜く)

お玉 おやめよ! (宮下の前に立ちはかかる)

宮下 どいてくれ!

田中 やめろ! 俺には女房も子供もいる。

お玉 また人殺しをするのかい!

宮下 田中をやらなきゃならないんだ。

お玉 この人を殺してどうなるんだい。

宮下 いいからどけよ!

朝吉 あんた、まだ若いんだ、これからじゃないか。

お玉 そうだよ。手を汚しちゃいけないよ。

宮下 そこをどいてくれよ! どけ! (お玉を突きとばす。よろめいたお玉は、丁度田中の盾になる。宮下、勢い余って突っ込んでくる)

朝吉 危ねえ! (お玉をはじきとばす。宮下の匕首が朝吉に……) うッ……。

お玉 朝、朝さん!

宮下 ……。

朝吉 うッ! 腕をやられた。たいしたことはねえ。

宮下 ……。

お玉 あんたのやろうとしている事は、こういうことなんだよ。

朝吉 お玉!

田中 宮下君! 悪かったよ、許してくれ。何故、あんな事ができたのか……ありゃあ、悪夢だった、そうだよ悪夢だ! あの事を忘れようと、それだけを覚えて、今日迄生きてきた。でも、払っても払っても頭から離れないんだ。この町へ来て、偶然に桑田と

、再会したお陰でな。あの新聞は桑田が持ってきたんだ。五十万で片をつけようってわけだ。出さなきゃ売られる。仕方なかった。

今のこの生活をこわされるのが恐かった。平和が欲しかったんだ。助けてくれよ! お願いだ。

宮下 ……。

お玉 ……やるのかい。やつちやいな。

朝吉 待、待てよ! そんな……。

お玉 (宮下につめより) きれいさっぱりとさ! 私を殺して、朝さん殺して、ここにい

る皆殺してさ。どうせ私等、あの戦争で一度は死んだも同然さ。あなたの気が済むように、殺っちまいな！……さア。

宮下 (たじろぐ) ……

お玉 大丈夫、あなたをうらんだりしないさ。……私にはちゃんとわかってたよ。初めてあなたの目見た時に悪い人じゃないってことがね……。

宮下 ……

宮下を見つめる一同。田中は縮み上っている。

やがて、宮下は匕首を床に置き、頭を下げて出て行くとする。

お玉 出ちゃいけないよ。

宮下 もう、いいんです。(出て行く)

ぐったりした田中。立ち上ると、一同の視線に逃げるように場を去る。
チンピラの声。
——いたぞ、！
——覚悟しやがれ！
——この野郎！
——やっつまえ！

バラバラと走って来る足音。
朝吉、あや外へ出る。お玉、戸口まで追う。

お玉 (ジッとみつめる、やがて) あッ(外 朝吉へ行く)。

舞台空虚。

——ざまアみやがれ！

立ち去る足音。舞台、次第に明るくなる。

朝吉の声——あやさん、医者だ、医者。

やがて、お玉が宮下を引きずって来る。朝吉も後から入って来る。

ぐったりと仰向けに倒れる宮下。

△作者住所▽

境野修次

(演劇集団石るつ)

260 千葉市幸町二丁目一三三七—五〇一

〇四七二一四四—三六二八

朝鮮軍が南に進行！号外！号外！号外！朝鮮半島で……！
宮下、お玉、朝吉に明りがしぼられる。

カンカン娘の歌が聞こえて来るうちに幕。

六八号後記

◇巻頭の発言欄が消えたのは一九七六年十一月の三四号を最後としてであった。それなりの理由があったのにはちがいないが、はっきり思い出せない。執筆者探しに疲れたのか、或は誰かがひき受けながら約束を果たしてくれなかったのか、いやそういう些細なことではなく、その頃さかんになってきた「地域に根ざす」大論議に席をゆずったのだったか。いづれにせよ消えた。

◇そしてそのことが十二年後の現在、多様な現状追認で手いっぱい、運動論、創造論の不毛とつながっているのに気づく。「発言」の復活で、往年の精気をとり戻したい。

◇土屋清氏の追悼特集は、昨年十一月十四日の見真講堂での盛大な「お別れの集い」の記憶とかさねながら、残された者の心の動きを語ってもらった。本誌にふさわしい言葉をいただくことができた。大橋喜一さんの「宇野さんは私の演劇の師」も、得難い追悼文になったと思う。

◇気がかりでならないのは、八月の、道演集と全り演共催の、全日本演劇フェスティバルの成りゆき。本号での扱いは表紙二面の記事にとどまったが、これを実らせるのは、全り演、道演集加監劇団の積極的参加以外にはない。呼び合い、援け合って、札幌、夏の「創作劇祭典」を何とか成功させたいものと、切に希う。

◇本号で欠落したものがいくつもある。レポート、関東ブロック新年の集い、予告記事、東会議創作部会(五月)の内容、及び総会(六月)、西会議の総会(八月)とあって、落ちつかない。小

豆島演劇祭に参加した世仁下乃一座の岡安伸治さんのレポートも実現しなかった。

◇小松徹さんが元気になられた。ご自分でも、こんなに早くとは、と気はすかしそうに言われている。早速、熱っぽい劇評がとどいた。もう一件、本誌編集の関係でいえば、長い間、西の編集委員としておなじみだった劇団未来の森本景文さんが、劇団四紀会の梶武史さんと交代された。森本さんは身辺猛烈にご多忙らしい。やむをえない。ありがとうございました、は儀礼ではない。梶さんには、よろしく、である。

◇さいごに書きたくないが誌代である。劇団通信依頼のはがきに、未納誌代にもご協力をと一律に書いていた劇団からお叱りをうけたが、あそこを書くのは余程のことだ。乞う御賢察。(もも)

演劇会議 六八号

編集委員

一九八八年四月二十五日発行
定価 五〇〇円(送料二〇〇円)
萩坂桃彦・こばやしひろし
丸子礼二・仲 武司・藤沢 薫

発行所

演劇会議 発行所
〒210 川崎市川崎区渡田四一—一三
はぎ書房内

電話 〇四四(三三三) 〇七七五

誌代振込は

川崎信用金庫小田支店 一三三三—二七
又は郵便振替 横浜 〇・一七二二七